斬魔大聖
ざんまたいせいデモンベイン
デモンベイン
DEUS MACHINA DEMONBANE
原作:鋼屋ジン
(ニトロプラス)
古橋秀之
ド・マリニーの時計
角川スニーカー文庫

# チコクダ、チコクダ
# タイヘン、タイヘン

――【ネクロノミコン・紛失（ロスト）ページ】
ド・マリニーの時計

憎悪の空より来たりて
正しき怒りを胸に
我らは魔を断つ剣を執る!
汝、無垢なる刃
――デモンベイン!
――アル・アジフ&大十字九郎

我は勝利を誓う刃金(ガネ)
我は禍風(まがつかぜ)に挑む翼
無窮の空を超え
霊子(アエテュル)の海を渡り
翔けよ、刃金の翼!
舞い降りよ――アンブロシウス!
――鬼械神アンブロシウス

斬魔大聖デモンベイン

ド・マリニーの時計

原作：鋼屋ジン（Nitroplus）

著：古橋秀之

角川スニーカー文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

DEUS MACHINA
DEMONBANE | CONTENTS

第一話 ド・マリニーの時計 007

第二話 遺跡破壊者（トゥームバスター） 081

第三話 破壊の序曲 193

あとがき 230

解説 鋼屋ジン 234

CONTENTS

第一話　ド・マリニーの時計

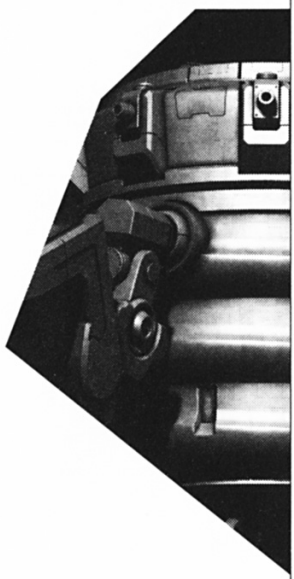
第二話　遺ト跡ウー破ムバ壊スタ者ー

第三話　破壊の序曲

あとがき

解説　鋼屋ジン

DEUS MACHINA
DEMONBANE
CHARACTERS
アル・アジフ
千年の時を超えて魔と戦う最強の魔導書『アル・アジフ』の精霊。
ハヅキ
シュリュズベリイによって記された魔導書『セラエノ断章』の精霊。
ドクター・ウェスト
魔術結社ブラックロッジに与するマッド・サイエンティスト。
ラバン・シュリュズベリイ
邪神に対抗すべく鬼械神アンブロシウスを駆る魔術師。
大十字九郎
アルと契約し、魔術師としてデモンベインに乗り込む三流探偵。
覇道瑠璃
アーカムシティの実質的な支配者である覇道財閥総帥。



# 第一話 ド・マリニーの時計

時は、大黄金時代にして大混乱時代にして大暗黒時代。歴史の大河が異常な熱を孕はらみつつ渦うずを巻く、混こん沌とんの時勢みぎり。

所は、運命の大メールシ渦ユトロームの中心、幾いく百ひやく万の人と人ならざるものの野望、欲望、熱望、そして希望と絶望が弧こを描えがいて混じり合う大魔ま道どう都市、アーカムシティ。

高層ビルの窓の灯、繁はん華か街がいを照らし上げる色とりどりのネオンサイン、大通りに等とう間かん隔かくに並ぶ背の高い街灯、その間を循じゆん環かんするヘッドライトの列──今宵こよいも消えることのない生命の灯が、闇やみを駆く逐ちくする都市の活力を、天をも衝つかんばかりに主張している。

だがその一方、街の灯と喧けん噪そうの届かぬ細い路地、単なる夜の闇よりも深い影かげの中には、忌いまわしい気配がわだかまっている。最さい先せん端たん都市のきらびやかな表の顔、その薄うす皮かわ一枚下に存在する、太古の地層から立ち上る禍まが々まがしい霊れい気きだ。

そして──霊気の水面に波は紋もんを立てながら駆かけていく、いや、跳ねていく者がひとり。

「タイヘン、タイヘン」

首から提さげた懐かい中ちゆう時計に目を遣やりながら、しかし、奇き妙みように感情のこもらない口調で呟つぶやくのは、十かそこらの年とし頃ごろの、エプロンドレス姿の少女だ。

頭には大きなウサギの耳、尻しりには大きなウサギの尻尾しつぽ、そして、背中には大きなゼンマイのネジが取りつけられている。まるで、芝しば居いの衣装──いや、無表情な顔やどこか機械的な跳ちよう躍やくの様子をも鑑かんがみれば「まるで、見世物舞ぶ台たいの自動オート人形マタ」と言うほうがふさわしいだろう。

「チコクダ、チコクダ」

　少女は十字路の真ん中で立ち止まると、周囲を素早く見回した。焦あせりや怯おびえの表情こそないものの、それは道を急ぐ者というより、追われる者の仕草だ。

　ゼンマイ仕じ掛かけのウサギ娘むすめを追っているのは、ギャング風のスーツ姿の男たちだ。各々、魔ま術じゆつ結社〝ブラックロッジ〟の戦せん闘とう員であることを示す奇き怪かいな紋もん様よう入りの覆ふく面めんを被かぶり、トンプソン機き関かん銃じゆうを構えて十字路の三方から迫せまってくる。

　右、左、そして後方を押さえられたウサギ娘は、残る前方に反射的に飛び出し、そして──

「タイヘン、タイヘ──」

　──ズボッ！

　と、路面に広がっていた段ボールを踏み抜いた。くたびれた段ボール板の下には、丸い蓋ふたを除よけられたマンホールがぽっかりと口を開けていたのだ。

　さらに、その瞬しゆん間かんを見計らって、

「どぅわ────っはっはっはっは！」

　ギャギャギャギャドッギャア────ン!!

　エレキギターを掻かき鳴ならしながら横っ飛びに現れたのは、狂くるえる天才にして世紀の逸いつ材ざい、最狂科学者「ドクタァァァァァ・ウェェェェストッッッッ！」その人である。

「ヒャッハァ──────ッ！　お美事！　お美事にござりまする！　この超ちよう・超・超天才たる我わが輩はいの考案せる『ドクター・ウェスト垂直落下式トラップ・ひとりでおちるもん！』に、見ィ~事に引ィ~っ掛かかってくれたであるなウサオー・ギちマイ・ゃんバニー！」

　考案もなにも、世間ではそれを単に〝落とし穴〟というのだが、

「あソレ、ハグしちゃお♪　ハグしちゃお♪　大人も子供もハグっ

てバニ――ッ!!」

　ギョギョ――――ン！　ペレポロペレポロピョイィ――――ン!!

　―本人が幸せなら、まあそれはそれで。

　部下の戦闘員たちも、その点をことさらに指し摘てきすることなく、というかごく普ふ通つうにスルーしつつ、ウサギ娘を捕ほ獲かくすべくマンホールに殺さつ到とうした。

　が―しかし。

「ぬッ!?」

　奇妙な光景が、そこにあった。

　数メートル下の下水に落ちて気絶するはずのウサギ娘は、段ボールを踏み抜いた瞬間の姿勢で、空中に静止していた。

　鎖くさりをつけたまま跳ね上がった懐中時計も、風を孕んだドレスの裾すそも、足元で深くたわんだ段ボールまでもが凝ぎよう固こしたようにその動きを止め、ただ背中のネジだけが、キリキリキリ―と回っている。

　かと思うと、

　キリリリリリ―！

　ネジが回転を速め、同時にウサギ娘は後ろ向きに飛び上がった。

　脚きやく力りよくでも身の軽さでも、魔術による空中浮ふ遊ゆうでもなく、「時間を巻き戻もどした」としか言いようのない動きだ。足元ではひしゃげた段ボールがしわを伸のばしながら浮ふ上じようし、マンホールの上を元通りに覆おおう。

「ンヘイタ、ンヘイタ」

　逆さ言葉を口走りながらウサギ娘は数歩後退し、それから再び前向きに、

「タイヘン、タイヘン」

　歩調を変えて段ボールを跳とび越こえ、ピョンピョンと駆け去っていく。

「ぬうッ、逃にげるか──やむを得ん、撃うつのである！」

　タタタタタン……ッ!!

　ドクター・ウェストの号令一下、戦闘員たちはウサギ娘の足元を狙ねらって機関銃を斉せい射しやした。数十発の弾だん丸がんがビルの外がい壁へきや石いし畳だたみを削けずり、そのうち一発が少女のふくらはぎを貫つらぬいた。

　破壊された脚から螺子と歯車をばらまきながら、ウサギ娘はもんどり打って転てん倒とうする。

　が──

「チコクダ、チコチ、ダクコチ」

　再び時間逆転。

　機械仕じ掛かけのウサギ娘は脚を破損前の状態に修復しつつ、ふわりと反転して起き上がり、

　!!ッ……ンタタタタタ

　数十発の弾丸が、射線を逆にたどって戦闘員たちの機関銃へ戻っていく。

　そしてまた、時間順行。

「チコクダ、チコクダ」

　何事もなかったかのように跳はねていくウサギ娘の背に向かって、

「ぬぬぬぬぬ、追えッ！　追うのであ────る!!」

　ドクター・ウェストはギターを振ふり回しながら駆かけだし「（ズボッ！）ぎゃ────ッ!?（どっぽーん！）」と、自分で作った落とし穴に落ちる。

　背後のくぐもった水音をふり返りもせず、ウサギ娘は跳ね去って

いく、が―

「―目ター標ゲツト確・ロ認ツク。無力化・捕獲するロボ」

　―ズガン！

　突とつ然ぜん落下してきた重量物にすさまじい打だ撃げきを加えられ、ウサギ娘むすめは細い首を一いち撃げきでへし折られた。

　ビルの屋上からの降下の勢いを利用した、武骨な金属製のトンファーによる打撃。その武器の使い手は、見たところウサギ娘より何年か年長の、小こ柄がらな少女だ。

　彼女こそはドクター・ウェストの最高傑けつ作さくのひとつ、美と闘とう争そうの化身、人オー造トマのテイ美ツク・女ビユーにテイし・アてンド野・ビ獣ースト―人造人間〝エルザ〟である。

　あらぬ方向に首をかしげつつ倒たおれるウサギ娘を、エルザは人形めいた無表情のままに見下ろした。

　と―

　ウサギ娘の背で、動力を司つかさどるネジがキリキリキリ―と回転し、

「タイへン、タイへン―ンへイタ、ンへイタ」

　時間逆転。ウサギ娘は折れた首を再生しつつ、体を半回転させながら、ビデオ映像の逆回しのように起き上がる。

　エルザのエメラルド色の瞳ひとみが、チィ……と機械的な音を立てて、ウサギ娘に焦しよう点てんを合わせた。

　―目標のダメージ：皆かい無む

　　目標の捕ほ獲かく：困難

対策＞追加攻こう撃げき

攻撃パターン選せん択たく＞トンファー・ラッシュ

　ジャキッ──エルザは顔の前で両りょう腕うでを交差させてトンファーを構え、そして、

「ロボッ！」

　ウサギ娘の目の前で体を一回転させながら、バックハンドで叩たたきつける。

　バゴン──！

　ウサギ娘の頭部がサッカーボールのように吹ふっ飛とび、壁かべや路面に打ち当たりながら転がった。

　だが、再びウサギ娘の背で動力ネジがキリキリと回転し、路上の首が小さな言葉を呟つぶやく。

「タイヘン、タイヘン──ンヘイタ、ンヘイタ」

　時間逆転。転がった首は逆さの軌き道どうを描えがきながら飛び上がり、小さな胴どう体たいの上にふわりと載のり、継つぎ目も残さずに再生する。

　エルザはひるまず、再びトンファーを振りかぶり、矢や継つぎ早ばやに叩きつける。

「ロボ、ロボ、ロボ、ロボッ!!」

　ドガ、ドガ、ドガ、ドガッ!!

　一方ウサギ娘も、キリキリと動力ネジを回転させながら、

「タイヘン、ンヘイタ、タイヘン、ンヘイタ」

　と、一打ごとに破損した体を再生していく。どれだけ破壊されても、まったく堪こたえていないようだ。

―攻撃パターン調整

> 攻撃ルーチンのリミッターを解除

：打撃回転数ＭＡＸへ

エルザはますます攻撃のピッチを上げ、ドラムを連打するようにウサギ娘の体を叩く。

「ロボ、ロボ、ロボ、ロボ、ロボロボロボロボロボボボボボボボ――ッ!!」

ドガガガガガガ――！

一見ただの我が武む者しや羅らな乱打に見えるが、これはそれな

りの理を伴ともなった行動である──要はウサギ娘の再生速度を超こえる高速連打によって、その体内にある時間操作機能を破は壊かいしてしまえばよいのだ。

　しかし、ウサギ娘も、背中の動力ネジを高速回転させながら、時間逆転の間かん隔かくを速めていく。

「タイヘン、ンヘイタ、タイヘンヘイタ、タイタ、タイタ、タイタイタタタタ──」

　頭部を陥かん没ぼつさせ、破片を飛び散らせたかと思うと、瞬しゆん時じに再生。

　背骨をへし折られ、大きくよろめいたかと思うと、ふたたび再生。

　心臓を貫つらぬかれ、オイルを噴ふん水すいのようにまき散らしたかと思うと、さらに再生。

　超ちよう常じよう的なまでの、破壊力vs再生力。

　無限に続く泥どろ仕じ合あいかと思えたふたりの勝負だが、やがて──

「タタタタタ、イ、タ、イ、タ……」

　動力ネジの回転数が落ち、ウサギ娘の反応が鈍にぶり始めた。

「ロボ……？」

　エルザがトンファーによる打撃を止めると、ウサギ娘は跳ちよう躍やくに備えて膝ひざを曲げ──

「チ、コ、ク、ダ……チ……コ……ク……」

　しかし、背中のネジの回転が止まると、その全身もまた、中空を見つめたまま静止した。

　先刻のような、時間操作的な停止ではない。微び風ふうに吹かれた長い髪かみはさらさらと動き、首から提さげた懐かい中ちゆう時計は胸元で振ふり子のように揺ゆれている。

　動力のゼンマイが、緩ゆるみきったのだ。

「―目標の動力停止を確認ロボ」

　構えを解いたエルザが呟くと、

「おおうエルザ！　でかしたのであ～～る！」

　ブーツをガポガポと鳴らしながら、ずぶ濡ぬれのドクター・ウェストが駆かけ寄ってきた。己が娘むすめとも言うべきエルザの勝利は、すなわち自らの科学力の勝利！　衝しよう動どう的感動のままにエルザの体を抱だきしめようとすると、

　ゴッ。

　金属トンファーが額ひたいに打ちつけられた。

「博士、ドブ臭くさいロボ。寄るなロボ」

「づおおおおう！」

　額を押さえてくるくると回転したドクター・ウェストは、痛みを紛まぎらすためか、あるいは単に錯さく乱らんしているのか、ギターを掻かき鳴ならして歌い始めた。

　ギャギャギャギャギャン―

「♪ドーブネーズミ、みたいにー、美しきワ～ガ～ハイ～～ッ!!」

　一方、エルザと戦せん闘とう員たちは、撤てつ収しゆう作業を始めた。機能停止したウサギ娘をてきぱきと拘こう束そく、封ふう印いんし、通りに乗りつけた車まで抱かかえて運び、その間、手の空いた者は機き関かん銃じゆうを構えて注意深く周囲を見張る。

　♪リンダリンダァ――ッ！

　　リンダリンダリンダ―ァ―

　　リンダリンダァ―ッ！

　　リンダリンダリンダ―ッ！

「リンダ、困っちゃ～～う♥　……あら？」

　ピックを天に突つき上げたドクター・ウェストがふと周囲を見回すと、路地裏には冷たい風が吹ふくばかり。ビルの隙すき間まに遠く見える車に戦闘員たちが乗り込み、エンジンを掛かける音が聞こえてくる。

　ドクター・ウェストはギターを振り回しながら、ガポガポと駆けだした。

「こら──ッ、我わが輩はいを置いていくな、であ────る！　なぜならばッ！　ウサギって寂さびしいと死んじゃうんだから！　寂しいと死んじゃうんだから！」

+

　時間ってものは、そりゃあ大切だ。

　時は金なり。光こう陰いん矢の如ごとし。少年老いやすく、学成り難がたし。

　社会の常識、人生の教訓。俺だって、それくらいは分かってる。

　しかし、頭じゃ分かっているのだが、分かるとできるじゃ大おお違ちがい。

　なにしろこの俺こと大だい十じゆう字じ九く郎ろうは、学成り立たず大学中退ののち、三流探たん偵ていとして自じ堕だ落らくきわまる生活をしている身である。ボロっちい自宅兼けん事務所にタイムカードなどという洒落しやれたものがあるはずもなく、通勤電車にも当然乗らず、また、依い頼らい人はたいがい寝ね起おきに不意にやってきては、尋ね人の写真を置いていくばかり。

　いや、それもたいていの場合は人じゃなくて、ポチとかミケとかタマとかチャッピーとかいった、つまり尋ね犬猫。アニモー一いつ般ぱんなのであった。

犬猫相手でも、仕事は仕事──とは言うものの、カツオブシをポケットに入れて「ターマ、タマタマ」とか言いながら路地をぶらつく俺の姿はどう見ても、勤労中の社会人というよりは近所のヒマなお兄さんだ。

当然、収入も大したものにはならず……その頃の俺の経済状態がどういった具合かというと、それはもう食うや食わず、生命に関わるほどの貧ひん窮きゆうっぷり。大都会アーカムのど真ん中にいながら、夜ともなれば灯の消えた室内に毛布を被かぶってまんじりともせず飢うえと寒さに耐たえるザ・サバイバルな生活の中では、時間がどうのとか気にしてる場合じゃない。せいぜい「陽ひが昇のぼったら教会に転がり込もう」といった算段をするくらいだ。

その程度の思案なら、猫ねこでもする。

実際、猫もしていた。

「──ライカさん、なんか喰くわせて」

「ニャー」

朝イチで教会を訪れた俺の足元をするりと抜ぬけ、薄うす汚よごれた猫がドアの中に入っていった。見た感じノラのようだが、なにやら通い慣れた様子。つまり、俺の同類である。

そして、

「ライカ姉ちゃん、ごはんー！」

「ごはんー！」

「ニャー」

キッチンまで飯の催さい促そくに来る教会住みの孤こ児じたち、ジョージ、コリン、アリスンと、例のノラ猫、それから俺──に対し、シスター・ライカはスープの鍋なべをかき混ぜながら、分け隔へだてない慈じ母ぼの笑えみを浮うかべる。

「ハイハイ、並んで並んで。順番ですよ～。まずは子供たちが最初！」

「はーい！」

「はーい！」

「はぁーい！」

「猫ちゃんはその次！」

「ニャー」

「働かないオトナは最後！」

「……ぬう」

　人の身に生まれながら、猫より下位のヒエラルキーに置かれるこの屈くつ辱じよく。

　──とはいえ、人間、喰うものさえ喰えば腹も立たない。

「ごちそうさまー」

「さまー」

「ニャー」

「げふー、ごちそうさん。それじゃまた！」

　俺がさわやかに礼を述のべて立ち去ろうとすると、ライカさんが目の前の席に着いた。

　大きな眼鏡めがねの奥で、優しげな目がにっこりと微笑ほほえむ。

「九郎ちゃん、ちょっといい？」

　で──

「──あのね、今はいいかもしれないけど、こんな生活、いつまでも続けられるものじゃないでしょ？」

「はあ、ハイ」

　例によって例のごとく、まったくもって正論きわまるライカさんのお小言だが、こーゆーのは満腹だと今いち頭に入って来ないもんですなあ。食後の優ゆう雅がなティータイムを彩いろどる環かん境

きよう音楽といったところですかな。んっふ～ん、リラクゼーション。

「九郎ちゃん、聞いてる？　ちゃんとお仕事を探してみたら、って言ってるんです」

「んっふ～……え？　あー、いや、仕事ならしてますって」

「あら、それってどんな？」

「えー、その……実は、僕は今、さる女性を捜さがしているのです。彼女の名は〝アンジェリーナ〟。毛並みがいいというのか、なかなかいいトコのお嬢じようさんなんですが、先日から行方ゆくえ知れずになっているとかで」

「……あらまあ」

「それで、依い頼らい人さんとしては、なるべく早急に発見し保護してくれと。なにしろ春ともなれば発情期―ゲフンゲフン、いや、なにか間ま違ちがいがあってはいけませんからな」

「それじゃ九郎ちゃん、こんなところで油売ってちゃダメでしょう。早く捜さなきゃ」

「いやいや、そこであせるのが素人しろうとの浅はかさ。この大十字九郎、緻ち密みつな調査計画を遂すい行こうする傍かたわら、スケジュールの合間を利用してこの教会の様子を見に来たというわけですよ。ライカさんになにか困ったことはないか、そしてまた、子供たちはおなかを空すかせていないか。いやしかし、みなさんツツガナイ様子で、なにより、なにより。はははは」

「……はあ」

　なんだか調子のいい話に、ライカさんは怪け訝げんな顔で首をかしげた。

　そこに、

「お皿、洗ったよ！」

「もう遊んでいい!?」

　と、食事の片づけを終えた子供らが駆かけ込んできた。

「ハイご苦労さま、いいですよ～」

　ライカさんがうなずくなり、ガキんちょどもは一いつ斉せいに俺の体にたかり始めた。

「九郎、遊んでやるぞ！」

「遊んでやるぞ！」

「──あっ、いけません！　九郎ちゃんには大事なお仕事があるんです！」

「はっはっは、そうだぞ～」

　俺は両手でジョージとコリンにアイアンクローを掛かけて体から引きはがしつつ、席を立った。

「いい子にしてたら、そのうちヒマを見つけて遊んでやるからな」

「なんだよ、一年中ヒマなくせにー！」

「ぶらぶらしてるだけのくせにー！」

「しっ、いけません！」

　俺の背に向かって悪態をつくガキんちょどもを、ライカさんがたしなめた──けど、

「見み栄えでもふりでも、働こうとしているうちはまだ望みがあるんですから、お話を合わせてあげなさい！」それフォローになってませんて。

　ともあれ、俺が部屋を出て行こうとすると、

「ちぇっ」

「じゃあしょうがないや」

　と、ジョージとコリンが言い、アリスンが部屋の片かた隅すみで皿をなめていたノラ猫ねこに声を掛けた。

「……アンジェ、いっしょに遊ぼう」

「ニャー」

　──なぬ、アンジェ……？

　俺は懐ふところから〝お嬢さん〟の写真を取り出しつつ振ふり返り、床ゆかの猫と見比べた。

　ノラ猫生活でボサボサに薄うす汚よごれていたために気がつかなかったが、この目、このブチ、この尻尾しっぽ、そしてよく見れば首輪に「アンジェリーナ」の標札……！

「見つけた────ッ!!」

　ドガシャ──ン!!

　俺が椅い子すを跳はね飛ばしながらタックルをかますと、

「　　ヤ──ッ!?」

　猫は全身の毛を逆立てて飛び退のいた。

「ぬおおおお！」

　俺は猫に向かって四つん這ばいで突とつ進しんしつつ、ガキんちょどもに号令を出した。

「ぼやぼやするな！　逃にげ道みちをふさげい！　そいつは俺の今月分の飯のタネなのだッ!!」

　すると、

「ええっ!?　喰くうの!?」

「食べちゃやだー！」

ジョージとコリンが俺にタックルをかまし、アリスンが猫を抱かかえて逃げ出した。

「うおお、こら待て――――ッ!!」

「　　ヤ――――ッ!?」

「ちょっと九郎ちゃん、落ち着きなさい！」

あわてて止めに入るライカさん。

遊びのつもりか、きゃあきゃあと笑いながら逃げ回るガキんちょども。

一方、俺と猫は本気モードで追おい駆けっこだ。

……ことほど左様に、ほんの数ヶ月前の俺は、おおむね猫と同レベルの存在だったと言える。

+

てなわけで。

「時は金なり」とは言うものの、その一方、「猫に小判」という諺ことわざもあることはご存じか。

つまり、時間というのはたいへんに価値のあるものだが、世の中にはものの価値を理解できぬ輩やからも存在するのです。たとえば俺みたいな。

分かりやすくまとめて書くと、こう。

（時＝金＝小判）→×（猫＝俺）

つまり、かけがえのない時間の大切さだとかなんだとか、ボクチン愛らしい小動物だから分かんニャ～イ。

だがしかし――

ここ、世界の首都アーカムシティのそのまた中心〝覇は道どう邸てい〟の執しつ務む室で、世界随ずい一いちの権力者たる覇道財ざい閥ばつ総そう帥すいに面と向かって、かつ、約束した訪問時間に三十分遅ち刻こくして説教されているという状じよう況きようで、はたしてそのようなラブリーな主張ができようか。いや、そりゃ無理だ。

「――私の話、ちゃんと理解しています？　大十字九郎さん」

と、眉まゆをひそめているのは、書類の積み上げられた重厚なデスクに埋うもれるように着いている、十代後半の娘むすめだ。

覇道財閥総帥・覇道瑠る璃り。

その冷ややかな視線に、俺は思わず背筋を正した。

立場やら肩かた書がきやらはさておいても、俺はこの娘の目に弱い。いつもまっすぐで、張り詰つめていて、どこか危なっかしい。

それも無理はない。アーカムシティはおろかアメリカ全土、いや、世界経済をも支配する、未み曽ぞ有うの巨きよ大だい財閥の統率者――という立場は、ひとりの少女の背負うものとしては、あまりにも重い。

「『我々には時間がない』――祖父は口くち癖ぐせのようにそう言っておりました。史上最大の富ふ豪ごうと呼ばれた人物にとってすら、〝時間〟とは金銭で購あがなうことのできない貴重な資産だったのです。それを、あなたは――」

そこまで言うと覇道帝てい国こくの姫プリン君セスは言葉を詰まらせた。目め尻じりに涙なみだが光っている。

彼女の言う〝祖父〟とは、覇道財閥の創始者、覇道鋼こう造ぞうだ。

覇道鋼造。アリゾナの砂金掘ほりから一代で財閥を興おこし、巨大都市を打ち立て、果ては世界の覇は者しやにまで上のぼり詰めたという大偉い人じん。その名には、俺のような一般人パンピーですら思わず居い住ずまいを正してしまうような、圧あつ倒とう的な存在感がある。後こう継けい者しやである瑠璃にしてみれば、巨人の影かげが四六時中頭上に圧のし掛かかっているようなものだろう。こいつはたまらん。俺だったら裸足はだしで逃げ出しているところだ。

しかし──両親を幼くして失い、唯ゆい一いつの肉親である祖父をも数年前に亡くしたという彼女にとっては、そんな重圧ですら、わずかな温ぬくもりのよすがなのだ。彼女が覇道の巨大な遺産を受け継つぐことを選せん択たくした、これが最大の理由だ。

指先ひとつで国家をも動かす、世界最大の富と権力を手にした少女。彼女の持っているものをうらやむ者は多いが、彼女が欲ほつしても持ち得ない、ただの小さな幸福に思いを馳はせる者は、はたしてどれだけいるのだろうか。

「……は、どうもすいません」

俺は素直に頭を下げた。

覇道の総帥にではない。目の前で精せい一いつ杯ぱい気を張っている、年下の女の子に、だ。

元来面めん倒どうごとの嫌きらいな俺が、ここ数ヶ月、しばしば命にさえ関かかわるややこしい怪事件に関わり続けているのも、幾いく分ぶんかは、彼女に対するそうした思いゆえのことである。

が──

「ふん、二十分や三十分で、なにをがたがたと」

空気を読まずに毒づくのは、見た感じ瑠璃よりもさらにいくつか年下の娘。俺の相方ツレ、〝アル・アジフ〟だ。

「そもそも、人を呼びつけておいて早いの遅おそいのと文句をつけるとは、汝なれは何様のつもりか。覇道の総帥とやらの時間は我ら

のそれより価値が高いとでも？　よほど高いところから物言うのに慣れておるようだな、小こ娘むすめ」

　──いや、おまえのほうこそ何様だよ。

　と俺は思ったが、どうもこの言葉は瑠璃の痛いところに触ふれたらしい。

「わ……私は人としての誠意の話をしているんです！」

　思わず財閥総帥としての重々しい仮面が外れ、瑠璃は顔を赤くして言い返した。

「あ、いや、すいません。人としてどうのこうのとかは、こいつの場合あんまり……」

　と、俺はアルの首根っこをつかんで持ち上げた。

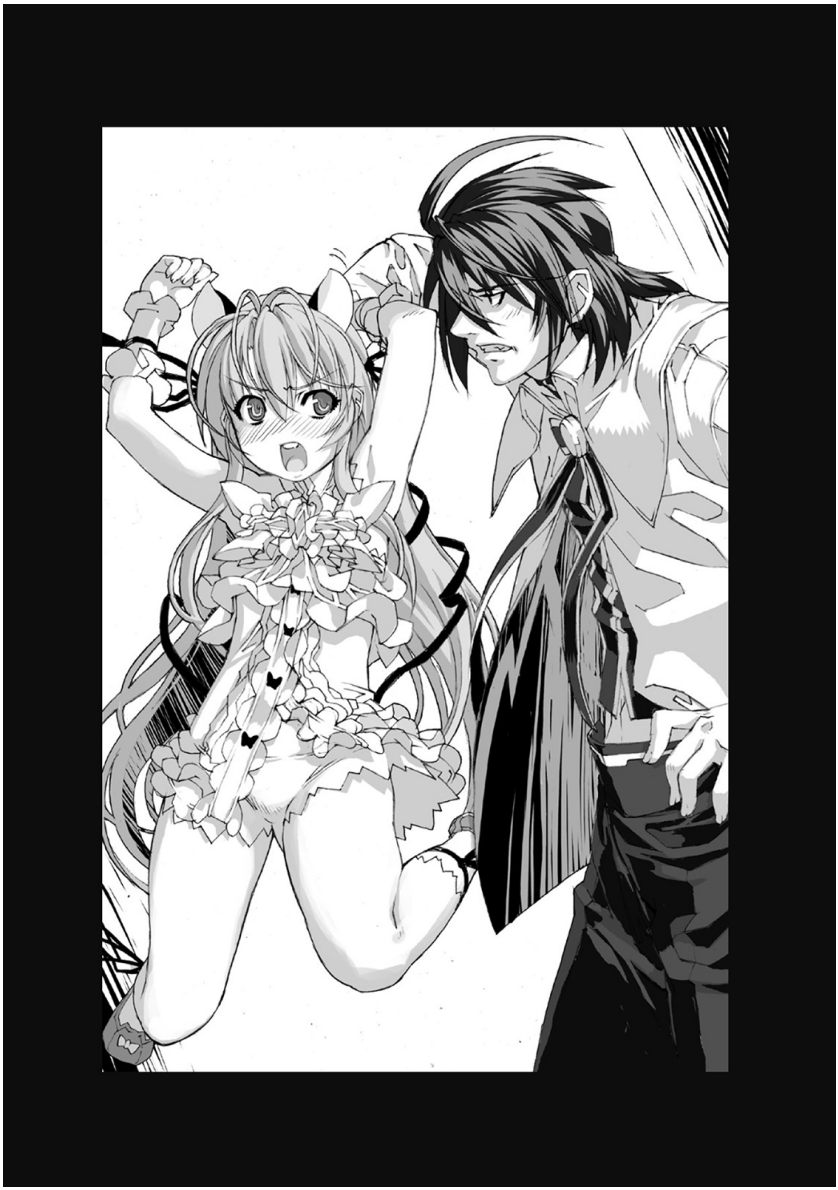
　──なにしろ、このアル・アジフは人間ではない。

【魔物アルの咆吼・アの書ジフ】──数多くの写本が存在する【死ネク霊ロノ秘ミコ法ン】の原オリジ本ナル。狂きよう詩人アブドゥル・アルハザードによって記され、齢よわい千二百年を数える最強の魔導書なのだ。

　つまり、見た目はロリでも、その正体は人外の妖アーテ器イフ物アクトの化身。根は悪い奴やつじゃないんだが、どうにも人情の機き微びには疎うとい。

「なにをする九郎！　はなせ、無礼者ッ！」

「いいからちょっと黙だまってろ、おまえは」



　じたばたと手足を振ふり回すアルを空中に吊つり上げていると、瑠璃がひとつ深呼吸して、俺に向き直った。

「……では大十字さん、あなたにお聞きします。本日の遅ち刻こくの理由は？」

「あ、えーと、一応昼ごろには起きようと思って目覚ましを掛けたんですが──」

　のっけからかなりダメな感じの言い訳を始める俺。

「──それを、こいつが壊こわしてしまって」

「うるさかったのでな」

　俺の手にぶら下げられたまま、腕うでを組んでふんぞり返るアル。

「ははは、こいつ、寝ね起おきは特に機き嫌げんが悪いんスよ」

「我が眠ねむりを妨さまたげる者に呪のろいあれ」

　瑠璃の顔が、みるみる真っ赤に染まった。

「……あなたたち、真面目まじめにやる気があるんですか！　このぐーたらコンビ！　おきらく夫婦めおと漫まん才ざい！」

　すると、

「──なんだと小娘！　汝のよく動く口も、今ここで止めてくれようか！」

　いきなり逆ギレしたアルは、細い腕を瑠璃に向かって突つき出した。その腕の数ヶ所がばらりとほどけ、複雑な魔ま術じゆつ記号を記しるした魔導書の紙片ページが展開する。古びた羊皮紙の中で何列かの記号が赤く発光し、生きているようにうねり、変形し、増ぞう殖しよくする。

　攻こう撃げき呪じゆ文もんを呼び出し、起動しているのだ。

「うわ、やめろ馬ば鹿か！」

　俺はアルの体を引っ張り戻もどす──が、

　ボッー！

　小さな手のひらから魔ま力りよくの塊かたまりが発射され、瑠璃に向かって砲ほう弾だんのように飛んだ。威い嚇かく用の、威い力りよくを抑おさえた打だ撃げき呪文ではあるが、不意に喰くらえば

怪け我がぐらいはするだろう。

その時。

──パン！

大きな音を立て、魔力塊かいが空中で破は裂れつした。

覇道瑠璃から数歩下がった壁かべぎわに影かげのように立っていた若い執しつ事じ・ウィンフィールドが、俺たちと瑠璃の間に鋭するどく割り込み、呪文を拳で叩き落としたのだ。

その働きに俺は目を丸くし、アルは怪け訝げんに目を細めた。人間業わざとは思えない素早さもさることながら……もし仮に、今のが致ち死し性の呪文だったならば、自らそれに触れた彼は即そく死ししているところだ。一いつ瞬しゅんにして呪文の性質を見切ったのか、はたまた主の身代わりとしての死を覚かく悟ごしているのか。いずれにせよ、常人にできることではない。

一方、瑠璃は眉まゆひとつ動かさず平然としている。護衛としての彼の働きに、全ぜん幅ぷくの信しん頼らいを置いているのだ。

「大十字様、アル・アジフ様──少々、言葉の行き違ちがいがあったように存じます」

ウィンフィールドが一歩踏ふみ出すと、俺は思わず腰こしを引いてしまった。まさかいきなり殴なぐり掛かかってきたりはしないだろうが、もし必要とあれば、この人は俺を打ち殺すことさえためらわないだろう。

緊きん張ちようのあまり変な愛あい想そ笑いをしてしまう俺に、ウィンフィールドはにっこりと微笑ほほえんだ。

「『時は金なり』とは、今は亡き大おお旦だん那なさまより伝わる覇道家の家訓ですが、それは覇道の時間に限った話ではございません。このアーカムシティにおける呪術的闘争の要たるおふたりのお時間もまた、覇道とアーカム、ひいては全世界にとって、かけがえのない財産である──瑠璃お嬢じよう様の仰おつしやるのは、つまり、そういうことではないかと……いかがでしょうか」

ウィンフィールドが瑠璃と俺たちの間を取り持つように言うと、

「ふん、上手うまく言いつくろったものだの」

　アルが鼻を鳴らし、

「……まあ、いいでしょう」

　と、瑠璃が言った。

「おそれいります。僭せん越えつをお許しください」

　ウィンフィールドが一礼して壁かべ際ぎわに戻ると、室内の空気はあっさりと元に戻り、引っ込めるタイミングを失った俺の愛想笑いだけが激しく浮ういている。

　瑠璃はそんな俺の表情をちらりと見ると、

「……それでは、本題に入りましょう」

　と言って、ウィンフィールドに渡わたされたファイルをデスクの上に広げた。

+

〝事件〟の説明をざっと受け、覇道邸ていを辞したのち、俺とアルは現場に向かった。これが今日の仕事ということになる。

　俺の職業は相変わらず〝探たん偵てい〟である。それも、これまた相変わらず、人間じゃない奴専門の。

　ただし──今の俺が相手にするのは、迷子になった犬いぬ猫ねこではなく、人知を超こえた怪かい事件を引き起こす人外の存在だ。

　たとえば異次元から現れた怪かい物ぶつ、たとえば禁断の力を操る魔ま術じゆつ師し、たとえば人間以外の者の手によって作られた魔術アーテ的工イフ芸品アクト──そんな剣けん呑のんなものどもへの調査と対応を、俺は雇いスポン主サーの覇道財ざい閥ばつから一任されているのである。

　アーカムに、いや、おそらく世界に唯ゆい一いつの〝魔導探

偵〟。〝魔術師マギウス〟であり、かつ〝探偵〟でもあり、時として荒トラブ事ルシ屋ユータでもある変な人。それが俺だ。

先にも言ったように、元々はただの犬いぬ猫ねこ探偵だったのだが、ある日、いきなり魔術師になってしまったのである。

具体的には、アルと出会い、〝契けい約やく〟を交わしたのだ。

その時、魔導書【アル・アジフ】は、自らの敵と戦うために〝主あるじ〟を必要としていた。彼女自身はその身に魔道の力を蓄たくわえた道具にすぎず、その力が完全に振ふるわれるためには、魔術師の素質を持った人間が必要だったのだ。

そこに現れたのが才能バッチリの俺である。

以前アルに、「なんで俺を選んだわけ？」と聞いたことがあるのだが、その答えは、

「うむ、たまたまぶつかったのだ」あ、そう。

偶ぐう然ぜんとはいえ、結果的に俺たちの相性はドンピシャで、以来、魔術師マギウスと魔導書グリモアの主従として、俺はアルに事務所に転がり込まれて生活を引っ掻かき回されたり、彼女の用事に無む償しようで協力させられたり、彼女を追ってきた敵に襲おそわれたりしているわけだ──って、あれ？　よく考えたらその辺は全部こいつの都合ではないか。俺、全然得してないぞ。

……まあ、いいか。

「実は人間じゃない」というのは盲もう点てんだったが、正体がなんであれ〝困っている女の子〟を助けるのは当然。あとはまあ、成り行きだ。

よく「優ゆう柔じゆう不ふ断だん」と言われます。

ともあれ──

「──マギウス・スタイル」

と俺が号令を掛けると、アルの体が何千という紙片にばらけ、渦うずを巻いて俺の体にまといつき、体にフィットした黒いスーツになった。

時には書物の、時には少女の姿となる魔導書【アル・アジフ】の、〝術マギ衣ウス・形スタ態イル〟。魔術師が魔導書の力を効率的に引き出すための、人書一体のフォームだ。

魔導書の紙面が、魔術師の全身の神経と接合した第二の皮ひ膚ふとなり、魔術的な感覚と呪術・物理両面における防ぼう御ぎよを司つかさどり、また一方では、発声による呪じゆ文もんとも指の動きによる結印とも違ちがう、呪術的記号の直接操作による呪式発動を可能にする。アル自身の呪文検けん索さくによるサポートと相まって、俺の魔術師としての能力は飛ひ躍やく的に上がるのだ。

簡単に言えば、全身を使って何十もの呪文を同時に操れるようになるってこと。

たとえば、このように──

俺はスーツの一部をコウモリの翼つばさのように広げた。その表面に複雑な飛行呪紋が浮かび、そして、魔マギ術ウス師・ウのイン翼グは力強く羽ばたくと、俺の体を軽々と持ち上げた。

高層ビルの隙すき間まを縫ぬうようにして、俺はアーカムの空を飛ぶ。

空中からの目印となるのは、覇道邸の広大な敷しき地ちを中心に放射状に延びる大通りと、街を東西に横切るミスカトニック河、それに、ミスカトニック大学の大時計塔とうだ。

──〝事件〟はダウンタウンの一角で起こったという。

レストランの裏のゴミバケツに頭を突つっ込むようにして死んでいたひとりの男。

浮ふ浪ろう者しやの孤こ独どくな死と言えば、痛ましいながらも、都会ではよくある話である、が。

その死体が、異様な状態を示していた。

ある部分は体温が残るほどに生々しく、ある部分は腐ふ敗はいし蛆うじが湧わき、ある部分は枯かれ木のように干からびている。死後硬こう直ちよくの進み具合もまちまちだ。

つまり、〝時間的なつぎはぎ死体〟。ひとつの死体の死後経過時

刻が、部分によってまちまちなのだ。

　死体の置かれた場所の温度等の条件によって死亡時刻がごまかされる──というようなトリックが推理小説にあるが、とてもそれで説明しきれるものではない。実に奇き怪かいな話である。

「──どう思う、アル？　また、おまえの落とし物が絡からんでたりするのか？」

　眼下にアーカムの街を見下ろしながら俺が呟つぶやくと、スーツの肩かたのあたりの繊せん維いが盛り上がり、マスコット人形のような小さなアルが飛び出した。

「まだ分からんが、臭い事件ではあるな。……まあ、とりあえず当たってみることだ」

〝アルの落とし物〟というのは、魔導書【アル・アジフ】のページの断片である。

　このアーカムシティにやってきた時、アルは〝敵〟の攻こう撃げきによって傷つき、一部のページを紛ふん失しつしてしまった。邪じゃ神しんやアーティファクトの情報を記き載さいされたそれらのページは、それ自体が極めて強い呪じゅ力りょくを帯おび、本体から切きり離はなされれば独立した意識を持った化身となってさまざまな怪かい異いを為なす。ここ数ヶ月、アーカムに発ひん発ぱつしている怪かい事件のうち何割かは、アルの落とした紛失ロストページを原因とするものだ。

　覇道財閥はアーカムの平安を維い持じするため俺を雇っているわけだが、その俺の相棒のアルは、そもそものトラブルの原因でもあるのだ。

　しかし、責任云うんぬんを問うのではなく、「問題を解決できる人材」として、覇道瑠璃は俺たちを指名した。個人的には不満もあるようだが、なんだかんだでそうした選せん択たくができるのは、これが噂うわさに聞く「覇道の合理主義」というやつか。

　一方アルは、彼女自身の都合──紛失ロストページを回収し、自らの能力を完全に回復する──のために、覇道財ざい閥ばつの依い頼らいに従っている。いや、アルにしてみれば、自分の行動に覇道を協力させている、というくらいのつもりなのだろう。

　たまたま利害が一いつ致ちしているからいいものの、人の言うことを聞かないアルと瑠璃がひとたび対立したら、果たしてどんなややこしいことになるのか、

「うーむ」

　間に立つ俺は、想像するだけで頭が痛い。

　俺が高速飛行の突とつ風ぷうに乱れる髪かみを、片手でくしゃくしゃと掻かいていると、

「見よ、九郎」

　と、アルが俺の注意を引いた。

　見れば、華はなやかな店構えのレストランの脇わきに軍警察のパトロールカーが止まり、裏の路地には、いくらかの人だかりが出来ている。

「おー、人が溜たまっとる、溜まっとる」

「うつけ、そうではないわ」

　アルは俺の知覚を調整した。すると、スーツに感じられる霊れい気きの濃のう度どや流れが視覚に織り込まれ―俺の目に、ひと筋の大気の歪ゆがみのようなものが視認できた。

　歪みは放物線状の尾おを引き、路地裏の人だかりの真ん中に続いている。

　線のもう片方の端はしを目で追ってみると、空中に大きな強い歪みが存在し、線はそこで止まっている。

「これは……空間跳ちよう躍やくの痕こん跡せきか」

　と、アルが言った。

　つまり、なにものかがどこか別の空間から空中の一点に出現し、路地裏に落下した、その痕あとが残っているのだ。

　なにはともあれ、俺たちが扱あつかうたぐいの事件であることに間ま違ちがいはないようだ。

俺たちは目立たないように、一本となりの路地に降りてマギウス・スタイルを解き、野次馬を掻かき分けながら現場に着いた。

人混みを仕切る黄色いテープを乗り越えていくと、事件現場でよく会う治安警察の人が、俺たちに気づいた。いつもふたりコンビで行動しているうちのひとりで、たしか〝ネス警部〟と呼ばれている人だ。

相方の〝ストーン君〟とは凸でこ凹ぼこコンビといったところで、長ちよう髪はつでやる気のなさそうなのがこの〝ネス警部〟、顔が四角くてガタイが良くて真面目なのが〝ストーン君〟である。

「やあ、探たん偵てい君」

とタバコを持った手を振ふるネス警部に、

「えーと、今どんな具合ですかね」

と、言いつつ、俺は歩み寄った。

このネス警部は、俺たちが覇道財閥の指図で動いていることを知っていて、現場でちょっとした便べん宜ぎを図はかってくれることがある。それどころか「君らがどうにかしてくれるなら、俺たちは楽できていいやね。あとは任せちゃっていいかい？」とか言いだすので、頼たよりになるのかならないのかよく分からんのだが、まあ、やりやすい人ではある。

一方めちゃめちゃやりにくいのが、もうひとりのストーン君。覇道がどうとかは関係なく、「また君たちでありますか！　守しゆ秘ひ義務につき、捜そう査さ状じよう況きようを部外者に漏もらすわけにはいかんのであります！　あ、ソコ、その線から入らないように！　下がりなさい、下がりなさい」とか言って、ひたすら規律通りに任務を遂すい行こうしようとする。

そこで、俺は事件現場でこのコンビに会ったら、まずネス警部を見つけて話を聞き、ストーン君に見つからないうちに立ち去ることにしている、のだが──

「おーい、ストーン君、探偵君が来たよ」

今日はいきなりストーン君を呼ばれてしまった。

　小走りにやってきたストーン君が、目の前に立ち止まった。この場からつまみ出されるかと、俺は思わず身構える──が、ストーン君は俺の目の前でビシッと敬礼すると、

「申しわけありませんが、参考人としてご協力を願います」

「……は？　参考……？」

　というわけで。

　俺はストーン君に連れられ、件くだんの変死体に引き合わされた。

「……む、こ奴やつは……」

　アルが険けわしい顔をした。

「ああ、ひでえな」

　と、自分の口元を覆おおいながら、俺。事前に聞かされていた通り、死体の一部は完全に腐ふ敗はいし、ものすごい異い臭しゆうを放っている。

　だが、

「そうではない。よく見よ、うつけ」

　と、アルは言った。

「はい？」

　俺は再び死体を観察した。死体が身に着けているのは白衣、手に持っているのは……エレキギター？

「おい、まさか……」

　俺が言うと、ストーン君は死体の顔に掛かけられていた布をそっと取り去った。

　幸いと言うべきか、顔面の損傷はさほどのことはなく、俺はその顔立ちや表情を確認することが出来た。

　一体どういう感情を表しているのか、泣き笑いのような激しくオ

モロイ顔をしたまま事切れているその男は、紛まぎれもなく、魔ま術じゆつ結社〝ブラックロッジ〟の変態科学者、ドクター・ウェストであった。

　──こんな、百回殺しても死なないような男が、なんでこんな場所で頓とん死ししているのだ？

〝ブラックロッジ〟の内ない紛ふんか、はたまたわけの分からない実験に失敗でもしたのか──

「探偵君、キミ、なにか事情を知らないかい」

「え、俺？」

　思わず変な声で聞き返す俺。

「あの……まさか、俺が疑われてるとか？」

「いやいや、そうじゃないけど」

　ネス警部は手を振った。

「探偵君、〝ブラックロッジ〟にはなにかと深く関かかわっているようだし……それに彼、友達でしょ？」

「へ？」

「なに？」

　俺とアルは顔を見合わせ、ふたりで地面に転がるドクター・ウェストの顔を見て、それからもう一度顔を見合わせた。

「……はははははははは！」

　アルが笑い出し、

「ズガ──ン！　ショック！」

　俺は頭を抱かかえた。

「え、ちがうの？　よく街中で追い駆かけっこしてるから、てっきり君のツレかと」

「ちがいますって！　──ていうか、そもそもこんな奴やつに友達はいません」

　俺は強く否定した。いわゆる人間の尊そん厳げんの問題として、犬いぬ猫ねこならまだしも、こんなのといっしょにされてはたまらん。

　──と、そこに、

　ズゴゴゴゴ……ドッゴォ────ン!!

　石いし畳だたみを割って、回転する巨きよ大だいな円えん錐すい体が現れた。

　機械式のアームに取りつけられた、身みの丈たけほどもあるドリルである。

　次いで、巣穴から這はい出す甲こう殻かく類のような動きで、周囲の建物をメキメキと倒たおしながら現れたもの、それはまるで、短い手て脚あしを備そなえた超ちよう巨大ドラム缶かん──

「〝ブラックロッジ〟の破は壊かいロボ!?」

　俺が叫さけぶと、土つち埃ぼこりに煙けむるドラム缶の天辺てつぺんに、

　ギョギョァ────ン！　ペレポレペレポレペレポレピョイィ────ン！

　ギターを掻かき鳴らしながら現れた者があった。

「なッ……ドクター・ウェスト……!?」

「イエェ────ッス!!　あなたの街の超ちよう絶ぜつ天才、〝科学の悪あく魔ま〟ドクター・ウェストでございます！　いざ勝負なり我が宿敵大十字九郎！　ここで会ったが百年目、来年会ったら百一年目、しかし貴様に〝来年〟はない！　なぜならこの場で死ぬのであ────る!!」

　ギョイィ────ン！

　ギターの音と共に、破壊ロボの機体に備え付けられた数門の機き

関かん砲ほうが、こちらを照準した。

「ま、待て待て、ストップ、ストーップ！」

　俺はドクター・ウェストの動きを両手で制し、

「なんでおまえが生きてるんだよ！　これを見ろ、これを！」

　と、足元の死体を指した。

「にゃにィ？」

　ドクター・ウェストは首を前に突つき出し、じーっと路上の死体を見つめる。

（―九郎、ひょっとすると、これは我々をおびき出すための罠わなだったかもしれぬぞ）

（ああ、だとすれば俺たちはまんまと引ひっ掛かったって事に……）

　俺とアルがささやき合っていると、

「ギャ――――ッ!?　それは我わが輩はい!?　し……シ・ン・デ・ルッ!?」

　思い切りビビって飛び上がるドクター・ウェスト。

　しかも、破壊ロボのコクピットを開いて乗り込みながら、

「うぬれ、なんだかよく分からんが、よくも我輩を！　自分の復こ讐とは自分でしよう！　百代祟たたって許すまじ！　発射フアイアァ――――ッ!!」

　ドドドドド……ッ!!

　機関砲の銃じゆう口こうが火を噴ふき、俺たちの足元に何十という跳ちよう弾だんが跳はねた。

「え――――ッ!?　なにその結論!?」

　俺たちは射線に追い立てられるように駆けだした。

　少し遅おくれて、破壊ロボのドリルが路面に叩たたきつけられ、振しん動どうと石片をまき散らす。

　ドォン──と五十センチほども地面から飛び上がりつつ、

「お巡まわりさん、それじゃ！」

　警官コンビに手を振ふると、俺とアルは全速力で路地を駆け抜ぬける。

「おー、元気だ」

「ぬうッ！　早急に住民を避ひ難なんさせねば、であります!!」

「あ、ところでストーン君」

　俺たちが角を曲がる直前、ネス警部が例の変死体を指差すのが見えた。

「……コレ、どうする？」

+

　俺とアルは通りを走りながらマギウス・スタイルになり、ウイングを展開して飛び上がった。

「わ────っはっはっはっは！　逃のォがすか──ッ！　であ──る！」

　破壊ロボは四本の腕うでを振り立て、短い足をシャカシャカと動かして俺たちを追いながら、本体の機関砲やビーム砲ほう、ミサイルなどの連射を浴びせかけてくる。

　その足元では、警官コンビの乗った装そう甲こう車が、拡声器で住民に避難を呼よび掛かけている。

　俺たちは弾だん幕まくの勢いに羽虫のように煽あおられつつ、先を急いだ。街の被ひ害がいが少しでも少なくなるように、破壊ロボを数ブロック先の広場へおびき出すのだ。

やがて──

──よし！

破壊ロボが完全に広場の敷しき地ちに入ると、俺は空中で振り返った。

「〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟！」

俺の右みぎ腕うでに呪じゆ術じゆつ的紋もん様ようがめまぐるしく走り、湾わん曲きよくした長大な魔ま刃じん、〝バルザイの偃月刀〟を手のひらの中に作り上げた。

「ブッた斬ぎれェッ!!」

俺は偃月刀の刀身に〝切断〟と〝必中〟の呪じゆ紋もんを載のせながら投げ放った。

偃月刀はブーメランのように回転しながら空中を自在に飛び、破壊ロボの四本の腕のうち、まずドリルを装備した二本を、それから、機械式の手を備えたもう二本を断ち落とす。

地じ響ひびきを立てて落ちる破壊ロボの腕。

そして、俺は弧こを描えがいて戻もどってきた偃月刀をつかむと、刃やいばを前方に構えながら突とつ進しんした。

「うおぉ……ッ!!」

偃月刀の刀身に展開した防護呪紋のため、ビームや機き関かん砲ほうの射線は俺を避けて通る。

そして、破は壊かいロボの本体に取りついた俺が、装甲を切り裂さいてドクター・ウェストを引っ張り出そうと、偃月刀を振りかぶった時──

──バン！

左右から迫せまる鋼鉄の手のひらが、俺の体を捉とらえた。

今しがた断ち落としたはずの、破壊ロボの手だ。

「なッ──!?」

　見れば、ドリルを備えている方の二本の腕も、地面からふわりと浮うき上がり、まるで時間を逆転したように再生する。

「のひゃ――――ッはっはっはっは！　見たか知ったかビビッたか、これぞ『スーパーウェスト無敵ロボ28號ごうＥＸザ・クロックアップド～お客様による改造後は保証の対象外となります～』の威い力りよくであーる!!」

　ドクター・ウェストの高笑いと共に、破壊ロボの機体の一部が割れ、中から巨きよ大だいな時計の文字盤ばんが現れた。文字盤の中央には、十歳かそこらのエプロンドレスの少女が磔はりつけにされている。

「あれは〝ド・マリニーの時計〟の化身!?」

「やっぱりおまえの〝落とロスト・し物ページ〟か！」

　俺はマギウス・ウイングの縁ふちを鋭えい利りな刃と化し、独楽こまのように回転しながら、破壊ロボの指を切り落として脱だつ出しゆつした―が、

　キリキリキリ―！

　破壊ロボの〝文字盤〟が針を逆回転させると共に、その指は簡単に再生する。

「ヒャ――ハハハ！　物足りん、物足りんですバイ、大十字九郎！　さっさと切り札を呼ぶがいいのである！　おまえたちの持つ最大の〝力〟をねじ伏ふせての完全勝利こそが我わが輩はいの望みなのであ―る!!」

「く……腹立たしい事だが、奴やつの言う通りにするよりあるまい」

　と、アルが言った。

「現在の我々の攻こう撃げき力では、多少のダメージを与あたえたとて、次の瞬しゆん間かんには〝ド・マリニーの時計〟の力で復元されてしまう。ここは鬼デウ械ス・神マキナの破壊力による一いち撃げき決着を狙ねらっていくぞ」

「……よし！」

俺は破壊ロボから大きく飛び退すさると、一直線に上じよう昇しようし、スーツのモードを詠えい唱しよう形態に変えた。

マギウス・ウイングがばらけ、本来の魔導書に近い姿──長方形のページ群となって、俺の周囲に滞たい空くうする。

そして、俺とアルは声をそろえ、〝機神招しよう喚かん〟の口こう訣けつを唱えた。

憎ぞう悪おの空より来たりて

正しき怒いかりを胸に

我等は魔を断つ剣けんを執とる！

汝なんじ、無む垢くなる刃──デモンベイン！

──鬼デウ械ス・神マキナデモンベイン。

覇道財ざい閥ばつ創始者・覇道鋼造が作り上げた、人知を超こえる力を持つ〝鋼の神〟だ。

普ふ段だんは覇道邸ていの地下に格かく納のうされているそれは、機械的招喚装置〝虚きよ数すう展開カタパルト〟によって可能性の雲に分解され、地上三百メートルに顕けん現げんする。

その招喚と制せい御ぎよには、俺とアルのような強力な魔ま術じゆつ師しと魔導書が必要──それが、俺がこの巨大な〝力〟を預けられている理由だ。

ゴゴゴゴゴ──

滞空する俺の周りで、エネルギーの渦か動どうが放電を伴ともないながら渦うず巻まき、

──ゴォン！

鋼鉄の機神が俺の周囲に実体化した。俺たちはその体内のコクピット状空間に取り込まれた形になる。

二層に分かれたコクピットのひとつで、アルが言う。

「識を伝え式を編む我。魔物の咆ほう吼こうたる我。死を超こゆる、あらゆる写本この原は本はたる我、魔導書【アル・アジフ】の名に於おいて―接続完かん了りよう！」

今、この瞬間。マギウス・スタイル時の俺とアルがある意味一体化しているように、俺とデモンベインもまた、アルを仲ちゆう介かいとしてひとつの存在と化した。俺の手はデモンベインの手となり、俺の脚あしはデモンベインの脚となる。鋼の四し肢しにみなぎる神の力を感じながら、俺は叫さけんだ。

「一気に行くぜェッ！」

俺は地上の破壊ロボに向かって跳とび蹴げりの形で落下しながら、デモンベインの脚きやく部ぶに備えつけられた空間歪わい曲きよく機構を作動させた。断鎖術式〝ティマイオス〟、〝クリティアス〟、順次解放。力強い魔力の波がデモンベインの脚を走り、足裏の先に空間の歪ゆがみを作る。

空間歪曲機構は本来、時空間歪曲の莫ばく大だいな反発力をデモンベインの機動力とする機構ギミツクだが、この力を蹴り足に乗せて直接敵にぶつけた場合、破は城じよう槌づちの如ごとき威力をもった大技となる。すなわち、

「近接粉ふん砕さい呪じゆ法ほう―アトランティス・ストライク！」

この〝アトランティス・ストライク〟は、過去に同系統の破は壊かいロボを軽々と粉ふん砕さいしている。威い力りよくは充じゆう分ぶんすぎるほどだ―が、

カチッ―

打だ撃げきの瞬間、破壊ロボの〝時計〟の針がピタリと動きを止めると、突とつ然ぜん目の前からその巨体の姿が消え、同時に、

ガガガガガッ―

と、回転するドリルが横腹に叩たたき込まれた。

デモンベインは大きく撥はね飛ばされ、地じ響ひびきを立てて転

てん倒とうする。

「うぐッ!?　なんだ、今のは!?」

　デモンベインの腹部ダメージが俺自身の痛覚にフィードバックし、俺は呻うめいた。

「奴め、こちらの時間を止めたな！」

　と、アルが叫ぶ。

　つまり、奴はアトランティス・ストライクがヒットする瞬間、デモンベインの時間を止め、サイドに回ってドリル攻撃をしてきたのだ。

　俺は―デモンベインは、左手で脇わき腹ばらを押さえて立ち上がりながら、右手のひらを前に広げた。

「―〝バルザイの偃えん月げつ刀とう〟！」

　デモンベインの手の中に、長大な魔ま刃じんが出現した。形や機能は俺自身が呼び出す物と変わらないが、なにしろサイズが、そしてパワーがちがう。デモンベインの鋼鉄の巨きよ腕わんに振ふるわれる〝バルザイの偃月刀〟は、破壊ロボの機体を一いち撃げきで両断できるだけの威力を秘めている。

　が―俺 / デモンベインが偃月刀を振りかぶると、

「スロー！　である！」

　ドクター・ウェストの声と共に再び破壊ロボの時計が作動し、目の前の破壊ロボが、そして周囲の風景が、急激に速度を増す。いや、むりやり速度を低下させられた俺の感覚が、あたかも周りが急加速したように、誤った認識をしているのだ。

　破壊ロボはデモンベインの周りをヒュンヒュンと駆かけ回りながら、テープの早回しのような口調で嘲あざ笑わらう。

「ヒャッハーそんな蠅はえが止まるような攻こう撃げきで我わが輩はいを倒たおすことなど無理無理無理なのであーるそしてさらに倍速モード！」

ドガガガガガッ!!

今度は自分の機体を加速したのだろう。二本のドリルアームが何倍にも増えて見えるほどの猛攻ラツシユに、デモンベインの全身の装そう甲こうが、ものすごい勢いで破損していく。

―ドズゥン！

尻しり餅もちの形で再度転倒するデモンベインの前で、

「あーんど―コ・マ・お・く・り・も・で・き・ま・す・よ・？」

と、カクカク動いてみせる破壊ロボ。

「くそ、ふざけやがって……！」

「落ち着け、九郎！」

アルが言った。

「〝ド・マリニーの時計〟の力とて完かん璧ぺきではない。あれの時間操作能力は、機械力に依い存ぞんするごく限定的なものだ。一定量の動力を使い切った時、必ず隙すきはできる」

果たして―

「ヒャッハァ――ッ!!」

ドガガガガガッ!!

再度のドリル・ラッシュに対し、俺が守りに徹てつし、五ご芒ぼう星せい形の防護呪じゆ紋もんを展開してしのぐ、と―十秒ほどのち、息いき継つぎのようにラッシュが途と絶だえる瞬しゆん間かんがあった。

「今だ、九郎！」

「おおッ！」

その隙をついて、デモンベインは偃月刀を突つき込む―が、

「おっと、危ない危ない、のであ～る♥」

　破壊ロボは距きよ離りを取ってそれを避さけ、

「ネジネジ巻き巻き、ゼンマイ再チャージである！」

　文字盤ばんの少女の背中に差された軸が、キリキリキリ──と回転した。一度は明らかに鈍にぶった破壊ロボの動きが、〝時計〟が再始動すると共に、再び速度とキレを増す。

　しかし、破壊ロボに向かって偃月刀を構えながら、俺ノデモンベインは立ち上がった。

「もうネタは割れたぜ、ドクター・ウェスト」

「おとなしく敗北を認め、〝ド・マリニーの時計〟を引き渡わたせば、命ばかりは助けてやらんでもないぞ」

　と、続けてアルも言う。

　一見すると、未いまだドクター・ウェストのほうが有利なように見えるが、〝ド・マリニーの時計〟のギミックを使ってようやく互ご角かくになる破壊ロボと、その攻撃をしのいで一撃を決めればいいデモンベインとでは、勝敗は明らかだ。

　しかし、

「ぬは────ッはっはっはっは！　敗北であるとな？　笑しよう止し！　笑止である！　当方に勝利の秘策あり、なのである!!」

　ギュリリリリ──！

　破は壊かいロボの〝時計〟が猛もう烈れつな勢いで針を回し、また、右みぎ腕うでのドリルがその動きに同期しつつ、莫ばく大だいな魔ま力りよくを帯びながら回転を始めた。

「見よ、今週のビックリドッキリ大発明！　〝スーパーウェスト時空間穿せん孔こうドリル〟であ～～る!!」

　ギュイィイイン──と唸うなりを上げるドリルを、破壊ロボは頭上に突き上げた。

　すると、

キュパッ──！

ドリルの先せん端たんを中心として、破壊ロボの頭上の空間に穴が開いた。

「我・輩・招・喚!!」

ドドドドドッ──

頭上の穴から、破壊ロボが降ってきた。それも一体ではなく、二、三……四体。

新しく現れたものには時計の文字盤がついていないが、それ以外はまったく同一の機体だ。

「んなッ!?」

呆あつ気けにとられる俺たちの目の前で、破壊ロボ群はひょこひょこと立ち上がると、

「「「「「わーっはっはっはっは!!」」」」」

と、五重奏で高笑いをする。

「ふふふふふ、冥めい土どのみやげに紹しよう介かいしてやるのである！」

ビシッと整列した四体の破壊ロボを、破壊ロボの一体（時計つき）がドリルの先で順番に指した。

「ジャーン！　二日後の我わが輩はいであーる!!」

「ジャーン！　四日後の我輩であーる!!」

「ジャーン！　六日後の我輩であーる!!」

「ジャーン！　八日後の我輩であーる!!」

「全部おなじだ、そんなのは！」

俺のツッコミを無視して、破壊ロボ軍団はドリルを振ふり立ててこちらに殺さつ到とうする。

「「「「「大十字九郎！　いざいざ、死にさらすがよいのであーる!!」」」」」

「これは……まずいぞ、九郎！」

「ああ……！」

　一見馬ば鹿か丸まる出だしに見えるありさまだが、破壊ロボ軍団は〝ド・マリニーの時計〟の弱点―息切れの瞬しゆん間かん―をカバーしつつ、的確な連続攻こう撃げきを仕し掛かけてくる。同一人物だけあって、連れん携けいの呼吸もぴったりだ。

　ドガドガドガドガドガ―！

　五体の破壊ロボに囲まれ、タコ殴なぐりにされるデモンベイン。

　ひと息に数十発の打だ撃げきを全身に受け、たちまち防護呪じゆ紋もんが過か負ふ荷かに弾はじけ飛ぶ。

「しまった……！」

「「「「「ふは―っはっはっはっは！　とどめであーる!!」」」」」

　ジャコン―五体の破壊ロボ、それぞれの胴どう体たいの天辺てつぺんに、三角帽ぼうのような巨きよ大だいドリルが生えて出た。

「「「「「さらばわが強と敵も！　万感の思いを込めて、今、必殺の！　アルティメイト・ドリル・クラッシャァ――ッ!!」」」」」

　シュゴゴゴゴ……！

　破壊ロボたちは胴体の下部から炎ほのおを噴ふき出しつつ、一いつ斉せいに空へ飛び上がった。そして、空中に弧こを描えがいて反転すると、回転する頭部ドリルからこちらに突っ込んでくる。

　五方向からの、避けようのない一斉攻撃。たとえデモンベインであっても、まともに食らえば御お陀だ仏ぶつだ。しかもご丁てい寧ねいに、

「時間よ止まれ、であーる！」

―〝ド・マリニーの時計〟による時間停止まで併へい用ようしてくる。

俺たちの意識は一いつ瞬しゆん時を飛ばされ、そして、気がついた時には―

デモンベインの胸は、ひと抱かかえもあるドリルに貫つらぬかれていた。

「がああああッ!?」

コクピットの俺は、血の塊かたまりを吐はいた。

「九郎!?」

まさか―

まさか、こんな―!?

デモンベインが、こんなことで……ッ!!

ドッ―

胸の大穴から熱を帯びた水銀アゾートの血液がまき散らされ、降りかかった樹木を炎えん上じようさせた。

「「「「「ふはーっはっはっはっは！　完全勝ぁ―利!!」」」」」

破壊ロボの群れは、さらにドリルを振り立て、水死体に群がる蟹かにのように、半ば機能を失ったデモンベインを蹂じゆう躙りんする。

ヴォオオオ―

全身から体液と部品パーツをまき散らし、その場にくずおれながら、デモンベインが吼ほえた。

それはまさに、瀕ひん死しの人造神の、断だん末まつ魔まの咆ほう吼こうだった。

やがて、絶望の叫さけびが、絶望の沈ちん黙もくへと取って代わろうとする時―

カーン──

どこからか、鐘かねの音が聞こえてきた。

カーン──

カーン──

……なんだ？

弔ちよう鐘しよう……か、これは……？

カーン──

カーン──

教会の鐘が、俺をあの世へ送るために鳴っているのか。

──いや、違ちがう。

俺の / デモンベインの知覚は、半ば無意識にその音源を追っていた。

鐘の音が発生しているのはごく近く、ほんの数ブロック先の、ミスカトニック大学の大時計塔とう。市内のどこからでも見える、アーカムシティの象しよう徴ちようとも言うべき建物だ。

その時計が、今、魔ま術じゆつ的な象形文字を文字盤ばんに浮うかべ、空間に染み通るような、不可思議な音色の鐘を鳴らしている。

あれは──

「〝ド・マリニーの時計〟!?」

アルが叫んだ時、

キリリリリ──！

時計塔の針が、急激に逆回転を始めた。

同時にデモンベインの機体が時間を巻き戻され、一いつ旦たんは飛び散った装そう甲こうの破片を、流れ落ちた循じゆん環かん液を回収しながら、瞬またたく間に復元した。

また、五体の破は壊かいロボが、ドリルを逆回転させながら後ろ向きに飛び──デモンベインとの接せつ触しよくの直前の瞬間に、ピタリと固定された。つまり、〝ド・マリニーの時計〟の力を持つ破壊ロボの動きを、もうひとつの〝ド・マリニーの時計〟──ミスカトニック大学の時計塔が押さえ込んだ形だ。

「……九郎！」

「おう！」

俺は空中に静止する破壊ロボ群の正面の一体に手を伸のばし、機体から文字盤をもぎ取った。

鋼鉄の手のひらの中で、文字盤に磔はりつけにされていた少女の姿が分解し、その場で本性──魔導書のページに記き載さいされた魔術文字の列──を顕あらわし、デモンベインの腕わん部ぶの魔術回路を通じてアルに回収される。

ヴン──

時間改変能力を失った破壊ロボは、同一時空間に重複して存在することができなくなり、ぶれた画像が補ほ整せいされるがごとく、一体に合成された。

「よしッ！　決めるぜ、アル！」

「心得た！」

「覇ひ道め瑠さ璃ん、見てるか!?　―あれを使う！」

『……いいでしょう』

　戦せん闘とうをモニターしていた覇道瑠璃の声が、コクピットに響ひびく。

『第一近接昇しよう華か呪じゆ法ほう、使用を許可します』

〝第一近接昇華呪法〟―禁断のパワーの塊かたまりとも言うべきデモンベインが備え持つ術式の中でも最も強力なそれは、何重ものロックが掛かけられ、俺やアルの一存では使用できない。その発動の権限を持つのは、覇道財ざい閥ばつ総そう帥すいである瑠璃だけだ。

　彼女の背後で、デモンベインの戦闘を支し援えんするオペレーターたちの声が、何重にも聞こえてくる。

『ヒラニプラ・システム発動』

『言こと霊だまを暗号化、ナアカル・コードを構成します』

『デモンベインの魔ま術じゆつ制せい御ぎよ系とアクセス』

『―ナアカル・コード、送信！』

　そして、覇道邸てい地下の魔術システムから送信された圧あつ倒とう的な超ちよう高密度魔術情報が、俺の神経を、デモンベインの全身を駆かけ巡めぐる。凄すさまじい衝しよう撃げきに吹ふき飛びそうになる意識が、一いつ瞬しゆん、不可思議な平へい衡こう状態を作り、俺／デモンベインは半ば無意識に必ひつ滅めつの術式を編み上げる。

　デモンベインは全身の魔術機関を最大稼か働どうさせながら、両手を剣けん指しに組み、頭上から左右に振ふり下ろした。魔ま力りよくを帯おびて輝かがやく指先が、空中に五ご芒ぼう星せい形の破邪エルダーの印形・サインを描えがく。

　さらに、俺／デモンベインは右手のひらを天に突つき上げた。

　デモンベインの心臓〝銀ぎん鍵けん守護神機関〟が最大限に稼働し、鋼の全身にこの世のものならぬ輝きを与あたえる。

光射す世界に

汝なんじら闇あん黒こく

棲すまう場所無し

渇かわかず飢かつえず

無に還かえれ――！

俺／デモンベインは口こう訣けつと共に大きく踏ふみ込み、手のひらを空中の破壊ロボに叩たたきつけた。

「レムリア・インパクト！」

瞬間、破壊ロボの機体を取り込みながら球状の結界が発生し、その内部が〝銀鍵守護神機関〟に直結された。異界の無限熱量が必滅の術式に変へん換かんされ、腕部の魔術回路を通じて結界内に流し込まれる。

最大最強、一いち撃げき必滅の絶対奥おう義ぎ、昇華呪法〝レムリア・インパクト〟。

激しい閃せん光こうと共に、荒あれ狂くるう魔力の咆ほう吼こうが空間を灼やきつくし、結界内のあらゆる存在が――破壊ロボの質量はもちろん、周囲の時空間までもが消しよう滅めつした。

そして――

結界球は急速に縮小し、鋼鉄の手のひらに握にぎり込まれながら、消えた。

+

敵ながらあっぱれと言うべきか、ドクター・ウェストには、何度死ぬような目にあってもなぜか必ず生き残ってしまうという、特異な才能がある。

現に今回も、レムリア・インパクトの結界に取り込まれる寸前、奴やつが射出座席で破壊ロボから脱だつ出しゆつするのを、俺とアルは確認していた。

役目を終えたデモンベインが覇道邸の地下に召還されると、俺とアルは空中に残った呪じゆ力りよくの痕こん跡せきを追って、奴の足取りを辿たどった。

―が。

その跡あとは、まるで空中に生じた空間の穴に落ち込んだように、ふっつりと途と絶だえていた。

つまり―

「……ここに戻もどってくるわけか」

と、そもそもの発ほつ端たんであるドクター・ウェストの変死体を見下ろしながら、俺は言った。

破は壊かいロボとの戦闘のどさくさで捨て置かれたそれは、相変わらず極度にオモロイ顔で、地面に転がっている。

アルの中に取り込んだ〝ド・マリニーの時計〟の能力の一部だろうか、今の俺の目には、ひとつの死体の中に、五つの時間の流れが混在しているのが観える。

ドクター・ウェストはレムリア・インパクトの直前、体内で五つの時間軸じくをむりやり合成されたショックで死亡したのだ。また、破壊ロボから自動的に射出されたのち、半日ほど時間を遡って落下したのも、この体内時間の乱れの副作用だろう。

「さっそく〝時計〟の力を試してみるか？」

と、アルが言った。

「ああ」

　まあ、正直俺としてはどっちでもいいんだが、こんな異常物体を放置していては、また別の怪かい異いを引き寄せかねない。それに、お巡まわりさんも扱あつかいに困るだろう。

　俺はスーツが記き憶おくしている禁断の知識のままに、左手を変死体にかざした。

「〝ド・マリニーの時計〟──」

　俺の手のひらに発光する文字盤ばんが現れ、キュルキュルと針を回転させた。死体の中でよどみ、ねじれ、あるいは絡からまり合う時間を、元通りの正しい流れに戻しているのだ。

　ヴン──

　まるでカメラの画像がぼやけてぶれるように、目の前で、死体が五つに分裂した。

　今日、二日後、四日後、六日後、八日後──五つの時間を孕はらむひとつの死体から、五つの時間に沿った五つの死体へ。

　さらに、それぞれの時間を時間混線による死の直前の瞬しゆん間かんまで巻き戻すと──

「「「「「ふは──っはっはっはっは！」」」」」

　破壊ロボのコクピットにいるつもりか、中ちゆう腰ごしの姿勢にぴょこりと起き上がったドクター・ウェスト（×５）が、ギターを掻かき鳴らしながら勝かち誇ほこった哄こう笑しようを虚こ空くうに放った。

「「「「「完全勝ぁ──利……あら？」」」」」

　ドクター・ウェスト（×５）の主観としては、念願の大勝利の瞬間、いきなりコクピットから路地裏へと放り出されたようなものだろう。

「「「「「あらららら？　これはどうしたことであるか……ほわきゃ────ッ!?　キ、キサマ大十字九郎ッッ!?」」」」」

泡あわを喰くってあたりを見回すドクター・ウェスト（×５）が、俺の姿に目を留めるや、一いつ斉せいにピョイーンと飛び上がり、そして、そのうち四人はそのまま、足元に開いたタイムホールに落ちて、本来属する時空間へと送り返される。

「「「「ア―レ――ッ!?（すっぽーん！）」」」」

残るひとり―現在に属するドクター・ウェストが、スタッ……と、片足で着地した。

俺とアル、そして片足で立ったままのドクター・ウェストは、無言のまま数秒間お見合い。そして、

「な……なにがなにやら分からんが、覚えておくがヨイのであーる!!」

年季の入った捨て台詞ぜりふを吐はくと、ドクター・ウェストはギターを抱かかえてスタコラと逃にげていき、

「ア―レ――ッ!?（どっぽーん！）」

なぜか蓋ふたの開いていたマンホールに落ちた。

「―このように、〝ド・マリニーの時計〟に改変された時間は、〝ド・マリニーの時計〟によって修復することが可能、というわけだ」

「便利なもんだな」

俺がうなずくと、アルは言葉を続けた。

「ああ。だが、それは同時に、この術式が単体では決定打になり得ない事を示している。相手も同じ力を持っていた場合、あとからいくらでも挽ばん回かいされてしまうのだからな。まあ、今回はそれに救われたというところだが……」

俺とアルは、どちらからともなく、ミスカトニック大学の時計塔とうを見上げた。

時計塔の文字盤は、現在はアーカム市民の生活の指標として、正常な時刻を指し示している。

しかし、その内部構造には……悪意ある時間改変に対たい抗こうし、しかるべき時に発動するように、〝ド・マリニーの時計〟が仕し掛かけられていたのだ。

そのお膳ぜん立だてをしたのはおそらく、デモンベインを、覇道財ざい閥ばつを、そしてこのアーカムシティをも一から創つくり上げた人物──

「覇道鋼造……か」

「……いったい、どんな人間なんだ？」

俺たちの呟つぶやきに答えるように、あるいはその問いをはぐらかすように、時計塔が夕刻の鐘かねを打ち鳴らし始めた。

+

カーン──

カーン──

カーン──

暮ぼ鐘しようを打ち鳴らす時計塔の頂上、街を見下ろす位置に、ひとりの女が立っていた。

スーツ姿の長身に眼鏡めがねを掛かけた姿。全体に知的な雰ふん囲い気きを漂ただよわせている。

名は〝ナイア〟。今はそう名乗っている。

もっともその姿も、また名前も、彼女の取り得る他のあまたの形態と同様、かりそめのものにすぎない。本質がないのが彼女の本質だ。

「おやおや、今回は覇道鋼造の読み勝ちといったところかな」

事の一部始終を見ていたナイアは、皮肉げににたりと笑った。

「とんだご都デウ合主ス・義のエク大仕ス・掛けマキナがあったものだが、ずるは毎度のお互たがい様、恨うらみっこはなしってものだね。……なぜって、そもそも──ふふ、君は気づいているのかな、アル・アジフ──そもそも僕たちもまた、そう、僕もまた、そして君もまた、他人の運命を巻き込んではねじ曲げる〝狂くるった時計〟なのだからね」

そう言いながら、ナイアはふところから懐かい中ちゆう時計を取り出した。魔ま術じゆつ的な象形文字が刻まれた文字盤ばんの上では、歪ゆがんだ四つの針がでたらめなリズムで動いている。

「おっと、たいへん！　約束の時間に遅おくれてしまう！　狂った時間に遅れてしまう！」

芝しば居いがかった口く調ちようでそういうと、ナイアは跳はねるように空中に飛び出した。

その足元の空中に時空の穴がぽっかりと開き、ナイアは足からその中に飛び込むと、穴もろともこの時空間から姿を消す。

──あっはっはっは……！

さも楽しげな、しかしどこか禍まが々まがしい笑い声の残ざん響きようが、鐘の音に入り交じりながら、暮れゆくアーカムの空に響ひびき渡わたった。

+

カン、カン、カーン──

「みなさーん、ごはんの時間ですよ～」

　シスター・ライカがオタマでフライパンを叩たたくと、たちまち子供たちが集まってきた。

「はーい！」

「はーい！」

「はぁーい！」

「ふぁ～～い」

　列の最後に並んだ俺に、振ふり返ったジョージとコリンが怪け訝げんな顔をする。

「おい、なんで九郎がいるんだよ」

「そうだよ、なんでだよ」

「これ、そんなこと言うものじゃありません」

　と、ライカさんはガキんちょどもをたしなめつつ、

「でも……なんで？　九郎ちゃん、最近はお仕事してるんでしょ？」

「いや、ソコなんですがライカさん」

　と、俺は答えた。

「探たん偵てい業というのは世の中のさまざまな事情に通じている必要がありまして。いわゆる庶しよ民みん感覚という奴やつを忘れないために、たまにはこうして家庭の味というものを味わっておこうというわけですよ。ははははは」

「『たまには』って、毎日来てるくせに」

「来てるくせに～！」

「ははははイタタタ、元気な坊ぼうやたちだね。イテイテ、マジ痛えから尻しりを蹴けるな尻を」

　ガキんちょどもに追い回される俺を尻目に、アルはライカさんにむかってズイと皿を出す。

「早くよそえ」

　──そう、数ヶ月前ならいざ知らず、現在の俺は、ちょっとした暮らしができる程度の報ほう酬しゆうを、月々に覇道財閥から受け取っている。前金の契けい約やく料だけでも、見たことのないような額だ。

　しかし、その大半は匿とく名めいの寄付の形でこの教会に振り込んでしまっているので、俺自身は相変わらず貧びん乏ぼうなのである。

　いや、別に慈じ善ぜんやらなにやらでやってるわけじゃない。

　このところ、身の回りの状じよう況きようがえらい勢いで変化していき、ともすれば俺自身もわけの分からないところに流されてしまいそうに感じることがある。もしそんなことになった時、俺の帰るべき所というか、基準点となるべき立ち位置は、この貧乏教会の食しよつ客かくであり、犬いぬ猫ねこ同然の三流探偵なのだと思う。俺は、俺の帰るべきねぐらをきちんと残しておきたいのだ。

　しかし──そんな考えすらも、ただの感かん傷しようではないか、と思える時もある。

　現に、この俺──わけも分からず禁断のパワーを託たくされた俺自身が、数ヶ月前とまったくおなじ人間であるかと言われると、今ひとつ自信が持てない。

「……人間とか物事とか、そういう色々ってのは、どうしようもなく変わっていっちまうもんなのかねえ」

　なにやら抽ちゆう象しよう的な俺の呟つぶやきに、

「ぜんぜん進歩のない奴もいるけどなー」

　と、ジョージが茶々を入れる。

「言ったなこのヤロ」

　俺がジョージにヘッドロックを掛かけていると、

「そりゃあ、そうでしょう」

　と、ライカさんは答えた。

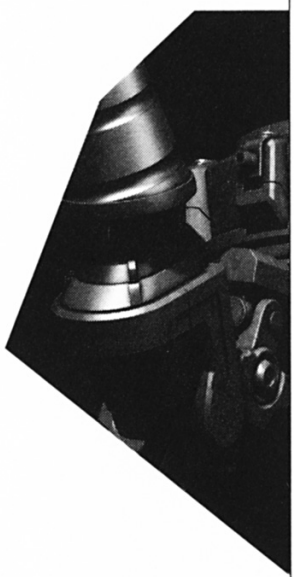
「だから、人はーいつ瞬しゆん一瞬の時間を大切に生きなきゃいけないっていうことなんですよ──って、時間といえば九郎ちゃん、今日もお仕事の打ち合わせだって言ってなかった？」

「──あ、やべッ！」

　俺は飛び上がって上着を羽は織おり、

「ふん、そんなものは待たせておけばよい」

　などとふんぞり返っているアルの首根っこをつかみ、表通りに飛び出した。



# 第二話 遺跡破壊者（トゥームバスター）

# 第一章　ペルー──峡きよう谷こく神しん殿でん

地上最強のパワーとはなにか？

世界最高の神秘とはなにか？

史上最大の至宝とはなにか？

これら三つの問いに対する答えは、ただひとつ──それはすなわち、ひとりの天才の頭脳にほかならない。

その天才とはもちろん、地上の学問のすべてを修め尽つくした学究の徒であり、さらなる真理を求めて前ぜん人じん未み踏とうの秘境を往ゆく冒ぼう険けん家であり、現代科学技術の常識をはるかに凌りよう駕がする発明家でもあるところの我わが輩はいことドクター・ウェスト！　完かん璧ぺきすぎて困っちゃう。

そんな素晴らしき我輩が本日訪れたのは、南米はペルー南部のさる峡きよう谷こくに存在する、知られざる遺跡である。マチュ・ピチュ、クスコ、サラプンコ要よう塞さい──名だたる大遺跡の合間に隠かくれるように存在するそこには、しかし、この我輩による人類史上空前の発見を待つなにものかが眠ねむっているのである。

我輩が今、目の前にしている神しん殿でん──そう、原始的な意い匠しようながら宗教的畏い怖ふを演出するべく荘そう厳ごんに造られたその建築物は、〝神殿〟と認識するべきであろう──は、峡谷の壁かべに半ば埋うもれるように造られている。近きん郊こうのインカ時代の遺跡とは明らかに違ちがう様式を持つこの建築物を造ったのは、一体何者か。また、人の入り難い険けん阻そな谷底に、なにゆえにこのような施し設せつを設けたのか。

だが、それらは最重要の問題ではない。我輩の超ちよう越えつ的頭脳は、眼前の遺跡の中に、それらの謎なぞにも勝る神秘を捉とらえているのである。

現代の科学では仮説すら立つことのない、時間と空間に関する新たな認識に関する理論──ここ数週間、我輩は独力でその概がい要ようを組み立て、検証を行なってきた。

そして現在、我輩の手には、我輩自らの考案・制作になる〝ウェスト式空間曲率計測機〟が構えられている。筐きよう体たい上部に備えられたパラボラアンテナにてある種の超ちよう次元的な波動を捉え、モニター上に結像する画期的装置である。我輩はこの装置によって空間のひずみを探知し、それを追つい跡せきし、この峡谷の神殿までやってきた。観測結果に依よれば、ひずみの最も強力な地点は、神殿の地下五十メートルの位置にある。

そこで我輩を待つものとは、果たしてなにか。

いざ往かん、神秘の源へ──

──超天才ドクター・ウェスト記す

+

神殿の内部に入り込むにつれ、周囲は〝建築物〟というより、〝整備された地下洞どう窟くつ〟ともいうべき様相を呈ていしてきた。どうやら天然の洞どう穴けつを利用して造られているようだ。

ヘッドランプの明かりの届くわずかな範はん囲いより向こうは、あくまで暗い。石造りの壁の隙すき間まからはじくじくと水が染み出し、湿しめった空気はわずかな潮の香かおりを含ふくんでいる。

海岸には、そう近くなかったはずだが──

いぶかりながらも、大荷物を背負った白衣の少年──ウェストは計測器のモニターを注視しつつ、さらに奥へと歩を進める。

やがて、足元が水みず苔ごけとも泥どろともつかないものでぬかるんできた。ライトを当ててよく見ると、なにか大きな生き物の足あし跡あとが見えた。ひと組のみならず、無数。そのいくつかを、

注意深く観察する。サイズは人間のものに近いが、靴くつは履はいておらず、極きよく端たんに長い足指の間には水かきがある。歩ほ幅はばから見て、両足を揃そろえて蛙かえるのように跳はねているようだ。

　人間サイズの巨きよ大だい蛙―その想像に、ウェストは軽く鼻を鳴らすのみ。恐きよう怖ふは感じない。その程度の怪かい物ぶつは、いくらでも目にしたことがある。十七歳という年ねん齢れいながら、その経験は並の大人をはるかに超こえていた。

　迷路じみた洞窟を、足跡を辿たどってさらに下る。

　暗くら闇やみの奥から、かすかな水音が聞こえてきた。それに混じって、人の言葉とも蛙の鳴き声ともつかない、低く潰つぶれた音が―

　程なく、洞窟は急激に細く、天てん井じようも低くなり、立って進むことが困難になってきた。見れば、この辺りの足跡は皆みな、手のひらを交えた四つ足歩行を示している。

「ふん。この我輩に地を這はって行けと言うか。―まっぴらごめんである」

　ウェストは、背負った大荷物―機メカ械ニカル式・バツ背クパ嚢ツクに装備された四本の超科学万能機械腕アームを展開した。アームの先せん端たんには数種類の自動換かん装そう式アタッチメントが用意されているが、現在は上二本を通常のマジックハンド、下二本を強力掘削機ドリルにしている。

　―元より、道なりに進むつもりなどない。たまたま〝空間曲率計測機〟の示す方向と、洞窟の方向が合がつ致ちしていただけだ。しかし今や、計測器の示す空間のひずみの中心は、この真下―目指すものが〝下の階〟にあるのなら、そこまで床ゆかを掘ほり抜ぬいてしまえばよいのだ。

「レッツ！　ドリラーッ！」

　掛かけ声と共に、ウェストは二本のドリルを床に突つき込んだ。

　と―

　ボゴン！

意外と薄うすかった床が周辺部を巻き込んで一気に抜け、ウェストの足元に大穴が開いた。

「ぬおッ……！」

ウェストはとっさにアームを伸のばし、落とし穴の縁ふちをつかんだ──が、

「ノォ────ッ!?」

つかんだ部分がさらに崩くずれ、そのまま落下する。

足の下は、どれほどの大きさとも知れない地下空くう洞どうになっていた。空洞には水が溜たまり、地底湖となって、全体がわずかな緑色の光に照らされている。いや、湖全体が、わずかな緑色の光を放っているのだった。

長い落下の後、ウェストは着水し、そのまま水面下に沈ちん下かした。

重い機械式バックパックを背負っていては、水中で身動きが取れるはずもない。かと言って、とっさに外そうにも、バックパックはウェストの体にハーネスでがっちりと固定されている。鉄の重りを背負ったウェストは、なすすべもなく水底に沈しずみゆく──いや、

「なんの！　ウェスト式超科学泳法ッ!!」

バックパックから伸びた四本のアームが、一いつ斉せいに水をかき始めた。ひとつひとつの動きはクロールや平泳ぎに似ているが、それらを組み合わせた姿は、ストロークの異常な速さと相まって、まるで奇き怪かいな構造をしたスクリューのようだ。

足りない浮ふ力りよくを機械的な駆く動どう力で補う形で、四本のアームはウェストの体を上方に推進した。

やがて──

「ぶはッ！」

水面で大きく息をついたウェストは、緑の光の途と切ぎれるところ──おそらくは岸辺──に見当をつけると、今度は水平移動に移った。

ズババババ──

人機一体、猛もう烈れつなスイマーと化したウェストは、激しい水音を立てながら抜き手を切り、気色悪いほどの速度で水上を進む。

「ふはははは、科学の勝利であーる！」

だが──

ほどなく、何匹びきもの大きな魚ぎょ影えいが、ウェストと同等以上の速度で水中を伴ばん走そうし始めた。

「なぬ……!?」

ウェストがその正体に気づいた時、何者かが彼の足をつかみ、再び水中に引きずり込んだ。

+

「ほあ──────ッ!!」

半ば水すい没ぼつした地下空洞に、絶ぜつ叫きようが何重にも反はん響きようした。

「貴様ら、我わが輩はいをどうするつもりであるか!?　この我輩の天才的頭脳がほんのちょっぴりでも損傷することは、全人類的、否いな、全宇宙的損失である!!　よって我輩、即そく時じ解放を要求するものであーる!!」

ウェストは太い杭くいに体を縛しばり付けられていた。じたばたともがいても、しっかりと結ばれた綱つなはびくともしない。

万能アームは恐おそろしい力でへし折られた上、バックパックごとはぎ取られ、その他の装備品と共に足下に放り捨てられている。今や彼は、身ひとつで危地に立たされる、ただの少年に過ぎない。その命は風前の灯ともし火びだ。

彼がいるのは、地底湖に半島状に突き出た岬みさき──いや、段のついた四角い形状から見て、人工的なものだろう。杭を差し込んで固定している足下の穴も作りつけのもので、周囲には同様の穴が幾き何か学的に配置されている。ここはこのような用よう途との為ために作られた設備なのだ。

すなわち、生いけ贄にえの祭さい壇だん──

その周囲に、彼をこのような危機的状じよう況きように陥おとしいれたものたちが群れ集つどっていた。

蛙かえると魚を混ぜたような顔が、数十ほど水面からのぞいている。これですべてなのか、水面下にさらに多数の個体がいるのか、それは分からない。

首から下の筋骨の構造は、人間、あるいは類るい人じん猿えんに似ているが、ぬらぬらとした皮ひ膚ふや水かきのある手足は、やはり両生類を思わせるものだった。体格は個体によってまちまちだが、小は人間と同等から大はゴリラほどもあり、ウェストを捕とらえ、杭に縛りつける動作も、たどたどしく不器用な反面、恐ろしく力強かった。

当然、これらの生きものは人間ではない。しかし、ひもや道具を操ることからも分かるように、ただの海かい獣じゆうとも言い難い、原始的な知性のようなものを感じさせた。

ふんぐるい……

むぐるうなふ……

蛙じみた鳴き声の中に、よく聞けば、異形の言語と思える音節が混じっている。独特の抑よく揚ようを保って何度も繰くり返されるそれは、宗教的な聖句を思わせる響ひびきを帯びている。

そして、彼らの視線はみな、ひとつの方向に集中していた。

祭壇に縛りつけられたウェストではなく、その彼方かなたにあるもの。

祭壇の小島の彼方に、緑色の光に照らされて、何本かの石柱が立っていた。高さはまちまちだが、おおむね十メートル前後。環かん状じように配置されているが、おそらくは人工のものではない。地下水の浸しん食しよくに寄って偶ぐう然ぜん作り出された、天然の環状列石だ。

水すい棲せいの怪かい生物たちは、皆みな、その石柱群を注視している。

ふんぐるい……

むぐるうなふ……

発情期の蛙の合唱のようなその音おん響きようの中に、ウェストは彼らの感情を垣かい間ま見みた。

これは、祭りの始まりを待ち望む声だ。

ガラクタの中に転がる〝空間曲率計測機〟が、小さな警告音を立てた。また、ウェスト自身の直観も、この空間に急速に高まりつつある、得体の知れない気配を捉とらえていた。

始まりと共に、なにかが起こる。

おそらく、生け贄の命はその時にこそ捧ささげられるのだが、そんなことは大きな問題ではない。

ウェストの科学的探求心は、いつしか我が身の危険すらも忘れ、迫せまり来るその時に集中していた。

──と、その時。

ザバ、ザバ、ザバ──

怪生物たちは、ウェストを祭壇に設置したのちは注意深く小島を離はなれていたが──なぜかその内の一群が、再び上陸してきた。

数は四、五……六体。ぬるぬるした皮膚に、蛙面づらの頭部──だ

が、他の個体と違ちがって、類人猿のような前ぜん傾けい姿勢を取らず、背筋を伸のばし直立している。動きもどこか機き敏びんな印象だ。

　また、中でも目を引くのは、中心に立つ長身の一体。なぜか鼻先に黒眼鏡を掛かけている。

　これもまた儀ぎ式しきの一部かと、ウェストが注視していると、彼らはてきぱきとした動作で杭を穴から外し、ナイフで縄なわを切って、ウェストを解放した。

「ぬ、な……？」

　ウェストはわけも分からずに怪生物の顔を見上げた。

　すると、怪生物は自分のあごの辺りに指を掛け、蛙面の皮を剝はいだ。──いや、顔の皮と思えたのは、精せい巧こうに作られたマスク。よく見れば、首から下を覆おおっているのも、変装用に装そう飾しよくを加えられたウェットスーツだ。

　マスクの下から現れたのは、精せい悍かんな顔つきをした白人青年だ。

「大だい丈じよう夫ぶか、君」

「う、うむ……？」

　ウェストが答えると、青年は背後を振ふり返った。

　気がつけば、新たに上陸した一団は、みな蛙面のマスクとスーツを脱ぬぎ捨すてている。

「博士、彼は無事です！」

「よろしい！」

　そう答えたのは、マスクを取って、黒眼鏡を掛け直している男だ。もう老人と言っていい年ねん齢れいのようだが、一団の中でひときわ背が高く、雄ゆう渾こんな威い厳げんを漂ただよわせている。

　黒眼鏡の男は、残りの青年たち──そう、彼以外はすべて二十代の

若者だ──をぐるりと見み渡わたし、そして言い放った。

「──では諸君、これより講義を始める！」

+

　神聖な祭さい壇だんに上がり込み、あまつさえ生いけ贄にえを横からさらおうとする者──六人の闖ちん入にゆう者に対し、蛙かえる面の怪かい生せい物ぶつたちはじりじりと集まり、包囲の輪を作りつつあった。

　その第一団が祭壇に上陸し、不器用な足取りでひたひたと近づいてくる。

　黒眼鏡の男は一いつ瞬しゆん、怪生物らに注意を向けると、学生たちに向かって話し始めた。

「見たまえ──ここが〈深きものども〉の拠きよ点てんであることはもはや明らかだ」

　青年たち──おそらく、彼の教えを受ける学生たち──は、一様に深く頷うなずいた。怪物の群れを目の前にしながら、その様子に緊きん張ちようはあれ、恐きよう怖ふの色はない。黒眼鏡の男は言葉を続ける。

「彼ら〈深きものども〉はクトゥルC□眷属C邪神群Dの奉ほう仕し種族の中でも特に勢力の大きいものだが、それ故に情報が多く、対処法が確立しているとも言える。たとえば──キーン君、彼らとの接せつ触しよくが予想される場合、君ならばどう行動するかね？」

黒眼鏡の男の問い掛けに、細身の青年が答えた。

「はい、ええと――〈深きものども〉は〝旧エルきダー・印サイン〟を模した護ご符ふや対立神性の讃さん歌かを苦手としていますので、これらの手段で相手を怯ひるませ、逃とう走そうを図ります。その際、海や河か川せんなどを避さけつつできる限り高速の手段で

移動し、ミスカトニック大や覇道財ざい閥ばつなどの管理下にある対ＣＣＤ組織の支部に庇ひ護ごを求めます」

　黒眼鏡の男は頷いた。

「うむ、模も範はん的な回答だ。彼らはその一体一体が人間より強力な肉体を持つ。能あたう限り戦せん闘とうは避けるべきだろう。──しかし同時に、彼らは下水道網もうを通じ、あるいは不器用ながらある程度の変装をして、驚おどろくほど深く人間の生活領域に侵しん入にゆうする。また我々の側が、調査や移動などのやむを得ない事情から、彼らのテリトリーである水辺の空間に侵入しなければならない場合もある。最悪の場合、正面から彼らと戦わざるを得ない状じよう況きようもあり得るのだ」

　一心に聞き入る学生たちに、黒眼鏡の男は言った。

「そこで──本日の課題は『〈深きものども〉との近接戦闘について』だ」

　黒眼鏡の男は、半人半魚の怪物たちを指し示した。

「見ての通り、彼らの肉体は強きよう靭じんな筋肉と皮ひ膚ふ、そして鱗うろこに覆われ、通常の手段では傷つけることは困難だ。たとえ拳けん銃じゆうを使用しても致ち命めい傷しようを与あたえるのは難しい。そこで、急所を狙ねらう必要があるわけだが──フェラン君、彼らの急所とはどこだと思う？」

　フェランと呼ばれた体格のよい青年が、逡しゆん巡じゆんしながら口を開いた。

「はっ、ええ……たとえば、目でしょうか」

「うむ、彼らの突とつ出しゆつした眼球は重要な弱点だ。ほかには？」

「生せい殖しよく器はどうでしょう？」

　黒眼鏡の男はかぶりを振った。

「それは違ちがうな。繁はん殖しよく期を終え、身体的な〝大変容〟を迎むかえた後の〈深きものども〉は、不死に近い生命力と引ひき替かえに生殖能力を失う。その際に生殖器は退化してしまうの

だ」

「では、心臓や腎じん臓ぞうなど―」

「うむ、それらの重要な臓器を損傷することは、彼らにとっても致命傷になるだろう。しかし、それらは筋骨に鎧よろわれた体内にあって、容易には傷つけられない」

「それでは……ううむ……」

「降参かね」

　考え込んだフェランに言い置くと、

「―では見ていたまえ」

　黒眼鏡の男は、〈深きものども〉の群れに向かって、大おお股またに歩み寄った。

　群れの中の一体、黒眼鏡の男と同じくらいの―人間としては大おお柄がらだが、〈深きものども〉の中では中程度の―体格をした個体が、その動きに反応して近づいてきた。類るい人じん猿えんのような前ぜん傾けい姿勢のため、背はやや低く見える。

「―まず前提として、彼ら〈深きものども〉は、一応陸上での活動能力を持ってはいるものの、基本的に海かい棲せい生物であり、肉体の構造も水中生活に適応したものとなっている。つまり、彼らの弱点とは―」

　講義口調で語りながら一定の歩調で歩いていた黒眼鏡の男は、突とつ然ぜん距きょ離りを詰つめ、〈深きもの〉に肉にく薄はくした。

〈深きもの〉は蛙じみた叫さけび声を上げて腕うでを振ふり上げた。鋭するどい鉤かぎ爪づめは、一いち撃げきで人間に致命傷を与えるだろう。

　だが―

「ふッ！」

　黒眼鏡の男は臆おくすることなく、両手の平を上に向けた手刀

で、〈深きもの〉の両りよう脇わき腹ばらを挟はさみ打ちに叩たたいた。蛙のうめき声のような音が〈深きもの〉の喉のどから漏もれ、そして、両脇からおびただしい量の泡あわ混じりの血が流れ始めた。

〈深きもの〉は反はん撃げきの鉤爪を振り下ろした。だが、その勢いは明らかに弱まっている。黒眼鏡の男はステップバックしてその爪つめをかわすと、後ろ回し蹴けりを放った。

　黒眼鏡の男の踵かかとに横面を張り飛ばされた〈深きもの〉は、その場に横様に倒たおれると、脇腹からごぼりと血の泡を吐はき、動かなくなった。

「……！」

　学生たちは息を呑のんだ。

　怪物じみた生命力を持つ〈深きもの〉に、たったの二撃げきで――いや、出鼻のただ一撃で致命傷を与えるとは！　――しかも素手で！

「見たかね」

　黒眼鏡の男は言った。

「彼らの弱点とは呼吸器、すなわち、体外に露ろ出しゆつしている鰓だ。ここばかりは筋肉や鱗で覆おおうことが出来ないため、徒手による破は壊かいが可能なのだ。鰓えらに打だ撃げきを加えることによって、彼らは容易に窒息死する」

　黒眼鏡の男はさらに、〈深きものども〉の群れの中の、ひときわ大きな個体に歩み寄った。前傾姿勢を取りながらなお二メートルを超こえる体高。おそらく体重は三百キロはあるだろう。

「――そして、この基本はより大型の個体にも適用し得うる」

「そんな……博士、無茶です！」

　学生のひとりが叫ぶのと同時に、その〈深きもの〉は、威い嚇かくの声を上げながら黒眼鏡の男に飛びかかった。

「ふんッ！」

黒眼鏡の男は身をかわしざま、体を半回転させて中段の回し蹴りを放った。男の太い脚あしは、全身の発条を一点集中の打だ撃げき力りよくに変えながら、半人半魚の怪かい物ぶつの脇腹に突つき刺ささった。とても老人の動きとは思えない、見事な一撃だ。

〈深きもの〉の脇腹がぐしゃりと重い音を立て、次の瞬しゆん間かん、血の飛沫しぶきを上げた。

「恐おそれることはない！」

黒眼鏡の男は朗々と言い放った。

「彼ら不老不死の〈深きものども〉は年ねん齢れいを重ねるごとに際限なく成長していくが、我々にとって幸いなことに、それは海棲生物としての成長だ。陸上で活動ができるのは〝大変容〟からせいぜい数年の間であり、その末期には―この個体がそうであるように―もはや陸上への適応を外れかけている。彼らは大気中では常に呼吸不全の状態にあり、また、その動作は陸おかに上がった海かい獣じゆうさながら、本来の素早さの一割も発揮できてはいない」

片腹から血を流しながら、〈深きもの〉が咆ほう吼こうした。蛙かえるじみた口元からも、喉に回った血潮がごぼごぼとあふれる。

〈深きもの〉は低く身をかがめ、黒眼鏡の男に飛びかかった。日本ニツポンの格かく闘とう技ぎ・スモウの突撃チヤージを思わせる、恐ろしい勢いの跳ちよう躍やくだ。

が―黒眼鏡の男は先ほどとは反対側に身をかわすと、もう片側の鰓えらに回し蹴りを叩き込む。

両脇の鰓を完全に破壊された〈深きもの〉は、なおも両手で空中を滅め茶ちや苦く茶ちやに掻かきむしりながら突とつ進しんするが、黒眼鏡の男はその直線的な動きを的確に避さけ、背後に退いた。

ほんの十秒ほどで、〈深きもの〉は地面に倒れ伏ふした。二度、三度と断だん末まつ魔まの痙けい攣れんをし、やがて動かなくなる。

「見ての通り、いかに巨きよ大だいであり、獰どう猛もうであろうとも、陸おかに打ち上げられた鮫さめは恐るるに足りん。彼らは強力かつ危険な生物だが、陸上においては我々に地の利がある。的確

な観察と判断によって、彼らとの格かく闘とうに勝利することは充じゆう分ぶんに可能だ。──理解したかね？」

「はいッ！」

　学生たちが、声を揃そろえて答えた。

「よろしい──では、実習に移る！」

「はッ！」

「はいッ！」

　学生たちは、手に手に棍こん棒ぼうや槍やりを持って〈深きものども〉に向かっていった。中には師を見習ってか、素手で走っていく者もいる。

　学生の人数は五人、対する〈深きものども〉は数十体。一見して圧あつ倒とう的不利の状じよう況きようだが、彼らは臆おくすることなく戦せん闘とうに挑いどんでいる。背後で彼らを見守り監かん督とくする師に、絶対的な信しん頼らいを置いているのだ。

　事実──

「彼らの動きは直線的だ。挙動の出鼻を読めば避けられる！」

「爪つめに気をつけろ！　毒を持っている！」

「つかみ合いでは決して勝てんぞ！　常に距きよ離りを取り、カウンターを狙ねらっていけ！」

　檄げきを飛ばしながら乱らん闘とうの中を闊かつ歩ぽする黒眼鏡の男は、〈深きもの〉に捉つかまりかけた学生がいれば敵に蹴けりを入れて脱だつ出しゆつさせ、反対に攻せめあぐねている学生がいれば自らが注意を引きつけ攻こう撃げきの機会を作る。さらには、突とつ出しゆつしすぎた学生を下がらせるなどして、場の全体をコントロールし、学生たちの安全を確保しているのだった。

　その傍かたわら、

「──どうかね、少年」

　黒眼鏡の男は先ほど助け出された少年──ウェストに声を掛けた。

　ウェストは自前の装備品のチェックをしていた。アームは使い物にならないが、空間曲率計測機はまだ生きている。

「人間は決して無力ではない。君がなすすべもなく捕つかまったあれらの怪物に対しても、対処法を学習さえすれば、充分に対たい抗こうすることができるのだ」

　だが、

「──ふん、くだらんのである」

　と、ウェストは鼻を鳴らして言い放った。

「怪かい物ぶつと同じ土俵で取っ組み合いなどして、いったいなんになるのであるか」

　その口ぶりは、不敵を超こえて無礼と言うべきものだったが、

「ほう」

　黒眼鏡の男はどこか楽しげに相づちを打った。黒眼鏡の周囲で、頬ほおの筋肉が笑えみを形作る。ウェストは続けて言った。

「我わが輩はいが目指すものはつねに、超ちよう科学的手段による圧倒的勝利である！」

　まんまと捕まって死にかけていた状態から、どこをどうすればこのような自信が出てくるのか。しかし、黒眼鏡の男は呆あきれた様子もなく答えた。

「うむ。その意気やよし」

　しかし、言われたウェストは、ぶすりとした表情で横を向く。

「どうした？」

「我輩、上からものを言われるのは好かんのである」

　──やがて、学生たちがそれぞれ一体か二体の〈深きもの〉を倒たおしたころ、このままでは敵かなわずと見たか、〈深きものども〉

が水辺に撤てつ退たいし始めた。蛙じみた不器用な動きが一転して本能的な突進に変わり、瞬またたく間に祭さい壇だんを飛び降りて地底湖に飛び込んでいく。

〈深きものども〉の群れは、十体ほどの屍し体たいを残し、潮が引くように水中に消えていった。

「我々の勝利ですね」

　フェランが黒眼鏡の男に呼よび掛けた。が──

「……いや」

　鋭えい敏びんな感覚になんらかの気配を感じ、黒眼鏡の男は前方の石柱群を注視していた。

　と──

　地じ響ひびきと共に、環かん状じよう列石の中心に巨大な水の柱が立った。底部から巨大な水圧を掛けられ、噴ふん水すいのように噴ふき出したのだ。

「これは……間欠泉!?」

「いや、この辺りに火山はなかったはずだが……!?」

　口々に言う学生たちを、

「──そうではな~いのである！　このノータリンども！」

　箱形の計測機を構えたウェストが一いつ喝かつした。

「この〝ウェスト式空間曲率計測機〟によれば──あれなる石柱群の中心に空間の大穴が開いたことは明白なのである！」

「え？」

「なんだって……？」

「──なるほどな」

　ウェストの言葉の意味を、黒眼鏡の男のみが正確に悟さとった。

「この洞どう窟くつは今、太平洋下の深海と超次元的に連結しているのだ！　水圧差によって海水が流入している！　すぐにここは海底になるぞ！」

　地底湖は瞬く間にかさを増し、一行の足元にも海水が押し寄せてくる。

「撤てつ収しゆうだ！」

　黒眼鏡の男の号令一下、一行は海水を跳はね散らしながら、地下神しん殿でんの出口へと向う。

　その時、

　バシャリ──

　一行からやや離はなれた水面下をなにかが疾はしった。

　体長三メートルを超える、巨きよ大だいな魚ぎよ影えい──いや、人影。

「……でかい！」

　フェランが叫さけび、

「博士、あれも〈深きものども〉なのですか!?」

　と、キーンが言った。

「うむ」

　黒眼鏡の男は答えた。

「年経て水中生活に完全適応した、〈深きものども〉の〈古老エルダー〉だ。……まさか地上で目にすることになろうとは！」

　そう言っている間にも、海水は一行の膝ひざの丈たけを超え、腰こしにまで届こうとしている。

　バシャリ──

　バシャリ──

巨大な〈深きもの〉──〈古老エルダー〉が、一体、また一体と、水面から上体を起こした。〈深きものども〉の跳ちよう躍やく力を以もつてすれば、一気に襲おそいかかることもできる距きよ離りだが、それよりも……あと数十秒を待ち、もう五十センチほど水深が深まるだけで、ここは完全に彼らの領域となる。

待つか、待たざるか。巨きよ体たいが跳躍に備えてぐっと屈かがみ──

その時。

彼らの背後の水柱の中から、数本の巨大な触しよく手しゆが飛び出した。形は蛸たこのものに似ているが、一本一本が巨きよ木ぼくのように太く、長い。

その一本が、黒眼鏡の男らを狙ねらう〈古老エルダー〉に巻きつき、その巨体を高く持ち上げた。〈古老エルダー〉は歓かん喜きとも恐きよう怖ふともつかない絶ぜつ叫きようを上げながら、触手に引かれて水柱の中に呑のまれていく。

続いて、大だい蛇じや、いや巨きよ龍りゆうのごとき触手の群れは、周囲の〈深きものども〉やその〈古老エルダー〉たちを手当たり次第につかむと、水流に逆らいながら湖底の〝穴〟に引きずり込んでいった。まるで、湖そのものが触手を伸のばして〈深きものども〉を食い尽つくそうとしているようだ。

黒眼鏡の男が言った。

「やはりそうか──ここは〝クトゥルーの戸口〟──邪じや神しんの餌場なのだ！」

「……クトゥルー！」

フェランが声を上げた。

「あの〈大いなるクトゥルー〉ですか──あれが！」

「うむ。正確にはその一部──無数にある捕ほ食しよく肢しのほんの数本に過ぎないが。ＣＣＤクトゥルーは、太平洋下の深海で死の眠ねむりにつきながらも、ああして触手を世界中に伸ばし、獲え物ものを捕とらえるのだ」

「獲物、とは……？」

「多くの場合、その獲物とはクトゥルーを崇すう拝はいして集合する〈深きものども〉だが……むろん人間を襲わないと決めているわけではない！　捉まるな、諸君!!」

　一行は今や、嵐あらしのように荒あれ狂くるう海水のきわを、必死で駆かけていた。幸い、〈深きものども〉さえもこの荒れた水の中を襲っては来ないようだが、少しでも気を抜ぬけば、波にさらわれて溺でき死ししてしまうだろう。

　そしてなによりも、不可思議な探知能力によって新しん鮮せんな獲物を嗅かぎつける、クトゥルーの触手──ついにその一本が、一行に向かって恐おそろしい勢いで伸びてきた。

〝ほんの一部〟とはいえ、正しよう真しん正しよう銘めいの邪神。殴なぐる蹴けるで対たい抗こうできるものではない。

　丸太のような触手が行く手を塞ふさぎ、七人の人間をひと巻きに捕らえようとした瞬しゆん間かん──

「──ハスターの爪つめよ！」

　クトゥルーの対立神性・ハスターの名を叫びながら、黒眼鏡の男が手のひらを前方に突つき出すと、突とつ如じよとして刃は物ものの鋭するどさを持つ突とつ風ぷうが吹ふき荒れ、目の前の触手を寸断した。

「……!?」

　ウェストは目を見張った。

　それは〝魔ま術じゆつ〟──科学の申し子たるウェストの初めて目にする、未知なるパワーだった。

+

　増水に追われながら、一行は神殿を脱だつ出しゆつし、峡きよう

谷こくの底に走り出た。

　余よ裕ゆうはほとんどなかったようだ。

　一行が神しん殿でんから数十メートル離はなれ、岩がん壁ぺきの登とう攀はんルートを登り始めた時、海水と触手、そして〈深きものども〉が神殿の建物から飛び出した。

「みんな、落ちるなよ！」

　フェランが叫さけんだ。地底から噴ふき出した海水が、見る間に濁だく流りゆうとなって眼下を流れ始めていた。万が一にも呑のみ込まれれば、命はあるまい。

　やがて、一行は谷底から十数メートルの高さにある岩いわ棚だなに辿たどり着ついた。全力で岩壁を登ってきた彼らは、手足を投げ出して荒あらい息をつく。

　海水も〈深きものども〉も、ここまでは登ってこないだろう。しかし、もしもクトゥルーの触手が生いき餌えの匂においを嗅ぎつけて伸びてきたら、狭せまい岩棚の上では逃にげ場ばはない。さらに上に登って少しでも距離を取るか、それともこの場で息をひそめてやり過ごすか……。

　と、その時──

「フェラン君、皆みなを頼たのむ」

　そう言い置くと、黒眼鏡の男は岩棚のふちに歩み寄り、無造作に飛び降りた。

「ぬ……!?」

　ウェストは思わずその姿を目で追い、身を乗り出した。

　と──

　ゴォッ──

「ぬなッ……!?」

　耳を聾ろうする轟ごう音おんと共に、黒い壁が峡きよう谷こくの

底から猛もうスピードでせり上がり、ウェストの目の前を、上空に飛とび抜けた。

　それは、今までに見たこともない、巨きよ大だいな航空機──いや、〝機械の鳥〟というべきものだった。翼よく長ちようはおそらく五十メートルに達するであろう。その巨大な翼の下に、細長い虫の卵のようなものをいくつもつけていた。

〝鳥〟は一行の頭上で大きく旋せん回かいすると、峡谷の流れに沿う形で水平飛行に移った。

「おい、君！」

　棒立ちになって〝鳥〟の動きを目で追っているウェストに、フェランが声を掛かけた。

「危ないぞ──伏ふせていろ!!」

〝鳥〟が翼の下に抱かかえていた〝虫の卵〟。それは航空機用の爆ばく弾だんだった。

　鋼の巨鳥はウェストらの頭上をゆっくりと飛び抜けながら──いや、その機体があまりにも大きく、案外と高空を飛んでいるために、そのように感じられるのだが──〝卵〟をぽろぽろと落とした。

　ある程度、自らの落下軌き道どうを操作する機能があるのか、ばらばらに投下された爆弾群は、峡谷の中の一点──神殿の入り口へと、吸い込まれるように落ちていく。そして──

　大地と大気の震しん動どうを伴ともなう何十という爆ばく音おんが、轟とどろき、反はん響きようし合い、一行の耳を聾した。水蒸気の混じった巨大な煙けむりが、拳こぶし大の石と共に、峡谷の底を噴き抜ぬける。

　ウェストはあおりを喰くらって仰あお向むけに転てん倒とうした。天を仰いだ視線の先、〝鳥〟は悠ゆう然ぜんと空を渡わたっていく。

　その姿が視界の外に去ると、ウェストは再び立ち上がって岩棚のふちに駆かけ寄り、未いまだ残ざん響きようの残る峡谷を覗のぞき込んだ。

煙の狭はざ間まに見える眼下の地形はえぐれた岩いわ肌はだを見せて変形し、神殿もまた、基き礎そ構造の名残なごりを残して、完全に崩ほう壊かいしている。むき出しになった洞どう窟くつには、崩くずれた環かん状じよう列石が転がっていた。

すでに海水の流出も止まり、何本ものちぎれた触しよく手しゆが泥でい水すいの中をのたうっている。周りに白く塵ちりのように見えているのは、水中爆ばく発はつの衝しよう撃げきで死んだ、何十体もの〈深きものども〉の屍し体たいだ。

「ぬ……」

ウェストは〝空間曲率計測機〟を取り出し、作動させた。

──思った通り、地底にあったはずの〝空間の穴〟は、すでに跡あと形かたもない。

「うむ。この地の〝戸口〟は塞ふさぐことができた。多少なりとも、邪神の力を削そぎ、その勢力を弱めたことになる」

背後からの声に振ふり返ると、いつの間に戻もどってきていたのか、黒眼鏡の男がウェストを見下ろしていた。

「湖の中に環状列石があったろう。あれが海底都市ルルイエとこの地を繋つなぐ、異次元的な門を開く装置だったのだ」

「……ふむ」

一応の納得は行ったが、それに満足する間もなく、ウェストの興味は新たな対象へと向かっていた。

「あれは……いったいなんなのであるか？」

「あれとは？」

「先ほどの、巨大航空機である」

「うむ」

黒眼鏡の男は頷うなずいた。

「ひと言でなにとは説明はしづらいが──我々は〝鬼デウ械ス・神マ

キナアンブロシウス〟と呼んでいる」

「デウス・マキナ……？」

　ウェストは眉まゆをひそめた。

「初めて聞く名であるが、なんにせよ、通常の機械装置ではないようであるな。出現の状じよう況きようも不可解である」

「詳くわしく知りたいかね？」

　黒眼鏡の男の口元に、わずかな笑えみが浮うかんだ。

「……ぬ」

　ウェストは日常、揶や揄ゆや謎なぞかけの類を好まず、また、会話において下手に出ることに慣れていない。ひと声発したまま黙だまり込んでしまうその様子を見て、黒眼鏡の男がさらに笑った。

「好こう奇き心を抑よく制せいできるならば、それに越こしたことはない。今日この場で目にしたことは忘れてしまうことだ。だが逆に、世界の裏側にある真実をとことんまで知ろうと思うのならば……私と共に来るがいい」

「ふん、つまらぬ二に者しや択たく一いつを迫せまるものである な。我わが輩はい、真実は自らの手でつかみ取る、いや、創り出すことを信条としているのである」

　無礼な返答ではあったが、黒眼鏡の男は気を悪くした様子もなく言った。

「その意気や、大いによし──だが、もし気が変わったら、ミスカトニック大学に連れん絡らくを取りたまえ。私はミスカトニック大学のラバン・シュリュズベリイという」

「我輩は──」

　ウェストの言葉を最後まで聞かず、黒眼鏡の男──シュリュズベリイは背後を振り返った。

「諸君、これより神しん殿でん跡の実地検分を行なう！　谷底に集合！」

「はッ！」

「はいッ！」

　おそらく彼の大学に籍せきを置いているのであろう、件くだんの五人の青年が、口々に答えた。

　再びこちらに向き直ったシュリュズベリイに、ウェストは再び言った。

「我輩は、ド――」

「さらばだ、少年！」

　シュリュズベリイはウェストを捨て置き、大おお股またで崖がけふちに歩み寄ると、再び無造作に飛び出した。

「……ッ！」

　ウェストがあわてて身を乗り出すと、シュリュズベリイは突とつ如じよとして吹ふき上げる突とつ風ぷうによって減速し、やがて安全に谷底に降り立った。

　続いて、シュリュズベリイの学生たちが、ロープを使って谷底に降り始めた。皆みな、ウェストのことは気にもとめていない――が、その内のひとり、フェランがウェストに声を掛かけた。

「君は早くここを離はなれるんだ。素人しろうとがむやみに関かかわるものじゃない」

「ぬ、し、しろ……!?」

　一いつ瞬しゆん口ごもってしまったのは、この謎の一団――特にシュリュズベリイと名乗る男に気け圧おされ、自信を失っていたためであるかもしれない。

「……素人ではないのである!!　我輩は――」

　反論した時には、フェランの姿もまた、崖の向こうへと消えていた。

「ぬう……！」

　ウェストは未いまだ噴ふん煙えんの立つ爆ばく撃げき跡あとを険しい表情で見み詰つめながら、崖の上に、ただ立ちつくした。

## 第二章　エジプト──ネフレン＝カの墓所

この世には無数の謎が存在し、その神秘は汲くめども尽つきることがない。我輩の前に世界は広がり、そして無限の財宝というべき知られざる真理が、天才の手による発見を待って永き眠ねむりについている。

そして、おお、眠る世界を目覚めさせる者！　それは我輩、ドクター・ウェスト！

そんな我輩が本日訪れたのは、カイロ郊こう外がいの砂さ漠ばくに存在するピラミッド群である。

というのも、ここ数週間の我輩のテーマは「宇宙より投射される未知の力線の捕ほ獲かくとその利用」であり、それがある種の幾き何か学的形状によってなることを推察し得たためである。

その形状とは、四し角かく錐すい形──いわゆるピラミッド型。

そう、我輩ならぬいかなる叡えい智ちがその原理を発見したのか、超古代に建造されたこれらピラミッド群は、超ちよう巨きよ大だいな宇宙線エネルギーの集約装置なのだ。

されど惜おしいかな、これらのピラミッドは巨大なばかりで形状の精度が足りず、充じゆう分ぶんな機能を果たしているとは言い難い。

──だが、ただひとつだけ例外が存在する。

今、我輩が目の前にしているのは、一辺約六十メートル、高さ約四十メートルの比ひ較かく的てきマイナーなピラミッドである。クフ王、カフラー王、メンカウラー王のいわゆる三大ピラミッドに比べるとかなり小型である……が、しかし、その内在するエネルギーは桁けた違ちがいのものである。

我輩の考案・製作になるところの〝ウェスト式宇宙線エネルギー探知機〟は、この巨大石造建築の地下に対し、最大の感度を示して

いる。もービンビンである！　ビンビン来るのである！　来るッ！　宇宙の力が！　宇宙の力がッ!!　く、来る――――――ッ！

―超天才ドクター・ウェスト記す

+

　盗とう掘くつ者の洗礼はすでに何百年も前に受け、観光の対象となるにはいささか地味であり、そして、学術的な意味も薄うすく、カイロから離れて交通の便も甚はなはだ悪い。

〝ラムホテップ王のピラミッド〟は誰だれの意識にも上ることのない、透とう明めいな存在とも言うべき遺い跡せきだ。あえてこの無名のピラミッドを訪れる者は、ここ十数年の間、絶えて存在しなかった―今日この日、ウェストが訪れるまでは。

　数十年前にひと通り行なわれた学術調査によって、ピラミッドの内部構造はすでに判明していた。ウェストは地図の写しを片手に、石造りの通路を迷いなく進んだ。

　玄げん室しつは、すでに空だった。かつては存在したかもしれない王フアラオの棺ひつぎも、高価な副ふく葬そう品ひんも、今は見当たらない。

　―無論、予想されていたことである。落らく胆たんするほどのこともない。

　ウェストは自作の〝宇宙線エネルギー探知機〟を作動させた。アンテナの先せん端たんに取りつけられた四角錐がくるくると回転し、未知の力線を感知する。

　目指す〝エネルギーの中心〟は―この真下。

　ウェストは会心の笑えみを浮うかべた。この玄室はダミーだ。真に価値あるものは、この地下に存在する。ウェストはバックパックから万能アームを展開した。四本のアームの先端をドリルにし、石

材の床ゆかに向けて構える。

三十分後──

ボゴォン──!!

硬かたい石材を掘ほり抜ぬいて、ウェストは広大な空間に飛び出した。

瓦が礫れきと石の粉と共に床に落ちるが、すぐに立ち上がる。

高さ十メートル、縦横数十メートルの広大な空間。ピラミッドの外見からすると少々大きすぎるが、これは〝ラムホテップ王のピラミッド〟が、意外と大きく地下に広がっているということだろう。

周囲は壁かべも、柱も、黄金を主体とした見事な、しかしどこか禍まが々まがしい印象の装そう飾しよくで飾かざられ、副葬品であろう大小の像や装飾品が、至るところにディスプレイされている。壁かべ際ぎわには何十個もの棺が並んでいるが、これも荘そう厳ごんな装飾をほどこされているため、一見すると美術品のように見える。

間ま違ちがいない。この空間こそが真の玄室だ。

「ヒャッハァ────ッ!!　ビンゴ！　であーる!!」

ウェストのアームがガッツポーズを取った。

黄金の宝物に興味はないが、古代人の残した超エネルギーの秘密の一いつ端たんを、この場からつかみ取れるという、たしかな感かん触しよくがあった。

カラリ──

天てん井じように開いた穴から最後の小石が落ちると、玄室は再び、死の静せい寂じやくに満たされた。

「おお──」

ウェストは勝利感に酔よいしれつつ、死せる古代人たちに呼び掛かけた。

「大いなる神秘を孕はらんで瞑ねむる、物言わぬ死者の群れよ。されど、我わが輩はいの知性の輝かがやきは汝なんじらの秘密をも暴き出す！　おお、深く静かに、永遠の惰だ眠みんを貪むさぼらんとする古代の王フアラオよ、その従者たちよ！　真理の目覚めをもたらす我輩の掘削機ドリルに驚きよう嘆たんし、ブッ飛び起きるがよいのであ――る!!　うはははははは！」

　すると。

　ガタ、ガタ、ガタ―

　先ほどの大音声か、はたまたウェストの品のない笑い声か、なにに刺し激げきされたのかは不明だが―壁際の棺が一いつ斉せいに開き、それぞれの中から現れた干からびたミイラの群れが、部屋の中心に立つウェストを目指し、うっそりと歩き出した。

「……あら？」

+

「あぎゃ――――ッ!!」

　かがり火に照らされた玄室に、ウェストの悲鳴が何重にも反はん響きようした。

「やめろおおう、ショッカ――ッ！　であ――る!!」

　奇き怪かいな古代的装飾を施ほどこされた石台に、大の字に縛しばり付けられたウェストは、精せい一いつ杯ぱい頭を振ふってもがくが、両手足の鉄かせはびくともしない。

　一方、包帯を巻いた体に豪ごう華かな装飾品をまとったミイラたちは、乾かわいた呟つぶやきを漏もらしながら台の周りを取り巻き、小さな壺つぼや手術器具のようなものを手て渡わたしで運んでいる。その儀ぎ式しきめいた動き―いや、事実として、これは処刑の儀式であり、同時に新生の儀式でもあった。

　卑いやしき盗とう掘くつ者の頭部から欲望に染まった脳のう髄ず

いと内はら臓わたを抜き去さり、香こう油ゆと没もつ薬やくを用いて身体からだの内外を清め、霊れい布ふの包帯で全身を包む。そのようにして、彼らの主、知られざる地底の王フアラオの深い眠ねむりを護まもる、永遠の下僕として生まれ変わらせるのだ。彼ら自身がかつてそうされたように。

　儀式は時間を掛けて粛しゆく々しゆくと進み、そしてついに、ウェストの脳を引きずり出すべく、細い鉤かぎつき棒が鼻の穴に差し込まれた。

「はぎゃぎゃ――ッ、ふがふごふご」

　棒の先が脳に達した時、ウェストは即そく死しし、人間としての生を終える。不敵なる天才少年の運命もついに終しゆう焉えんを迎むかえるかと思われた時――

　地下に吹ふくはずのない〝風〟が、かがり火を揺ゆらした。

　次の瞬しゆん間かん、施せ術じゆつを担当していたミイラの腕うでが切断され、手にした棒ごとウェストの胸の上に落ちた。

「ふご……!?」

　さらに、刃やいばのように鋭するどい〝風〟がもうひと吹きすると、ウェストの手足を戒いましめていた鉄かせが、一気に裁ち落とされた。

「!?」

「……!?」

　ミイラたちが、乾ききった声帯から声にならない驚おどろきの声を上げ、振り返る。

　その視線の先が、儀式に参列するミイラたちの中の、数体に集中した。

　よく見れば、その数体は、周りのミイラとは様子が違ちがっている。包帯は新しく、動作は機き敏びん。また、明らかに筋肉質の、体格のよいものもいる。

　その中でもひときわ長身の一体――なぜか包帯の上に黒眼鏡をして

いる──が一歩前に進み、

「ふんッ！」

　片手を突つき出すと、重厚な圧力を持った突とつ風ぷうが吹き、祭さい壇だんの周囲にいたミイラを一気になぎ払はらった。

　その隙すきに新品ミイラの一団が飛び出し、祭壇の周囲を固める。

　体格のよい一体──いや、ひとりが、顔面の包帯を取った。中から現れたのは、干からびた屍し体たいならぬ、白人青年の顔だ。

「大だい丈じよう夫ぶか、君──」

　ウェストを助け起こしながら、青年はふと怪け訝げんな顔をした。

「なんだ、また君か」

　そういう青年は、かつてペルーの地下神しん殿でんで遭そう遇ぐうした学生だ。名はたしか、〝フェラン〟という。

　その足元で、祭壇の浮うき彫ぼりを調べていたもうひとりの学生──こちらはたしか〝キーン〟だ──が、これもまた、口元の包帯を取りながら声を上げた。

「──博士、やはりネフレン＝カの印しるしです！」

「よろしい。予想通りだ」

　そう答えたのは、先ほどミイラの群れを打うち倒たおした、長身の男だ。

　彼は右手を高く上げ、指を鳴らスナップした。

　と──全身を巻いている包帯が何百という細片に切り刻まれ、ばらりと落ちる。中から現れたのは、コートに黒眼鏡という出で立ち。案の定、ペルーで会った〝老博士〟──ラバン・シュリュズベリイにほかならない。

　シュリュズベリイは黒眼鏡で周囲を見回し、おごそかに言い放っ

た。

「―では諸君、これより講義を始める！」

+

祭壇の傍かたわら、長身のシュリュズベリイの周囲に、包帯を脱ぬぎ捨すてた五人の青年―彼の学生たちが集まった。

さらにその周囲には、無数の―少なくとも数十体のミイラが様子をうかがっている。今にもこちらに殺さつ到とうし、神聖なる墓所へ闖ちん入にゆうした生きた人間たちを片かた端はしから仲間に引き入れようという姿勢だ。

シュリュズベリイはミイラの群れを指して言った。

「諸君、これが本日の課題だ―『〈ネフレン＝カの殉じゆん死し者〉との戦せん闘とうにおける有効な戦法とはなにか』―フェラン君、君はどう思うかね？」

シュリュズベリイに促うながされ、先ほどウェストを助けた体格のよい青年―フェランが、ためらいがちに言った。

「ええと、ごく尋じん常じように―拳けん銃じゆうなどでは倒せないのですか？」

「貸してみたまえ」

フェランの手からリボルバーを受け取ると、シュリュズベリイは無造作な片手撃うちで、手近なミイラに弾だん丸がんを撃ち込んだ。

一発、二発、三発。ミイラは弾丸の勢いに押されて後退するが、眉み間けんや心臓に乾かわいた穴を開けたまま、再び歩いてくる。

「見たまえ、答えはノーだ。彼ら、呪じゆ術じゆつ的生命を持つ〝乾いた屍し体たい〟は失血死することがなく、また、脳や心臓などの重要器官を取り去られているため、急所というものが存在しな

い」

「では……刃は物もので首を刎はねてしまえばどうでしょう？」

「手て脚あしの関節を破は壊かいして動けなくするというのは？」

「うむ」

　口々に案を述べる学生たちにうなずいてみせると、シュリュズベリイはミイラの群れに大おお股またに歩み寄った。長身の影かげが包帯の群れにたちまち取り囲まれ、埋まい没ぼつしかける──と、シュリュズベリイは右手を顔の高さに持ち上げ、スナップした。

　パンッ──空気の破は裂れつする音と共に風の刃はが周囲に閃ひらめき、十個あまりの包帯頭が一度に飛んだ。シュリュズベリイの周囲のミイラはみな首を失い、一体を残して倒れた。

　正面にいた一体を倒れる前に捉とらえると、シュリュズベリイは逞たくましい腕うでをミイラの腕に絡からめ、力を込めた。

　枯かれ木きのような音を立て、ミイラの腕が折れた。

　さらに、手首、肩かた、腰こし、膝ひざ──シュリュズベリイは梃て子この原理を応用した関節技で、首のないミイラの体中の関節を破壊し、ひとつひとつねじ切り、そして、放り出した。鳥の羽をむしるような手際のよさだ。

　埃ほこりじみた床ゆかに、ミイラの部品が山となって転がる。体の各部はまだ〝生きて〟動いているが、五体を分解されては立つこともできない。

　シュリュズベリイは学生たちに向き直った。

「この通り、彼らの肉体そのものは容易に破壊することができる。だが──見たまえ」

　老博士の足下で、首のないミイラのそれぞれの肩かた口ぐちから、包帯の束が伸のびた。盲もう目もくの蛇へびのような動きで床を這はいながら、転がった頭部を見つけ出し、解ほぐれた布の先で絡め取り、元通り首の継つぎ目めに戻もどす。

　また、バラバラになった一体も同様に、ねじ切られた手足を胴ど

う体たいに継いで、再び立ち上がる。破壊された骨格の機能は、包帯の束が補っているようだ。

「このように、〈真理の糸〉と呼ばれる霊れい的てき繊せん維いによって編まれたしなやかで強きよう靭じんな包帯は、彼らの干からびた皮ひ膚ふと筋肉の、時には骨格の代わりさえも務める。いや、むしろこの〝生きた包帯〟―屍し体たいと呪術的共生関係にある疑似生命の帯こそが、〈ネフレン＝カの殉死者〉の本質と言えるだろう」

その説明が終わるかどうかという時、

ビュルルッ―!!

再びシュリュズベリイを取り巻いたミイラの群れ―それぞれの腕や胴体から、ほどけた包帯が飛び出した。何十という包帯が四方から襲おそいかかり、シュリュズベリイの体に巻きつく。シュリュズベリイは瞬またたく間まに新たなミイラとなり、さらに巨きよ大だいな包帯の繭と化して、玄げん室しつの中空に吊つり下さげられた。

「博士!?」

「うむ―心配は要らん」

魔ま風ふうの刃によって繭を内側から断ち割って抜ぬけ出すと、シュリュズベリイは再び床に降り立ち、手についたミイラの粉を払はらいながら、学生たちに向かって言った。

「伸しん縮しゆく自在にして再生も無限。このやっかいな〝包帯〟を相手に、我々はどう戦うべきか―さあ、討議デイスしたカツまえシヨン!!」

迫せまり来るミイラとその〝包帯〟―〈ネフレン＝カの殉死者〉の群れを前に、学生たちは活発に意見を交こう換かんする。

「油を掛かけて燃やしてしまえばいいんじゃないか？」

「やはり魔ま術じゆつ的な対策を考えるべきだろう」

「電気や超ちよう音おん波ぱが弱点かもしれないぞ」

と―

「―ふん」

さも嘲ちよう笑しよう的に鼻を鳴らしたのは、今しがたシュリュズベリイらに助けられた、ウェストだ。

「貴様ら全員、聞くも愚おろか、語るも愚かの愚かメ~ン（複数形）であるな」

「なに!?」

気色ばむフェランをキーンが目顔で取りなし、シュリュズベリイがウェストに歩み寄った。

「少年、では君の意見を聞こう」

すると、今度はウェストがむっとする。

「〝ドクター〟である」

「うむ？」

「医学、薬学、歴史学、考古学、社会学、言語学、民みん俗ぞく学、機械工学に超心理学、ｅｔｃ、ｅｔｃ。弱冠十七歳にして三十六の博士号を持つ超・天・才！　たるこの我わが輩はいに呼よび掛ける際には、〝少年〟ではなく、敬意を込めて〝ドクター・ウェスト〟と呼ぶことを要求するのである！　厳密には〝うわさの超天才ドクター・ウェスト様〟と呼ぶのが正しいが、マ、我輩寛かん大だいであるゆえ、それくらいは譲じよう歩ほしてやってもよい」

「うむ、分かった。では君の意見を聞こう、ウェスト君」

「〝ドクター〟である！」

シュリュズベリイは心底不思議そうに、黒眼鏡の上の眉まゆをひそめる。

「うむ？　それはもう聞いたぞ、ウェスト君」

「だ~~か~~ら~~!!」

「博士、話が進みませんので」

キーンがシュリュズベリイを押さえつつ、ウェストに言った。

「では、あー、ドクター──ドクター・ウェスト。君の意見を聞かせてくれないか」

「ふん」

ウェストは子供のように口をとがらせ、そっぽを向く。

そこで、

「えー……〝うわさの〟」キーンはもう一度言い、

「ふんっ」

「超・天・才……♥」さらに付け加えた。

「……ま、よかろうなのである」

意外と単純なのか、ウェストはあっさり機き嫌げんを直すと、祭さい壇だんの上に立ち上がり、腕うでを組んでふんぞり返った。この場にいる誰だれよりも年下だが、態度の大きさではシュリュズベリイにさえ負けてはいない。

「では諸君、講義してやるから耳の穴かっぽじってよく聞くのであーる！」

次いでウェストはミイラの群れを指さし、

「この乾かん物ぶつどもの〝生命〟の源が、ピラミッドの形状によって誘ゆう導どうされる一種の宇コス宙ミ的ツクエネルギー、すなわちピラミッドパワーと呼こ称しようされるものであることは、我輩とっくにお見通しである」

「ほう、よく勉強している」

「ふん」

シュリュズベリイの合いの手に鼻を鳴らして答えると、ウェストは先を続けた。

「宇宙もしくは異次元からの無む尽じん蔵ぞうのエネルギー供給によって、彼奴きやつらは事実上の不死身となっているのである。ゆ

えに、このパワーがある限り、あらゆる攻こう撃げきは無効にして無意味！」

「つまり、打つ手はないと言うのか」

　フェランが言うと、ウェストは天を仰あおいで嘆たん息そくした。

「ああ愚か、また愚か。愚か者と会話するとバカが移りそうでイヤンバカン。我輩、『このパワーがある限り』と言ったのである。つまり、ここで重要なのはピラミッドパワーの供給停止。そして、そのための最速の手段とは―すなわち、ピラミッドの破壊である！」

　ズバビーンと言い切るウェストに、

「ほう……？」

　学生たちが半信半疑の相づちを打った。何人かはシュリュズベリイの顔をそっとうかがったが、老博士は口を挟はさまず、興味深げな笑えみを浮うかべるばかりだ。

　いぶかる一同を代表して、キーンが言った。

「確かに筋は通っているように思えるが……しかし、いったいどうやって？」

「ふはははは、この我輩ことドクター・ウェスト、備えあれば抜ぬかりなし、である！」

　ウェストは白衣の懐ふところから、小さな機械を取り出した。ボタンとアンテナのついた金属製の箱で、ボタンには小さなドクロマークが描えがいてある。

「そーれ、ポチッとな♥」

　ドドドォン―!!

　ウェストがボタンを押すと、頭上から低い地じ響ひびきのような音が聞こえてきた。

「うむ―!?」

「な……!?」

「おい、なにをしたんだ!?」

「のほっほっほっほ、知れたことである！」

　ウェストは手の中の機械──遠えん隔かく爆ばく破はスイッチを皆みなに示した。

「こんなこともあろうかと、我輩、このピラミッドに潜もぐる前に、充じゆう分ぶんな量の爆薬ハツパを仕し掛かけておいたのである!!」

　ほどなく、

　ゴゴゴゴゴ──

　低い、連続した振しん動どうが、皆の体に伝わってきた。最初は遠くかすかに、やがて近く強く──

　脳のう髄ずいのない頭にも事態の異常さが理解できるのか、はたまたウェストの言う通り、パワーの供給に不備が生じているのか、ミイラたちの動きが乱れ始める。

　まるで、あふれる〝生命力〟を制せい御ぎよしきれないように、ミイラの体を振ふり回しながら〝包帯〟が跳はね暴れ、そして干からびた屍し体たいから離はなれてのたうち回る。

「ふひゃはは、見よ！　彼奴ら死に損ないの〝死の舞ぶ踏とう〟を！　愉ゆ快かいツーカイ奇きゞき怪かいゞかいであるな!!」

　高笑いするウェストに、フェランが振り向いた。

「おい、『愉快ツーカイ』はいいが、これからどうするつもりだ!?」

「ふひゃーはははは──え、なんであるか？」

「だから、ピラミッドが崩くずれたら、僕たちまで生いき埋うめじゃないか！」

　キーンが言うと、

「……ハテ？」

　丸っきり虚きよを突つかれたというように、小首をかしげるウェスト。

「こら――――――ッ!!」

　フェランが叫さけぶのと同時に、玄げん室しつの天てん井じようが崩れ落ちた。

+

　ゴバッ―!!

　土つち煙けむりも収まらぬ、崩ほう落らくした巨きよ石せきの山のただ中に、巨大な竜たつ巻まきの柱が立った。

　と―次の瞬しゆん間かんには、渦うず巻まく風は跡あと形かたもなく消え、七人の人物が空中に投げ出された。中心となるシュリュズベリイはバランスを取って地表に降り立ち、五人の学生とウェストは瓦が礫れきの上に尻しり餅もちをつく。

　崩落の瞬間、シュリュズベリイは自らの強力な呪じゆ布ふ〝黄こう衣え〟を展開して学生たちを保護しつつ、ハスターの魔ま風ふうを呼び出し、瓦礫を吹ふき飛ばしながら地上に脱だつ出しゆつしたのだ。

「無事かね、諸君」

　シュリュズベリイが呼よび掛かけると、砂すな埃ぼこりにむせながら、学生たちが答えた。

「はい……」

「な、なんとか……」

「もちろん我わが輩はいはいつだって元気ハツラツであーる！」

「君は黙だまっていろ、ウェスト！　もしくはバカ！」

「なんと!?　地球人類の用いるあらゆる言語に精通する我輩の語学的才能を以もつてしてもなお、非常に耳慣れない言葉！　それはどこの星の、どういう意味のほめ言葉ですか？」

「地球上でバカという意味のけなし言葉だ！」

「なぬ――ッ!?　大ショック！　この超ちよう天才がバカ呼ばわりされるとは論理的にあり得ぬことである！　訂てい正せいを！　訂正を求めるのである！」

「まあまあ、なにはともあれ、全員無事だったわけですから」

　今にもつかみ合いになりそうなウェストとフェランの間に割って入りながら、キーンは師を振り返った。

「シュリュズベリイ博士、彼の取った手段をどう思われますか？　結果的には〈殉じゆん死し者〉たちを一いつ掃そうしたようですが――」

　だが、シュリュズベリイの答えは、

「ふむ……惜おしい。残念ながら合格点はやれんな」

「はあ……」

「ぬ？」

　眉まゆをひそめるウェストに、シュリュズベリイは言った。

「ウェスト君、君の知識の深さ、また、発想の大だい胆たんさには見るべきものがある。だが重大な見落としがあったことは否めない。減点対象だ」

「にゃにおう!?　我輩はいつでも百億万点にて大合格の男！　ちょっぴり生き埋めになりかけたくらいでごちゃごちゃ抜ぬかすんじゃねーのである！　我輩ほどの男ともなれば、貴様ら吹けば飛ぶよな凡ぼん人じんどもの命のひとつやふたつや百、二百、これっぽっちも眼中にないのである!!　あと〝ドクター〟って呼ぶのであーる！」

　まくし立てるウェストに対して腹を立てる風もなく、シュリュズベリイは軽く手を振った。

「いや……確かに爆ばく破はの手際に危険はあったが、それは段取りを検討し直せばよい。私の指し摘てきしているのはその件ではなく、君の犯した本質的な誤ご謬びゆうのことだ」

「ま～だ文句があるのであるか!?」

「うむ。『ピラミッドの破は壊かい』というアイディア自体は悪くない。実は私も同様に考えていた。だが……破壊すべきは地上のピラミッドではないのだ」

「ふん？　どういうことであるか、それは？」

「うむ、説明しよう」

　シュリュズベリイは胸の前で左前腕を水平に構え、その下の空間に右手の指で逆三角形を描えがいた。

「ルドウィク・プリンの記述によれば、〈ネフレン＝カの墓所〉の構造は地下深くに頂点を持つ四し角かく錐すい型、つまり〝地下に埋まい没ぼつした逆ピラミッド〟の形状を持っている。実のところ、我々が潜もぐっていたのは、その地表近くのほんの浅い層に過ぎない」

〝地表近く〟という言葉の辺りで、シュリュズベリイは水平にした腕うでのすぐ下を指した。

「ふぬ？」

　ウェストは瓦礫の山を見上げ、

「では、このピラミッドは？」

　その問いに、シュリュズベリイは意味深長な笑えみを浮うかべて答えた。

「君が破壊したのは、地下より噴ふん出しゆつする災さい禍かを防ぐため、後世の王フアラオラムホテップが〈墓所〉の上に建造した、封印用のピラミッドだ──見たまえ、重石を取り除かれ、数千年ぶりに自由を得た〝存在〟──そのパワーが地上に溢あふれ出すぞ！」

　ゴゴゴゴゴ──ドォッ!!

「おわ――――ッ!?」

　足下の瓦礫が波打つように揺ゆれ、ウェストと学生たちを再び転てん倒とうさせた。

　巨石の瓦礫を弾はじき散らして地上に現れたもの―それは白い竜巻だった。一本一本が霊れい糸しで編まれた帯の群れが地下から噴ふき出いで、霊気の渦うずを巻き、唸うなりを上げながら、天に伸のび上がる。

「あれは……全部、例の包帯なのか!?」

　竜たつ巻まきを見上げるフェランの叫さけびに、シュリュズベリイが答えた。

「その通り。異次元的エネルギーを過か剰じようなまでに供給され、もはや依代としての屍体を必要としない以上、〝包帯〟というには当たらないが―ともあれ、〈真理の糸〉の集合体だ」

　竜巻は大だい蛇じやのようにうねり、瞬しゆん間かん、猫ねこ、山犬、ワニの顔を持つ怪かい物ぶつの姿を取り、そして、巨きよ大だいな―途と方ほうもなく巨大な、ゴリラとも穴けつ居きよ人ともつかない姿を取った。まるで、透とう明めいな怪物に包帯を巻き付けて実体化させたようだ。それも、単なる幻げん影えいではなく、包帯同士が結びつき合って、緊きん密みつな組織を構成しつつある。

　包帯で出来たそれが天に向かって咆ほう吼こうすると、シュリュズベリイが言った。

「奴やつめ、〈真実の盲めしいた類るい人じん猿えん〉の形態を取ったな！」

　次いで、包帯の〈類人猿〉は一向に向かって突とつ進しんした。その動きは決して素早くはないが、巨きよ体たいゆえの長大な歩ほ幅はばでみるみる近づいてくる。巨石を蹴け散ちらし、砂の大地を揺るがすその力の前には、人間の体などひとたまりもないだろう。

「うわ……！」キーンが絶句し、

「余計なことをしてくれたな、ウェスト！」フェランが毒づいた。

「ぬぬぬぬぬ、やっかましゃ――――ッ!!　凡人ふぜいが天才たる我わが輩はいに意見することは許さんのである!!」

「なにが天才だ、この――」

　ウェストと学生たちがもめているところに、

「いや、ウェスト君の行動は余計ではない。いささか不充分であっただけだ」

　と、シュリュズベリイが言った。

「博士……？」

「――よって、今から仕上げをする。諸君はできる限り距きよ離りを取りたまえ――走れ！」

「は、はい！」

　五人の学生たちとウェストは〈類人猿〉に背を向け、シュリュズベリイを置いて駆かけだした。

　その足音か、さもなくば学生たちの発する生気を感知しているのか、〈類人猿〉は彼らの後を追って速度を上げる。

　そして、ただひとりその場に残ったシュリュズベリイは、〈類人猿〉に立ちふさがる形で向き合いながら、右手を高く上げ、スナップした。

「カモン、レディ！」

『――イエス、ダディ！』

　間かん髪はつを入れず、年若い少女の声が上空から答えた。

　少女の声を発し、空気を切きり裂さいて飛んできたそれは、自動車ほどの大きさの機械の鳥――〝魔ま翼よく機バイアクヘー〟。魔術師シュリュズベリイの所有する魔導書【セラエノ断章】、その化身のひとつだ。

「ふんッ!!」

　シュリュズベリイは高々と跳ちよう躍やくした。同時に足元から

魔風を呼び出し、自らの体をさらに高く吹ふき上げる。山高い放物線を描えがくその軌き跡せきの頂点で、低空飛行に移ったバイアクヘーが主あるじを拾い上げ、機体の背に乗せると、そのまま霊糸の巨猿に正面から突つっ込んだ。

「ハスターの爪つめよ！」

　バイアクヘーの上でシュリュズベリイが前方をなぎ払はらうように手を振ふると、異次元からの風が無数の巨大な刃やいばとなって吹き荒あれ、〈類人猿〉の巨体を一いち撃げきで細切れにした。

　バイアクヘーは降り注ぐ霊れい糸しの細片の中を突き抜ぬけ、急上じよう昇しようする。

「やった！」

　背後を振り返りながらフェランが言い、しかし、

『いいや、まだだ！』

　はるか上空から、魔術的な響ひびきを帯びたシュリュズベリイの声が告げる。

　見れば、バイアクヘーの引き起こした狂きよう風ふうに吹き散らされた霊糸は、急速に再集合して〈類人猿〉の姿を取り、一いつ瞬しゆんバイアクヘーを振り仰あおいだが、再び目の前の学生たちを追い始めた。

　この霊糸の巨猿は〈ネフレン＝カの殉じゆん死し者〉たちと同様、無限とも言える再生力を持っているようだ。つまり、この怪物を滅ほろぼすためには、あくまで、エネルギーの供給源となるピラミッド―〝埋まい没ぼつした逆ピラミッド〟を破は壊かいしなければならないのだ。

『行くぞレディ―機神招喚!!』

　シュリュズベリイの声と共に、垂直上昇するバイアクヘーの直下の空間が爆ばく裂れつし、この世ならぬ次元から巨大な物体が飛び出した。それは、バイアクヘーと同様の、ただし十倍ほどの翼長を持つ、機械の鳥―頭のない鋼の巨鳥だ。

　存在しない顔で獲え物ものに食いつこうとするように、巨鳥はバ

イアクヘーを追って加速・上昇。両者の距離が縮まり、そして──

『合神──アンブロシウス!!』

　シュリュズベリイの肉体が呪じゆ術じゆつ的に分解され、光の粒りゆう子しとなって渦を巻きながら、バイアクヘーの機体に吸収された。さらに、その機体が変形し、巨鳥の機体に頭部として接合する。

　魔術師、魔導書、鬼デウ械ス・神マキナの三位一体が成立し、【セラエノ断章】の鬼デウ械ス・神マキナ・アンブロシウスの超ちよう越えつ的存在が完成した。

　シュリュズベリイの魔ま力りよくによって多発型クラ飛翔スタ魔術ー・機関群フーンの出力が倍増し、アンブロシウスは、雲を円形に吹き散ちらしながら爆ばく発はつ的に上昇する。

　その魔術構造の内部に構成された仮想コクピットから、シュリュズベリイはバイアクヘーに──【セラエノ断章】の精せい霊れい、ハヅキに話しかけた。

「おめかしはしてきたかな、レディ？」

「もちろん」

「今日の爆装ドレスは？」

「ＧＢU-Ｘバンカーバスター」

「よろしい！　合格だ、レディ」

「当然よ、ダディ」

「では──爆シユ撃ーテイだング！」

「イエス！」

　垂直上昇から対地攻こう撃げき機動へ。

　翼よく端たんで空間を切り裂き、異空間の尾おを引きながら、天ア翔ンけブるロ鬼シ械ウ神スは大空に雄ゆう大だいな弧こを描く。

+

　崩ほう壊かいしたピラミッドから数百メートルの砂さ漠ばく上で、〈類るい人じん猿えん〉はついに走る学生たちに追いつき、獲物を捕とらえた。

「うお……ッ!?」

　巨きよ大だいな手のひらにつかみ上げられたのは、他の学生をかばって最さい後こう尾びにいたフェランと、そして、心ここにあらずと言った調子で背後を振り返っていたウェスト。左右の包帯の手にそれぞれ人形のように握にぎられ、今にもどちらかが地面に叩たたきつけられるか、あるいは首を食いちぎられようか、という状じょう況きようだ。

「フェラン！」

「フェランさん！」

「くそ……！」

　フェランは〈類人猿〉の手の中でもがいた。実体のないはずの〈類人猿〉の手は、しかし、確かな握あく力りよくで彼の体を締め上げ、抜ぬけ出すことを許さない。

「怪かい物ぶつめ……喰くうなら俺だ！」

　自分の側に〈類人猿〉の注意を引き、せめて年少のウェストだけでも逃にがそうと、フェランは大声で騒さわぎ立てる、が──

「やッかましい。静かにするのである」

　恐きよう怖ふも焦あせりもない様子で、ウェストは言った。おのが命を今にも奪うばおうとする、恐おそるべき〈真理の糸〉、またその集合体が形作った〈真実の盲めしいた類人猿〉の姿──これらの脅きよう威いをまるで意識していない。文字通り眼中にないようだ。

　その代わり、彼が注意を向けているのは、〝音〟──シュリュズベリイの飛行型鬼デウ械ス・神マキナ、アンブロシウスが発する、空

間を切きり裂さき、大気を爆裂させる音だ。

　衝しよう撃げきを伴ともなう爆ばく音おんは、一瞬で上空に飛び去った。今はその残ざん響きようが、わずかな大気の唸うなりとして耳に残るばかりだ。

　―否いな。

　ウェストは超ちよう人じん的な集中力を発揮し、未いまだかすかに耳に伝わるその唸りから、アンブロシウスの機動を読んでいた。

　目視すら困難なはるか上空で、大きく宙返りをしながら一いつ旦たん距きよ離りを取り、そして―

　ゴォッ―

　砂漠の太陽を瞬しゆん間かん翳かげらせながら、一同の頭上をアンブロシウスの巨きよ体たいが通り過ぎた。

　数秒遅おくれて、アンブロシウスの通過した空中に、なにか、塵ちりのような黒い点が見えた。

　ウェストの視界の中で、それは数本の針のように、槍やりのように、そして木の幹ほどもある鉄柱の群れに変わり、ピラミッドの跡あと地ちに立て続けに飛び込んだ。

　地中バンカ貫通ーバ爆弾スター。

　全長八・五メートル。一三〇〇ポンドの炸さく薬やくを詰つめた巨大な鉄槍―いや、鉄塔が六本、自由落下の勢いを利用して一気に地下数十メートルに打ち込まれ、そして数秒後―

　低く深い地じ響ひびきと共に、六本の土つち煙けむりが噴ふき上がった。

　爆ばく弾だんのサイズからするとささやかとも思える効果だが、実際には、その爆発力の大部分は目に見えぬ地下を荒あれ狂くるい、〝埋まい没ぼつした逆ピラミッド〟の構造を完全に破は壊かいしていた。

　ピラミッドパワーの供給が突とつ然ぜん絶たれ、〈真実の盲いた類人猿〉の体が―目に見えぬ巨体を拘こう束そくしていた包帯がゆ

るむ。そして次の瞬間には、包帯は解ほどけた霊糸の雲となって、空中に跡あと形かたもなく溶とけていった。

　束そく縛ばくから解放され、まずフェランが、そしてウェストが、地上に落下した。

「フェラン！」

　仲間の学生たちがフェランに駆かけ寄り、助け起こす一方で、キーンがウェストに声を掛かけた。

「ウェスト君、大だい丈じよう夫ぶかい!?」

「……」

「あ、いや、〝ドクター・ウェスト〟？」

　再び呼よび掛けられるが、しかしウェストは答えない。

　彼は砂の上にあぐらを掻かいたまま、ぶすりとした表情で地平線を見み据すえていた。

+

　数分後──

　シュリュズベリイが魔ま翼よく機バイアクヘーの背から飛び降りると、バイアクヘーはくるりと宙返りしながら、無骨な機体を超ちよう次元的に畳み込み、小こ柄がらな少女──〝ハヅキ〟の形態を取った。

　ハヅキは軽やかな動きで地上に降り立ち、シュリュズベリイの傍かたわらに寄より添そう。

　老博士と少女の周囲を、学生たちが取り巻いた。

「さすが博士！」

「見事な攻こう撃げきでした！」

　学生たちが口々に言うと、ハヅキの取とり澄すました表情の中に、わずかに自じ慢まんげな色が浮うかんだ。少女はシュリュズベリイを見上げて言う。

「当然ね、ダディ」

「うむ。なにも特別なことではない」

　シュリュズベリイは少女の頭をなでながら、しかし、平然と言った。

「今回は我々の側に正確な情報と適切な装備、また、それらを調達するのに充じゆう分ぶんな準備期間があったというだけのことだ。そもそも―」

　超ちよう然ぜんと語られるシュリュズベリイの言葉に、学生たちは襟えりを正して聞き入る。

「そもそも、彼ら邪神群ＣＣＤは、我々人類には対たい抗こうしがたいほどに強力な存在ではあるが、それに対し、人類には『短期間に学習し、進歩し得うる』という有益な特性がある。数億年以上の寿じゆ命みようを持ち、数千年、数万年単位の眠ねむりについている彼らにとって、我々の行動は認識しがたいほどに素早い」

　シュリュズベリイの盲もう目もくの視線が、学生たちを見回した。

「ゆえに―学習せよ、諸君。眠れる邪神の瞬まばたきの合間に、調査し、推論し、実験し、発案し、対策を完成させるのだ。一歩、また一歩、怯ひるむことなく前進せよ。継けい続ぞくによる力こそが、人類に勝利をもたらす」

「はい！」

「はいッ!!」

シュリュズベリイの学生たちは、師の言葉に強くうなずいた。

　が──

「──くだらん！　くだらんのであーる！」

　やや離はなれた砂さ丘きゆうの頂上から言い放ったのは、二輪車にまたがったウェストである。ゴーグルを掛け、日よけのフードを被かぶり、背中には瓦が礫れきの中から回収した機械式バックパックを背負っている。

「『一歩一歩進め』であるとな？　こりゃまたナ～ンセンスである！　勝利をもたらすものは発想の飛ひ躍やく！　一二〇パーセントの直インスピ感レーシヨン！　貴様ら凡ぼん人じんが何万年考えようとも、天才の閃ひらめきに敵かなうものではないのであーる！」

「あっ、あいつ！」

「また高いところに登って！」

「またでかいことを言っているぞ！」

「助けられておいて、礼もなしか！」

　ウェストは不敵な表情で一同を見下ろし、

「ふん！　我わが輩はい、これ以上凡ぼん俗ぞくに語る言葉を持たぬゆえ、いざさらばである！　バーカ、カーバ、うんこちんちーん！」

「おまけに変な捨て台詞ぜりふだ！」

「ふはははははは！」

　音高いエンジンの唸うなりと共に、二輪車は反転し、砂丘の向こうに駆け下りていった。

　しかし──

　挑ちよう発はつ的な口調とは裏腹に、ウェストは自らの敗北を痛感していた。

　たとえば、この背に背負っている〝スーパーウェスト超科学万能

機械腕アーム〟、また、今乗っている、水陸両用の〝スーパーウェスト超科学自動モー二ター輪サイ車クル〟。いずれもウェストが自ら考案し、設計し、制作した機械装置デバイスだ。天才を自任するウェストは、現代の機械技術の一歩先を行くそれらの発明品を、自らの身しん体たいの拡張、おのが超ちよう越えつ性を具現化したものだと考えていた。

　だが、あの空飛ぶ城じよう砦さいとも言うべき、巨きよ大だいな飛行機械―鬼デウ械ス・神マキナアンブロシウス。その存在は、ウェストの想像力の、文字通り上を行っていた。地上にあるウェストよりはるかに高く、速く飛ひ翔しようし、そして―場の状じよう況きようを完全に制する、圧あつ倒とう的な破は壊かい力!!

　かつてペルーで、そして今しがた、ここエジプトで―ウェストの身を救ったその巨大な存在は、そのつど一いつ瞬しゆんにして飛び去り、視界から消え去った。

　地上の些さ末まつな事こと柄がらには興味なし、と言うように。

　このドクター・ウェストの存在すら、なにほどのことでもない、と言うように。

　―なんという屈くつ辱じよくか……！

「ぬぐぐぐぐぐぐ……ふ」

　ハンドルに頭を突つっ込むようにして唸っていたウェストが、一転、

「ふひゃ――――はははははは！」

　天を仰あおいで大笑いを始めた。

「老いぼれめ、このまま屈辱に甘んじている我輩ではないのである！　遠からずこの超ちよう天才の名は貴様のもうろく気味の脳のう髄ずいに深く刻まれることになるであろう。そう、覚えておくがよいのである―我輩の名はッ！」

　ウェストがアクセルを吹ふかすと、二輪車は砂すな煙けむりを上げて加速した。

「ド・ク・タァァァ――――ッ！　ウェェェェストッッ!!」

+

　ウェストの魂たましいの叫さけびは、砂丘を越こえてシュリュズベリイ一行に届いた。

「……なにか叫んでいますね」

「まったく、なんて奴やつだ」

「あの調子で、いつか大おお怪け我がをしないといいんだが……」

　学生たちが言い交わしていると、

「……ダディ、笑ってる」

　と、ハヅキが言った。

「そうかね」

　シュリュズベリイは否定も肯こう定ていもしない。だが、黒眼鏡を掛かけた顔には、確かにわずかな笑みが浮うかんでいた。

## 第三章　ハイアイアイ群島──鼻で歩くもの

　無む謬びゆう、すなわち誤りなきことが完全なる知性の証あかしであるならば、生物進化を司つかさどる神ははたして、そうした知性を備えているのだろうか。

〝適者生存〟とは、〝試行錯さく誤ご〟の言い換かえではないのか？　また、環かん境きようによる淘とう汰たが正しく為なされなかった場合、正しからざる生物が繁はん栄えいしてしまうということはないのか？

　いや、むしろ悪貨が良貨を駆く逐ちくし、また卑ひ俗ぞくが高こう尚しようなるものを腐くさらせていくように、〝正しさ〟というものが維い持じされ得ぬことこそが、神の示す摂せつ理りであるやもしれぬ。

　──ならば、神の行ないをこそ正さずばなるまい。それを実行する者、すなわち神に対して正義を行なう者、それは我輩、ドクター・ウェスト！

　そんな我輩が現在向かっているのは、南太平洋のハイアイアイ群島。この島々には、極めて特異な身体的構造を持つ動物群が生息しているという。生物学的分類は〝鼻び行こう目もく〟。そこに分類される生物群を指して〝鼻行類〟と総そう称しようする。

　その特とく徴ちようはそれぞれの種ごとに独自の発達を遂とげた鼻器にある。ある種はいく股またにも別れた鼻で逆立ちをして歩き、ある種は粘ねん度どの高い鼻はな汁じるを用いて狩かりをし、ある種は色いろ鮮あざやかな花弁状の鼻びらを使って植物に擬ぎ態たいする。

　鼻、鼻、鼻！　なんと幻げん惑わく的な、そして滑こつ稽けいなる風景か！　この島々が「生物学史上最大のジョーク」と呼ばれる由ゆ縁えんである。

　我わが輩はいはこの神秘の島の生物に触ふれることにより、生物進化に神の妥だ当とう性があるかを見極めんと欲ほつするものであ

る。

　おお、生命の神秘よ、我が眼前に鼻開いて見せよ！

―超天才ドクター・ウェスト記す

+

「あぢゃ――――――ッ!!」

　細かい経けい緯いは省くが、ウェストは重大な生命の危機に直面していた。

「あづあづあづ、ちょっと湯加減！　湯加減あづぁ――――――ッ!!」

巨きよ大だいなコンロ状の聖火壇だんに掛けられた、風ふ呂ろ桶おけほどもある大おお鍋なべ。その中の湯は刻々と温度を上げ、周囲を取り巻く現地の人型種族―フアハ＝ハチ族は、両手を後ろ手に縛しばられ鍋なべの中に吊つるされたウェストの叫びなど聞こえぬとでも言うように、香こう草そうの束や現地動物の肉のぶつ切りを次々と鍋に投げ込んでいく。新たな食材が入るたび、わずかに湯温

が下がるのはありがたいものの、なにやらどんどん鍋が具だくさんに充じゆう実じつしていくことに、今いま更さらながらに危機感がつのる。

　鍋の中身が、強い香かおりを放ち始めた。幾いく種類かの香草、果実、そして現地の獣けものやウェストの肉から出た出だ汁しが加熱と共に混じり合った結果、芳ほう香こうのエキスとも言うべきスープが生まれつつあるのだ。

　やがて、玉杓じやく子しを手にした神官―現地の言葉で〝鍋奉ぶ行ぎよう〟と呼ばれる聖職者―が進み出た。鍋の湯をすくい、厳げん粛しゆくな面おも持もちで匂においを嗅かぎ……そして会心の笑えみを浮かべ、鼻を振り立てた。アメリカ人の親指サムズ立てアップにあたる仕草だろうか。周囲のフアハ＝ハチたちも、同様に鼻を振り上げてそれに応こたえる。

　フアハ＝ハチ族の特徴は、〝ハイアイアイ面づら〟と呼ばれる長く垂れ下がった鼻。彼らが寄り集う様は、ヒンドゥー神話の象頭神ガネーシャの大群が、腰こし蓑みの一丁になって寄り合いをしているような光景だ。皆みな、象のように高々と鼻を掲かかげながら、満足げな表情で鼻び孔こうをひくつかせている。

　　プァ――――ッ！

　フアハ＝ハチのひとりが、大きな音を立てて鼻を鳴らした。歓かん喜きを表現する〝ラッパ音〟だ。

　すると、

　　プァ――――ッ！

　　プァ――――ッ！

　周囲の者たちもそれに唱和しつつ、

「ホーナタタ！」

「ホーナタタ！」

「ホーナタタ!!」

　不可思議な呪じゆ文もんめいた言葉を口々に叫さけび、集落の中はラッパ音と呪文との大合奏の有様となった。

　──しかし、喧けん噪そうの最さ中なかにあって、騒さわぎに参加しない一団がいた。中でも特に目立つ長身の老人は、長い鼻の上に黒眼鏡を掛けている。

　と──その一団が突とつ然ぜん動き出した。鍋奉行を押し退のけながら、素早く鍋の周りの空間に陣じん取どる。そして、体格のよいひとりが、ロープを引いてウェストを鍋から助け出した。彼がつけ鼻を取ると、精せい悍かんな白人青年の顔が露あらわになった。老博士ラバン・シュリュズベリイの学生のひとり、フェランである。

「君、大丈──またおまえか！」

「それはこっちの台詞せりふである！」

　さっそく言い争いを始めるフェランとウェスト。一方、シュリュズベリイはつけ鼻を取って黒眼鏡を掛け直すと、学生たちを見回した。

「では諸君、これより講義を──」

　と、その時。

　メキメキメキ──！

　集落の山側を囲む密林を草のように掻かき分わけながら、巨大な生き物が現れた。

　太さが大木ほどもある、大だい蛇じや──いや、象の鼻のようだ。一本のみならず、二本、三本……そして、四本目の鼻と共に、本体が現れた。その姿は、言うなれば〝逆立ちした四本鼻の象〟。ただし、体重を支える太い四し肢しはなく、前まえ肢あしは人間に似た細長く器用そうな腕うで、後肢は退化した突とつ起きのようなものになっている。そして、足の代わりをしているのは、しなやかな筋

肉の塊かたまりとも言うべき、四本の鼻。この生き物は、鼻で自重を支え、移動するのだ。

「博士、これが──!!」

　キーンの言葉を、シュリュズベリイが引ひき継ついだ。

「うむ、このハイアイアイ群島固有の哺ほ乳にゆう類るいであるところの〝鼻行類〟、その中でも最大の体たい軀くを持つダイダラハナアルキだ。これほど巨きよ大だいな個体は初めて見るが──」

　一方、フアハ＝ハチたちは、

「──ホーナタタ！」

「ホーナタタ！」

「ホーナタタ!!」

　長い鼻を振り上げながら口々に言うと、巨大生物に対して礼をするように、地面に鼻をこすりつけた。

　と──丸太のような鼻の先せん端たんが、フアハ＝ハチのひとりの背に打ち下ろされ、その体を完全に押おし潰つぶした。巨大ハナアルキに攻こう撃げきの意図があったわけではない。たまたまそこに鼻を踏み下ろしただけのことだ。この巨大生物にとって人間は蟻ありに等しく、存在を意識してすらいない。

　巨大ハナアルキは地じ響ひびきを立てて歩を進めると、鼻の一本を差し伸のべて聖火壇だんのあたりを嗅ぎ回った。

　やがて、巨大ハナアルキは先ほどウェストが具になりかけた鍋なべを見つけると、鼻を突つっ込み、中身を一息にすすり上げた。さらに、器用な手で鍋を口に運び、付着した汁しるの残りをぴちゃぴちゃとなめる。

　シュリュズベリイと学生たちは、物もの陰かげに退たい避ひしつつその様子を観察していた。

「どうやら、あの鍋料理はこの生き物のために作られたようですね」

「しかし、あんな量では前菜にもならんだろう」

　キーンとフェランが言い交わしていると、

「いや──見たまえ」

　シュリュズベリイが、巨大ハナアルキを指さした。

　巨大ハナアルキは、四本の鼻を不器用に動かしながら、おぼつかない鼻取りでふらふらと踊おどり始めた。さらに数人のフアハ＝ハチが踏み潰されるが、長鼻の現地人たちは、鼻を体の下に丸めながら這はいつくばるばかりだ。

「まるで、酒に酔よっているみたいだ」

「あるいはフェロモンの類か──」

　酩めい酊てい状態の巨大ハナアルキは、汁が完全になくなったのちも、執しつ拗ように鍋をしゃぶり回し、それどころか、地面に落ちた飛沫しぶきまでも、鼻の先で追っては土ごとすくい上げ、口に運んでいる。匂においい物質の一分子までも逃のがすまい、と言わんばかりだ。

　頭を低くしながら、学生たちが言った。

「どうにかやりすごせるでしょうか」

「目当ての食事が終われば帰るんじゃないか？」

　そこに、

「ぶぇ────ッくしょい！　である！」

　と、ウェストが盛大なくしゃみをした。鍋から助け出されたままの全ぜん裸らであり、冷え始めたスープでずぶ濡ぬれであった。

　まずその音に、そして匂いに、巨大ハナアルキが反応した。

「奴やつめ、食べ残しに気づいたな──来るぞ！」

　シュリュズベリイが黒眼鏡で巨大ハナアルキを見上げて言い、

「本当に余計なことしかしないな、おまえは！」

「やかまッくしょい！　文句を言うなであ――ッくしょい!!」

　フェランとウェストがもめ始める。

　その間にも、巨大ハナアルキは地響きを立てながらこちらに向かってくる。

　学生たちをかばうように一歩前に出ながら、シュリュズベリイが言った。

「走れ、諸君！　ここは私が止める！」

「はッ！」

「はいッ!!」

　学生たちが駆かけ出し、

「ぬ……！」

　シュリュズベリイの挙動を見み逃のがすまいと、ウェストが振ふり返った―が、

「おまえが逃にげなくてどうする!?」

　フェランとキーンに両りよう腕うでを捉つかまれ、連行される。

+

　走り去る学生たちと入いれ替かわりに、シュリュズベリイの頭上から、ひとりの少女が軽やかに舞まい降おりてきた。魔ま導どう書【セラエノ断章】の精せい霊れい、ハヅキだ。

「レディ、奴を押さえるぞ」

　シュリュズベリイが呼よび掛かけると、ハヅキは顔をしかめた。

「地上つかみ戦あいってわけね」

「うむ。アンブロシウスにとっては不得手な戦いとなるが―難しいかね、レディ？」

「別に、ぜんぜん」

　ハヅキはつんとした調子で言った。

「ただ、スマートじゃないな、ってだけ」

「そこを、ひとつ頼たのむ」

　シュリュズベリイが平然と言うと、ハヅキの頬ほおにわずかな笑えみが浮うかんだ。

「オーケイ、ダディ」

「よい子だ、レディ。では―機神招喚!!」

　魔ま術じゆつ師しシュリュズベリイと、彼の記した魔導書であるハヅキ―主従であり父おや娘こでもあるふたりは、声を合わせ、機神招喚の口こう訣けつを唱えた。

　我は勝利を誓ちかう刃ハ金ガネ

　我は禍まがつ風かぜに挑いどむ翼つばさ

　無む窮きゆうの空を超こえ

　霊アヱ子テユルの海を渡わたり

　翔かけよ、刃金の翼！

　学生たち―正確には供物のスープを浴びたウェストひとり―の匂いを辿たどり、巨きよ大だいハナアルキは突とつ進しんする。その軌き道どう上にあるシュリュズベリイの姿は、まったく目に入ってはいない。丸太のような鼻が、老博士の体に叩たたきつけられようとした時―

「「舞い降りよ──アンブロシウス！」」

　ドン──！

　はるか高空から空間を割さいて現れ、巨大ハナアルキの目の前の地面に突つき刺ささるように、鋼の巨体が降り立った。

　それは巨大な猛もう禽きんのようでもあり、鋼鉄の枠組みフレームからなる骸がい骨こつのようでもあった。両手に握にぎられた大デス鎌サイズとも相まって、〝空飛ぶ死神〟のような禍まが々まがしい印象を全身にまとっている。

　可変飛行型鬼デウ械ス・神マキナ、アンブロシウス──その人型形態。ハヅキとシュリュズベリイは、アンブロシウスの着地と同時にその機体に取り込まれ、すでに一体化している。

　地に降り立った大いなる凶きよう鳥ちよう──人と書と機械の三位一体をなした鋼の巨神は、突進する巨大ハナアルキに正面から打ち当たった。体高はほぼ互ご角かく。されど──アンブロシウスは弾はじき飛ばされる形で一歩後退した。そのまま仰あお向むけに倒たおれかけるところを、巨体に似合わない身軽さを発揮して、体勢を立て直す。

「ふむ」

　アンブロシウスの内部で、シュリュズベリイが呟つぶやいた。

「やはり、飛行に適した骨格構造フレームを持つアンブロシウスと、陸上生活に適応した生物との間では、重心の安定に大きな差があるな」

「もう、こんなの爆ばく弾だんで一発なのに」

　ハヅキがぼやいているように、爆ばく装そうと高速機動能力を活かした一撃ヒツト離脱＆ア戦法ウエイで当たるならば、この程度の怪かい物ぶつ──いや、超ちよう常じよう的性質を持たない単なる巨大生物──はアンブロシウスの敵ではない。だが──

「そう言うな、レディ。学生諸君の退路を確保せねばならん」

　シュリュズベリイ／アンブロシウスは再び巨大ハナアルキの前に立ちふさがると、大鎌を振りかぶった。

「気象攻こう撃げきもエーテルランチャーも使っちゃ駄だ目めなの？」

「標本を持ち帰りたいのでな」

「いろいろ面めん倒どうくさいね」

　ハヅキの呟きと共に、アンブロシウスは大鎌を薙なぎ払はらった。鋭えい利りな魔ま刃じんが巨大生物の首を刈かり、山のような巨体を転てん倒とうさせる。

「ま、楽勝だけど」

「いや――待て、レディ」

　巨大ハナアルキの胴どう体たいは、滝たきのような血を流しながら、地じ響ひびきを立てて転倒した。一方その首は、四本の鼻に支えられたまま、四足獣じゆうのようにとことこと歩く。

「わお……すごい生命力！」

「――いや……？」

　魔導書の化身たるハヅキは鋭えい敏びんな魔ま術じゆつ的感覚を持っていたが、彼女の盲もう目もくの主あるじの魔術的視覚はさらに鋭するどいものだった。

　シュリュズベリイは霊視みた。ただの獣に過ぎないはずの生物が、頭部から奇き妙みような霊れい気きをにじみ出させている……？

　ドウッ――！

　巨大ハナアルキの頭部は、四本の鼻で地面を蹴けって、高々と跳とび上がった。アンブロシウスの足元から、その頭の高さへ――

　空中では無類の速度を誇ほこるアンブロシウスだが、地上での格かく闘とうにおいては、その動きは数段鈍にぶる。一いつ瞬しゅんの反応の遅おくれを突いて、四本の鼻が顔面につかみかかってきた。

「――ッ！」

　とっさに顔面を庇かばった右みぎ腕うでに巨大ハナアルキの頭部は蛸たこのように絡からみつき、そして、

　メギ……ッ！

　アンブロシウスの手のひらから、大鎌が落ちた。

　恐おそるべき腕わん力りよく、いや、鼻力によって鬼デウ械ス・神マキナの腕部が締しめ上げられ、そして、ねじ折られた。

「ぬう……！」

　シュリュズベリイは低く唸うなった。アンブロシウスと感染魔術的連携状態にある彼は、腕の骨を粉ふん砕さいされる幻痛を感じていた。そのショックと苦痛の中でなお、魔術を行使し得る精神的な平へい衡こう状態を保ち得たのは、類たぐい希まれな胆力の賜たま物ものだろう。シュリュズベリイ／アンブロシウスは自由な左手を巨大ハナアルキの頭部に押しつけた。

「吹ふけ、ヒアデスの風！」

　アンブロシウスの五本の爪つめから噴ふき出した魔ま風ふうの刃やいばが、巨大生物の頭部をずたずたに引ひき裂さいた。

　シュリュズベリイはなおも注意深くその残ざん骸がいを観察したが、巨大ハナアルキに宿っていた何者かは、頭部の破は壊かいと共にいずこかへと消え去っていた。

+

　太平洋はゆるやかなうねりを見せながら、全周囲を水平線に切り取られている。雲はなく、風は弱く、陽射しは正午に向け徐じよ々じよに強まりつつある。

　ハイアイアイ群島沖おき、北東三百キロの海上に、鋼鉄の浮うき島しま―いや、巨大な艦かん艇ていが、長い航こう跡せきを曳ひいていた。覇道財ざい閥ばつの私設艦隊に所属する航空母艦〈カルコサ〉。現在はシュリュズベリイの学術調査隊の〝動く拠きよ点て

ん〟として、ミスカトニック大学に貸たい与よされている。

その甲かん板ぱんに、一機の航空機──飛行形態のアンブロシウスが翼つばさを広げている。

〝空母と艦かん載さい機き〟と言うには、そのサイズ比はあまりにも不自然だ。全長約三百メートル、全ぜん幅ぷく約四十五メートルの飛行甲板、その面積の何割かを、アンブロシウスの機体が占しめてしまっている。戦略爆ばく撃げき機に匹ひつ敵てきするその巨きよ軀くを離り着ちやく艦かんさせることは、たとえ超ちよう巨艦〈カルコサ〉であっても、常識的には不可能だ。滑かつ走そう路ろ長が絶望的なまでに足りない。それどころか、着艦時の衝しよう撃げきで転てん覆ぷくしてしまうだろう。

しかし、鬼デウ械ス・神マキナであるアンブロシウスには、通常の発着手順は必要ない。術者シュリュズベリイは、身ひとつで魔ま翼よく機バイアクヘーを駆かって高高度の空中に赴おもむき、その場にアンブロシウスを転送することができる。鬼デウ械ス・神マキナの運用には、本来、いかなる設備も必要ではないのだ。

では、アンブロシウスはここでなにをしているのか。

鋼の機体には今、十人あまりの整備員が取りつき、爆装を施ほどこしている。実体化した鬼デウ械ス・神マキナの機体に、航空機搭とう載さい用の爆弾を取りつけているのだ。

現在、装備が進められているのは〝Ｄ型爆装〟。攻撃目標によって換かん装そうされるアンブロシウスの装備の中でも最大の破壊力を持つ〝デクスター爆弾ボム〟が、機体下部の支持架かに固定されつつある。

上陸調査の結果、シュリュズベリイはハイアイアイ群島を〝要破壊〟と判断した。独自の発達を遂とげた生物群は、未知なる邪神ＣＣＤの依より代しろになり得る。また、高い知能を持った亜あ人間、フアハ＝ハチ族の存在も、〈深きものども〉に準ずる重大な危険を孕はらんでいると言えるだろう。

──よって、五十キロメートル四方にわたるハイアイアイ群島全域を、一発の超ちよう高こう威い力りよく爆ばく弾だんにて焼しよう却きやくする。

それが、シュリュズベリイの出した結論だ。

地上随一の貴重な生態系の、完全破壊──表の世界の生物学者が聞けば卒そつ倒とうしそうな蛮ばん行こうである。だが、シュリュズベリイは学者である以前に闘とう士しであった。邪神群ＣＣＤとの闘争は、予断の入る隙すきのない、互たがいの存在を抹まつ消しようし合う殲せん滅めつ戦なのだ。

〈カルコサ〉が爆撃の影えい響きようを受けない安全距きよ離りに至るまで、およそひと晩の時間が掛かかったが、爆ばく装そうが完かん了りようし次第、アンブロシウスは発進することになっている。

一方──

甲板の空きスペース──それでもちょっとした運動場ほどの広さがある──には、群島への滞たい在ざい中に採取した無数の標本が広げられ、分類され、保存処置を施されている。

植物に昆こん虫ちゆう、それに、ハイアイアイ特有の哺ほ乳にゆう類るいである各種鼻び行こう類るい……特に鼻行類は、小は虫ほどの大きさから、件の鬼デウ械ス・神マキナに匹敵する巨大個体まで、さまざまな種類が取りそろえられている。象のような鼻を持つもの以外にも、吸きゆう盤ばん状の鼻を持つもの、花弁に似た色いろ鮮あざやかな鼻を持つもの、脚あしのような筋肉を備えた鼻を持つものなど──象頭のフアハ＝ハチ族の遺体もある。

そんな中、

「見るがよいのである！」

ウェストはメスを振ふるいながら、嬉き々きとして叫さけぶ。

「コレこの通り、彼奴きやつらの脳をば開いてみれば、前梨状皮質、扁へん桃とう体、視し床しよう下か部ぶ、眼がん窩か前頭皮質など、嗅きゆう覚かくに関連する部位が異常発達していることは一いち目もく瞭りよう然ぜん！　知っての通り、嗅覚とは五官のうちで最も原初的な感覚であり、記き憶おくや情動の誘ゆう発はつに強く関かん与よするものである！　しかるに、これら超ちよう嗅きゆう覚かくを持つ獣けものどもが如い何かなる精神を持ち、また、如何なる形で世界を認識していたか──それこそは、この超天才の興味

を引いてやまぬ、深遠なるテーマなのであーる！」

「〝深遠なるテーマ〟はいいが……勝手に標本を解かい剖ぼうするな！」

　ウェストがさばいていた犬ほどの大きさの鼻行類を、フェランが取り上げた。

「今ちょうどノってきたところなのである！　邪じゃ魔まをするなである！」

　と、今度はウェストが、鼻行類の尻尾しつぽを持って引っ張り返す。

「こら、離はなさんか……！」

「あいや、子の痛がるを見て手を離すがまことの母親であ――る！」

　それぞれ鼻行類の片手、片足ずつを持って引っ張り合うウェストとフェラン。

　その様子を見て、

「……バカみたい」

　突つき放はなすように呟つぶやくハヅキに対し、シュリュズベリイは苦笑を浮うかべながら進み出た。

「ウェスト君。この手のことに興味があるのならば―どうだ、君もアーカムに来ないかね」

「……ぬ？」

　怪け訝げんな顔をするウェストに、シュリュズベリイは続けて言う。

「ミスカトニック大学は、君のように才能と気き概がいに富む人材を求めている。また、この調査隊の成果物を含ふくめ、すべての謎なぞと神秘はアーカムに集められることになっている。君が求める知識も、必ずそこで得られるはずだ」

だが、ウェストは鼻を鳴らして嗤わらうばかりだ。

「ふん、凡ぼんオさいどもと阿あ呆ほうづら並べてお勉強する気など、さらさらナッスィング！　それと、我わが輩はいのことは〝ウェスト君〟ではなく──」

ウェストらの会話に、作業服を着た整備員が割って入った。

「──博士、準備完了しました」

シュリュズベリイは重々しく頷うなずいた。

「うむ。では行くぞ、レディ」

「オーケイ、ダディ」

ハヅキがその場で肉体を展開し、魔ま翼よく機バイアクヘーの形態を取った。シュリュズベリイはその背に飛び乗りながら、ウェストを振り返る。

「ウェスト君、今の話、考えておいてくれたまえ」

「だ～から、我輩は……ッ!!」

ウェストの叫びは、バイアクヘーのフーン機関の唸うなりに掻かき消けされる。

魔翼機は甲かん板ぱんから数十センチの高さに一いつ瞬しゆん滞たい空くうし、そして、一直線に上じよう昇しようした。充じゆう分ぶんな高度を取ったのち、甲板上から空中にアンブロシウスを招しよう喚かんし、ハイアイアイ群島に向かうのだ。

が、その時──

垂直上昇するバイアクヘーを追うように、〈カルコサ〉の右う舷げんの海上に、巨きよ大だいな水柱が立った。クジラのブリーチングを思わせる動きで海面上に躍おどり上がったのは、見たこともない海かい棲せい生物──

「……む!?」

『ダディ、あれは!?』

クジラやイルカのようなひれ状の手足に、蛸たこを思わせる頭部──その印象の源は、数本に枝分かれした触しよく腕わん状の鼻だ。つまり──

「これも鼻行類──海棲適応した亜あ種しゆか！」

重力の制約を受けない海中で進化したそのハナアルキは、地上でアンブロシウスと格かく闘とうを演じた種の、さらに数倍の大きさを持っていた。海面から現れた部分だけでも百メートル以上。全体では〈カルコサ〉に匹ひつ敵てきしようかというサイズだ。

超ちよう巨きよ大だい海かい獣じゆうの鼻が宙に振り上げられ、バイアクヘーにつかみかかった。バイアクヘーがきりもみ機動で上空に逃のがれると、今度は〈カルコサ〉の甲板に、バラ鞭のように何本もの鼻を叩たたきつける。たちまち甲板がひしゃげ、〈カルコサ〉は木の葉のように揺ゆれた。

「うおッ！」

「どわ────ッ!?」

シュリュズベリイの学生たちや〈カルコサ〉の乗組員、それにウェストが、平へい衡こうを失って転てん倒とうした。整理中の標本が、跳はね転がって甲板を飛び出し、海中へ落ちていく。

『ダディ、どうする？』

ハヅキが問うた。

『ま、アンブロシウスの敵じゃないと思うけど』

彼女の言う通り、鬼デウ械ス・神マキナの攻こう撃げき力を以もつてすれば、ただ大きいだけの海棲ハナアルキは、瞬しゆん時じに細切れにできるだろう。

だが、シュリュズベリイは眼下の様子を見ると、黒眼鏡の上の眉まゆをひそめた。

「いかん……！」

バイアクヘーから〈カルコサ〉に興味を移した海棲ハナアルキは、触しよく手しゆ状の鼻を艦かん体たいに巻きつけ、みしみしと

力を加え始めた。すでに艦体の複数の箇か所しよには亀き裂れつが入り、浸しん水すいが始まっている。このままでは沈ちん没ぼつは必至。乗員の脱だつ出しゆつも危うい。その上にアンブロシウスが戦せん闘とうを始めれば、確実に皆みなを巻き込んでしまうだろう。

シュリュズベリイはバイアクヘーから飛び降り、数秒の落下ののち、揺れる甲板に着地した。

『甲板に集合！』

魔ま術じゆつ的な響ひびきを帯びたその発声は、〈カルコサ〉の艦かん内ないに響き渡わたった。

程なく、数ヶ所の昇しよう降こう口から、軍服や作業着を着た乗組員たちが、甲板に駆かけ上がってきた。

その数、約三百名。航空部隊を搭とう乗じようさせず、また、艦内業務のかなりの部分を自動化しているため、この規模の空母を運用する人数としては、非常に少ない。

シュリュズベリイの前に乗組員が整列すると、〈カルコサ〉艦長が進み出て、敬礼した。この種の超ちよう現実的な非常事態においては、シュリュズベリイが指揮権を握にぎることになっている。

「この艦を放ほう棄きする。乗員に蜂蜜酒ミード服用の指示を」

「はッ！」

艦長はシュリュズベリイに再び敬礼すると、乗員の列を振ふり返った。

「総員、蜂蜜酒ミード服用ッ！」

と──この指示を予測していたのだろう、何人かの作業員が、ラックに載のせて運んできていた小さなガラスアン容器プルを、手早く全員に配り始めた。アンプルの中味は、シュリュズベリイ自身も常用している、〝黄金の蜂蜜酒〟と呼ばれる魔術的ドラッグだ。

「ウェスト君、君も飲むんだ」

キーンがウェストにアンプルを手て渡わたした。

見れば、シュリュズベリイの学生たちは手渡されるまでもなく、非常用に持ち歩いているアンプルを懐ふところから取り出すと、その頭を折って中味を飲み下している。

ウェストもまた、見よう見まねで、そのひと口ほどの液体を喉のどに流し込んだ。

すると、

「ぬお……!?」

〝蜂蜜酒〟の作用によって拡張された知覚が、ウェストの認識する世界を一変させた。視し聴ちよう覚かくはかつてないほどに研とぎ澄すまされ、霊れい気きの流れのようなものまで感じられる。

いや、それだけではない。自分の肉体が今、通常の空間から、そこに重なって存在する霊的な異次元へ移行したことを、ウェストは直観的に理解した。感覚の変容は、その副作用だ。

海も、甲かん板ぱんも、通常の物質はみな半はん透とう明めいになり、足下がおぼつかない。

その一方、蜂蜜酒を飲んだ人間たちの姿は、同様に〝こちら側〟に来ているためだろう、はっきりと見えている。

そしてまた──陽炎かげろうのようにゆらめく甲板上に、鬼デウ械ス・神マキナアンブロシウスが確固とした存在感を示している。いや、先ほどまで航空機然とした姿で見えていたその機体は今や、時に整然と、時に混こん沌とんとして蠢うごめく、圧あつ倒とう的な密度を持った超論理の塊かたまりに観みえている。通常空間に顕けん現げんする鋼のボディは、魚が水面に立てる波は紋もんのように、その存在のほんの一部を示していたに過ぎないのだ。

（これが……鬼デウ械ス・神マキナとやらの本質か!!）

その凄すさまじい存在感に、ウェストは半ば畏い怖ふし、半ば不敵な笑えみを浮うかべる。

と──

「なにしてる！　早く行くぞ！」

ウェストの腕うでを、フェランが引いた。

海かい棲せいハナアルキの鼻―これも今は半ば透とう明めいに見えている―は、なおも空母に対する攻撃を続けていた。新たに一本の鼻が振り上げられ、甲板の人間たちに振り下ろされる。

「ふんッ！」

その鼻に向かって、シュリュズベリイは片手で魔ま風ふうの刃やいばを喚よび出し、打ちつけた。見えざる斬ざん撃げきは塔とうのように太く長い鼻を斬きり飛ばしたものの、海魔の鼻はまだ何本もある。

シュリュズベリイは背後を振り返って叫さけんだ。

「―アンブロシウスに乗れ！」

このような自体を想定して、事前に訓練が為なされていたのだろう。シュリュズベリイの号令と共に、学生と乗組員たちは皆、甲板上のアンブロシウスに駆け寄った。そして、超論理的機体の各所に取りつけられたはしごラダーから、蟻ありの群れのように規律正しい動きで、全員が鋼の翼つばさの上に登った。

「行けるか、レディ!?」

機首に飛び乗ったシュリュズベリイが問うと、

『オーケイ、ダディ』

すでにアンブロシウスと一体化しているハヅキが答える。

「よろしい、では―翔とび立て、アンブロシウス!!」

ゴゥ―アンブロシウスの機体が、平へい衡こうを保ったまま、垂直に上じよう昇しようを始めた。

戦せん闘とうを避さけて上空に抜ぬけ、三百余名の人間を翼に載せたまま、太平洋を横断してアーカムに帰き還かんする―鬼デウ械ス・神マキナの中でも特に速度と航こう続ぞく距きよ離りに優れるアンブロシウスならば、それが可能だ。また、先ほど乗員らに飲ませた蜂蜜酒は、超ちよう音おん速そく飛行の衝しよう撃げきから彼らの肉体を保護するだろう。

しかし──

──ギシッ！

機体の軋きしみと共に上昇が止まり、機体が大きく傾かしいだ。

「博士……！」

キーンが主しゆ翼よくの縁ふちから身を乗り出し、機体の下部をのぞき込んでいた。その指差す先を見ると──アンブロシウスの着陸脚きやくに、海棲ハナアルキの鼻が巻きついている。

伝説の大海うみ蛇へびにも似た巨きよ大だいな鼻が、アンブロシウスの機体を力強く引き戻もどした。

『ダディ！』

「……ッ！」

シュリュズベリイは躊ちゆう躇ちよした。

背中に生身の人間を乗せている状態では、アンブロシウスに攻こう撃げきの手段はない。速度と機体の頑がん丈じようさを利用した体当たりも、また、多た彩さいにして強力な攻撃手段を持つ人型形態への変形も、今は不可能だ。爆ばく弾だんを使用しようにも、この至近距離では爆発に巻き込まれてしまう。

『もう……ほんと、人間って足手まといね』

「そう言うな、レディ」

シュリュズベリイはかぶりを振ふった。

確かに、彼──ＣＣＤ勢力との知られざる闘とう争そうの尖せん兵ぺい、人類史上最強の〝邪神ホラー狩人ハンター〟たるラバン・シュリュズベリイ自身は、自らの戦いにおいて、敵に後おくれを取ったことはない。危機は常に同行者に訪れ、苦戦は常に彼らの安全のために戦われる。

だが、シュリュズベリイは、彼らを邪じや魔ま者とは考えない。

いかに強力な魔ま術じゆつ師しであっても、自分は単なる個人に

過ぎない。一方、邪神群ＣＣＤとの長い戦いにおいて求められるのは、人類が総力を以もつて戦う手段だ。

　邪神ＣＣＤの奉ほう仕し種族に対して格かく闘とう術を用い、その拠きよ点てんの破は壊かいには通常の爆薬を用い──シュリュズベリイが能あたう限り魔術以外の手段を用いて戦うのは、魔術を持たぬ生身の人間のための、普ふ遍へん的な戦術を模も索さくするためだ。彼ら常人が魔の存在に触ふれ、大いなる脅きよう威いに対たい抗こうするための知識と経験を蓄ちく積せきする──自分はその介かい添ぞえをしているに過ぎない。

　足手まといなどではない。彼ら次世代の抵抗者の育成こそが、最大の目的なのだ。

　だが現在、状じよう況きようはいささか困難だと言える。

　海棲ハナアルキの超ちよう巨きよ体たいに対し、こちらはアンブロシウスの攻撃力を封ふうじられている。その上、今はバイアクヘー＝ハヅキはアンブロシウスの機体の制せい御ぎよに専念しなければならない。

『どうするの、ダディ』

「──私が片づける」

　シュリュズベリイはアンブロシウスの機首から飛び降りた。そして、空中で身をひねりながら、着陸脚に巻きついた鼻に向かって手を突つき出す。

「ハスターの爪よ！」

　魔風の刃やいばが乱れ飛び、触しよく腕わん状の鼻に斬きり掛かった。

　だが、その時──海かい棲せいハナアルキの頭部から強力な霊れい気きが這はい上がり、鼻の表面を覆おおった。

　霊気の層が風の刃を弾はじき、跡あと形かたもなく消しよう滅めつさせた。

「なに……!?」

　驚愕するシュリュズベリイの隙すきを突いて、もう一本の触手が死角から叩たたきつけられた。

　シュリュズベリイは大きく弾き飛ばされ、海面すれすれで別の鼻にキャッチされ、そしてぐるりと巻きつかれ、体の自由を奪うばわれる。

「ぐ……しまった！」

　学生たちが、アンブロシウスの機体の縁から身を乗り出した。

「博士！」

「シュリュズベリイ博士！」

『―ダディ！』

　一本、さらにもう一本―海中から伸のびた鼻がアンブロシウスに巻きつき、力を込めて機体を拘こう束そくした。

　眼下では、〈カルコサ〉の艦かん体たいが、大渦うずを巻きながら海面下に沈しずんでいく。

　ブォ――――ッ!!

　威い嚇かくか、それとも勝ちどきか。海かい棲せいハナアルキが、何本もの鼻を振り立て、先せん端たんの鼻び孔こうから潮を吹ふいた。

　―万事休すか!?

　触しよく腕わん状の鼻にみしみしと全身を締しめつけられながら、シュリュズベリイが思った、その時。

「ふは――――ッはッはッはッはッはッはッは！」

　場ば違ちがいなまでに脳天気な高笑いが、逆巻く海を圧して響ひびき渡わたった。

「おお、貴様ら凡ぼん人じんにはもはや打つ手なし、といったところであるな!?　では呼ぶがよい、我わが輩はいの名を！　このごろ流行りの大天才、お尻しりの小さな超ちよう天才、だってなんだ

か、だってだってなその人の名はッ！　ドォクタァァ――ッ！　ウェェェストッッ!!」

「な!?」

　キーンが振り返ると、本来シュリュズベリイの定位置であるアンブロシウスの機首の上に、ウェストが仁王立ちになっていた。白衣の裾すそをなびかせ、腕うでを組み、背には四本腕の万能アームを背負っている。

「なにか考えがあるのか、ウェスト!?」

　フェランが言うと、ウェストはぐっとあごを上げ、

「ドクタァ――ッ！　ウェェェストッ!!」

「この……！」

　気色ばむフェランを押さえて、キーンが言った。

「聞かせてくれ、ドクター・ウェスト！」

　だが、ウェストはつんと横を向いたまま、ちらりとフェランを見る。

「頼たのむ、その……ドクター・ウェスト」

　フェランがしぶしぶ言うと、ウェストはにたりと笑い、

「ヤダぴょーん、である！」

「な、この……！」

　ウェストは高笑いを交えながら、シュリュズベリイの学生たちをぐるりと指差した。

「ぬっはははは、バカにも分かるように口頭で説明するのは甚はなはだ面めん倒どうであるゆえ、貴様ら全員、我輩の大活かつ躍やくを目ン玉かっぽじってよく見ているがよいのであーる！」

　言い捨てると、ウェストは両手を拝むように合わせ、眼下の大海かい獣じゆうに向かって頭からぴょいーんと飛び降りた。四本のアームの先端がドリルになり、進行方向を指している。

「突とつ撃げきッ！　ドリラ――――ッ!!」

海棲ハナアルキの額への着地と同時に、ウェストは海獣の体を掘削し始めた。

「掘ほって掘って掘りまくるのであ――――る！」

ずびゅぶぶぶ――

挽ひき肉機のようなくぐもった音を立てながら、ウェストの体はみるみる海獣の額に埋うまっていった。一本の鼻がぴしゃりと額を叩いたが、その時にはもう、ウェストは完全に海獣の内部に潜もぐり込んでいた。

「おお、体内に入り込んだぞ！」

「しかし、あの程度では到とう底てい致ち命めい傷しようには――」

「いや……待て」

フェランが呟つぶやいた。

「あいつ、脳に向かっている……？」

蜂蜜酒ミードを飲んだ学生たちには、海棲ハナアルキの体の構造が、半ば透すけて見えた。そしてまた、ウェストがハナアルキの頭ず蓋がいを掘り抜ぬき、脳に到とう達たつし、さらに掘り進むさまも。

同時に、シュリュズベリイはその行こう為いの意味を理解した。

ウェストは闇やみ雲くもに脳を破は壊かいしようとしているのではない。ハナアルキの脳の構造中の、致命的かつ最重要な〝ある一点〟を狙ねらっているのだ。

それは、鼻び行こう類るいの脳に存在する〝超ちよう嗅きゆう覚かくの座〟。極限の嗅覚によって得られる、人類には及およびもつかないレベルに至る入神状態が、彼らの肉体に超・霊れい的てき存在を呼び込み、異常な霊気と生命力の源となす。逆に言うと、彼らを神かみ懸がかりの状態から引き下ろすためには、脳のその部分をこそ破壊する必要があるのだ。

それにしても――シュリュズベリイは思った――わずかな経験と、先ほどの標本解かい剖ぼうのみで、その結論に至ってしまうとは、

この少年の才能はどれほどのものなのか……！

　数秒のち―

　ブァ――――ッ!!

　音高い苦鳴と共に、多数の長い鼻が痙けい攣れんし、アンブロシウスとシュリュズベリイに対する拘こう束そくが緩ゆるんだ。脳から湧わき出し鼻に流れていた霊気も、一いつ瞬しゆんにして枯かれ果てる。

「うむ！」

　シュリュズベリイは巻きつく鼻を魔ま風ふうの刃やいばでばらばらに切り裂さきながら、大きく空中に飛び出し、アンブロシウスに向けて手を伸のばした。

　ビュルルッ―

　袖そで口ぐちから飛び出した〝黄布〟が、長いロープとなって翼つばさの一部に巻きつく。

「上じよう昇しようだ！」

『イエス、ダディ！』

　アンブロシウスは機体の水平を保ったまま、垂直に上昇した。シュリュズベリイは〝黄布〟を収縮させ、自らの体を機上にたぐり上げた。

　そして、一行が無事に鼻の射程距きよ離りを脱だつしたかと思えた時―

　ビュッ―!!

　一本の鼻の先から、強粘ねん性せいの液体が、アンブロシウスの機体に浴びせかけられた。

　粘液は糸を引きながら機体下部に固定されたデクスター爆弾ボムに付着し、瞬またたく間に、海かい魔まと機神をつなぐ樹脂状物質のロープと化した。

グン──

アンブロシウスの機体が、再び力強く引き戻もどされる。

『──ッ！』

ハヅキは反射的に、デクスター爆弾ボムを投下した。

爆弾は粘液に引かれながら落下していき、そして、起爆した。

同時に、アンブロシウスの機体が、一いつ瞬しゆんにして極ごく超ちよう音速に加速。三百余名の人間を背に乗せたまま、爆ばく発はつの火球の広がりも、衝しよう撃げき波はも追いつけない速度で、空を切きり裂さいて飛んだ。

デクスター型水素爆弾が海上に巨きよ大だいな──高さ数十キロに及ぶ──キノコ雲を作った時には、その機体は優に爆発圏けん外がいに逃のがれていた。

+

一時間後──

アンブロシウスは爆発地点の海上に浮ふ遊ゆうしていた。

蜂蜜酒を飲んでいなければ、この破壊の跡あとに残る熱と放射性降下物だけでも、人体には致命的な悪あく影えい響きようがあるだろう。変色し、泡あわ立だった海上には、一片の肉片も、また空母の破片すらも残ってはいなかった。

無論、これは予想されていたことだ。シュリュズベリイ一行が爆発地点に戻ったのは、各人の気持ちの整理をつけるために過ぎない。

『ごめん、ダディ。あそこでやっつけなきゃと思って……』

普ふ段だんは勝ち気な様子を見せるハヅキが、珍めずらしく、しおらしい声を出した。

「いや、レディ。君の判断は的確だった」

　答えるシュリュズベリイの声からも、日ごろの湧わき出るような自信が欠けている。

「彼の命を奪うばったのは、私のミスだ。……とても合格とは言えんな」

　デクスター爆弾ボムの一いち撃げきによって、超巨大海かい棲せいハナアルキは跡形もなく焼しよう却きやくされた。だがその際、身を挺ていしてシュリュズベリイらの脱だつ出しゆつの機会を作ったウェストも、その爆発に巻き込まれた形になる。

　もちろん、爆弾の投下がなかったとしても、ハナアルキの体内深くに潜もぐり込んだウェストを助け出すことは困難だったろう。ゆえに、ハヅキを責めるには当たらない。シュリュズベリイの無念は、ウェストに犠ぎ牲せい的行動を取らせる結果を生んだ、我が身の不手際にある。

「彼──ウェストに、僕ら全員が救われた……ということになりますね」

　海面を見つめながらキーンが言うと、フェランが頷うなずいた。

「大バカだが、勢いはある奴だった……」

　そう呟つぶやきながら、厳げん粛しゆくな面持ちで水平線を見み遣やり──

　と、

「……おい、あれはなんだ？」

　爆発地点から十キロあまり離はなれた海上に、なにか塵ちりのように小さなものが見えた。

　低速・低空飛行で接近するとやがて、それの姿が大きくはっきりと見えてきた。

　ズバババババババ、と高速で抜ぬき手てを切って推進する、四本腕うでの航行体──

「ふはははははは！　この我わが輩はいの機メカ械ニカル式・バツ背クパ嚢ツクに装備された〝ウェスト式超ちよう電磁バリヤー〟の威い力りよくを以もつてすれば、核かく爆ばく発はつのひとつやふたつ、ちゃらちゃらへっちゃら、屁へのカッパなのであ――――る！」

　誰だれに向かって説明しているのか、大声で自じ慢まん話をしながら泳いでいるのは、

「……ウェスト！」

「おおい、こっちだ！」

　学生たちがウェストに手を振ふり、海面ぎりぎりまで降下したアンブロシウスの機上から、フェランが手を差さし伸べた。

「つかまれ、ウェスト！」

　すると、ウェストは答えた。

「―断るのである！」

「あ？」

「貴様らの手は借りんのであーる！」

「なにを言ってるんだ。おまえ、陸地まで泳いでいくつもりか!?」

「あったり前であ――――る!!」

　すると、

「ふむ……いや、その意気やよし！」

　シュリュズベリイがにやりと笑った。

　―長く困難な戦いの中で自分が育てようとしているのは、まさにこのような人材ではないだろうか。

　あるいは、〝育てよう〟などと考えることさえおこがましいかもしれない。この少年は、誰に育てられたのでもなく、まさにそうなるべく生まれついたのだ。魔の存在に対たい峙じしてなお、何者の助けをも乞こわず、自らの意志で突き進む人間―なんと頼たのもし

い！

「よし、では行こう、ハヅキ」

『イエス、ダディ』

「──え？」

「いいのですか、博士？」

　学生たちの戸と惑まどいをよそに、アンブロシウスの機体は再び高度を上げ始めた。

　フーン機関の唸うなりが、超加速に向けて高まっていく。

「それでは──いつかアーカムで会おう、ウェスト君！」

　シュリュズベリイはウェストに向かって手を上げ、

　ゴゥ──!!

　飛行型鬼デウ械ス・神マキナの姿は、ウェストの視界から瞬しゆん時じに消え去った。

「ぬぅ……！」

　海上に取り残されたウェストは、残響の残る空を見上げた。

　──アーカムには行ってやろう。

　しかし、それは教えを請こうためではない。

　アーカムに集うという謎なぞと神秘を、自らの手でつかみ取るためだ。

　そしてもうひとつ、あの老人には言ってやらねばならん。そうとも──

「〝ウェスト君〟ではないッ！」

　ウェストはアームの速度を上げた。

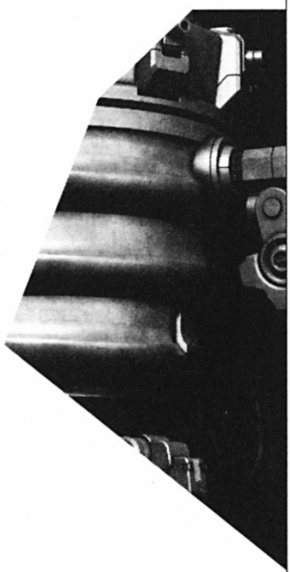
「我輩の名はッ！　ド・ク・タァァァ────ッ！　ウェェェェス

トッッ!!」」

　太平洋の只ただ中なかにあって、ズバババババババ、と激しくしぶきを立てながら、ウェストはアンブロシウスが空中に残した航こう跡せきを追って前進し始めた。

　一路、北米大陸へ。

　混こん沌とんと怪かい異いの都、アーカムへ──



# 第三話 破壊の序曲

時は、大黄金時代にして大混乱時代にして大暗黒時代──その前夜。

世界最大の都市アーカムシティはあらゆる人種、あらゆる階層、あらゆる職種の人の群れを孕はらんで坩る堝つぼのごとく沸わき立ち、今なお成長を続けている。

善と悪、光と闇やみ、あらゆる二律アンテイ背反ノミイが渦うずを巻いて溶とけ合う混こん沌とんの巷ちまた。そして、繁はん栄えいを極める都市の喧けん騒そうの下には、冥くらく底冷えのする静せい寂じやくが──いや、

「どぅわーっはっはっはっはっは！　ドォクタァァ────ッ！　ウェェェストッッ!!」

地下研究室の淀よどんだ空気を吹ふき飛ばすように、高らかに笑う男があった。

彼こそは魔ま術じゆつ結社〝ブラックロッジ〟の擁ようする天才科学者、魔術師さえもその眉まゆをひそめる異い端たんの科学の徒と、ドクター・ウェストその人である。感極まると自分の名前を叫さけぶ奇き怪かいな癖くせは過か剰じような自意識の表れだが、事実、彼はその自負に足たる超ちよう越えつ的知性と、それ以上の熱情的狂きよう気きを兼かね備そなえているのだった。

「ついに完成！　完成したのである！　のひゃ、のひゃ、のひゃーっはっはっはっはっは！」

暗い地下室にひとり、腰こしのツイストも鋭するどく踊おどり狂くるうウェスト。この狂える天才の脳のう髄ずいが生み出したものとは、はたして何なのであろうか。

室内には複雑かつ不可解な機構を持つ機械装置が所せましと並び、その中央には数基の手術台がある。この地下室はかつて死体安置所として、その後にはウェストが医学的テーマを追究する際の私

設手術室として使用されていたものだ。部屋の隅すみのそこかしこには、今なお、死し臭しゆうにも似た気配がわだかまっている。

手術台の上には、それぞれに、人型をしたものが横たわっていた。だが、それらは人ではなく、生き物ですらない。時計の如ごとき精せい緻ちな内部構造をむき出しにしたそれらは、自律型の自動人形。これもまたドクター・ウェストの手になる被造物であり、この時代の科学技術の水準を大きく超こえたものである──が、ウェストにとって、それらはほんの通過点に過ぎない。

彼、ドクター・ウェストの最新のテーマは、自らを神と恃たのむ禁断の領域、すなわち「死の克こく服ふく」と「生命の創出」である。当初化学的手段──死者の肉体に対する、蘇そ生せい薬による賦ふ活かつ──によってその主題に迫せまり、しかしまた、その方法の限界を感じた彼は、その後発想を転じ、生命の無からの創造に着手したのだった。

そして、今宵こよい──その禁断の研究が、ついにひとつの実を結んだ。

ウェストはそれを高々と持ち上げた。

それこそは──

「おお、これこそは──六ろく弦げん式生命電気発生機『がんばれオルゴン』であ～～～る!!」

それは、一見してギターに似ていた。しかし、ギターの共鳴装置となる中空の胴どう体たいは存在せず、板状のボディから伸のびる電気コードが箱状の増幅器アンプにつながっていた。

──生命とは律動リズムであり、脈動パルスである。

一定の規則を以もつて拍はくを刻むエネルギーの流れ──それこそが生命の真しん髄ずいであるという見地に到とう達たつした彼が、生命エネルギーの電気科学的創出に挑いどむことは、もはや必然であった。

ウェストはギター型の生命電気発生機──面めん倒どうくさいので、以後単に〝ギター〟と呼ぶ──の弦をかき鳴らした。

増幅器を介かいし、禍まが々まがしき擬ぎ似じ生命の鼓動ビート

が地下室全体に轟とどろきわたる。

　ギュギョワイィーン!!　ィン、ィン、ィン……──

　ウェストはじっと目を閉じ、暗い室内に反はん響きようする余よ韻いんに聞きき惚ほれた。

「完かん璧ぺきである……おお……畏おそるべきかな、我わが輩はいことドクター・ウェスト」

　苦く悩のうするがごとくうつむいた姿勢から、カメラ目線（？）になった瞳ひとみが知性の光を放った。

「……なんという頭脳、なんという閃ひらめき」

　一転して天を仰あおぎながら髪かみを掻かき上げると、口元にのぞく白い歯がキラリ。

「あふれる才能、ハジケる若さ！」

　さらに、シャツを引きちぎらんばかりにもろ肌はだを脱ぬぐと、意外と可愛かわいい乳首がキュピーン。

「それに──脱いでもスゴイんデス!!」

　次の瞬しゆん間かん、ゴイ～ン、と、ウェストはギターを取り落とした。

「おおおおお……」

　自分ではだけた胸元を掻き寄せながら、よろよろと後ずさる。

「恐おそろしい！　我輩は自分が怖こわい！　完璧すぎてなんだか怖い！　本当にあった怖いわ・た・し♥　──ハッ！」

　ウェストは足首のひねりでギターを蹴け り上げ、一回転させながら構えると、ギュギョギョギョギョギョギョギョン！　と速はや弾びきを始める。

「そして、今度は濃こいお茶が一いつ杯ぱいコワいのであ────る！」

　ズギュ────ン！　ペレポロペレポロペレピョイィ

――――――ン!!

　ツッコむ者とておらぬ地下室にて、超ちよう天才はひとりノリノリであった。

　一方、その背後で――

　……ジジッ……。

　手術台に横たわる自動人形が、わずかな音を立てた。それはウェストの奏かなでる不協和音によって喚かん起きされた、擬似生命の兆きざしだった。

　モーターと歯車からなる虚うつろな体が時計の秒針を思わせる痙けい攣れんを始め、やがて冥めい府ふから呼よび戻もどされた死者さながらに、ぎこちない動きで起き上がり始めた。

　無論、彼らは死者ではない。しかし同時に、生者でもない。では、生命を持たぬ器物か――否、それも違ちがう。忌いまわしい半生命を得て立ち上がる彼らは今や、なにものにも属さない異形の存在となったのだ。

　ギシ――

　キシ、キシ――

　一体、また一体――呪のろわしき神秘科学の申し子が手術台から降り立った。自動人形たちはこわばった足取りで地下室を横切り、部屋の片かた隅すみでコトコトとなにかの作業を始める。

　邪じゃ教きようの儀ぎ式しきを行なう呪じゆ術じゆつ師さながら、いや、それそのもののトランス状態にあるウェストは、背後の状じよう況きように気づかない。自らの奏でる騒そう音おんに酔よい痴しれながら、激しいヘッドバンキングを繰くり返している。もはや完全なタテノリである。

　やがて、

「ありがとう諸君、ありがとォ――――――ッ!!」

　ピックを頭上にかざし、脳内大観衆の前でポーズを決めるウェストの目の前に、横手からスッと湯気の立ち昇のぼる湯ゆ呑のみが突

つき出だされた。

　一杯の、濃いィお茶であった。

「……お、これはどうも」

　ウェストは湯呑みを受け取り、ずずず……と中身をすする。

「うむッ！　よい茶であるッ!!」

　盆ぼんを抱かかえた自動人形が、照れたように後頭部に手を当てる。

「どぅわーっはっはっはっはっは！　ドォクタァァ――――ッ！　ウェェェストッッ!!」

　まさに絶好調の超天才・ドクター・ウェスト。彼はこの悪あく魔ま的被造物を用い、はたして何をしようというのか――

「……ふぃふぃふぃふぃ」

　ウェストはあごに手を当て、邪じゃ悪あくな含ふくみ笑わらいを漏もらした。

「さて、これからどうしよう、である！」

　――実はまだ、なにも考えていなかった。

+

　ある週末、夕刻のアーカムシティ。

　世界一の摩ま天てん楼ろうの基部は日暮れにともなって影かげに飲まれ、ちらほらと灯あかりが点ともり始めている。この魔ま都とが、内在するエネルギーによって自ら輝かがやき始めようという時刻だ。

　往来は昼間にも増して活気づきつつある。街路を行きかう路面電車、自動車、そして徒歩の人の群れ。エンジンとクラクションの

音、街頭商の呼び売りに混じる、行きずりの怒ど鳴なり合いの声──

『あー、そこ、そこ。喧けん嘩かはやめなさい。揉もめ事に関してはできるだけ話し合いで解決するように。必要ならば警官の立会いを──』

　拡声器から発する声に、通行人が一いつ瞬しゆん足を止めた──が、彼らは次の瞬間には、何事もなかったかのように再び歩き始める。肩かたがぶつかったのぶつからないので殴なぐり合いを始めかけていたふたりの男が、声の主に向かって毒づきながら、それぞれの道に分かれていった。

『うむ、よろしい』

　声の主は、アーカム治安警察のパトロールカーだ。

　その後も、

『あー、そこの車、危険なので所定の車線を外れないように』

『これ、そこで屯たむろしている集団、無許可の集会は法律で禁じられている。解散しなさい、解散』

　──と、道行く市民に向かって母親の小言のように口うるさく呼びかけながら、パトロールカーは車道をゆっくりと走る。

「いやあ、今日も平和だった」

　そう言って、助手席にだらりと座った無ぶ精しようひげの男が、煙草たばこの煙けむりを長く吐はいた。

　じきに早番の勤務が終わる時間だ。

「はッ、なによりの事であります」

　と、運転席の男が答えつつ、片手に握にぎったマイクのスイッチを入れる。

『あー、そこの君、道にゴミを捨ててはいけない。環かん境きよう美化はまず、ひとりひとりの心がけから──』

「明日も明後日も、この調子でずっと楽できるといいねェ」

　と―

「―ネス警部、『楽』だなどとは」

　マイクを切り、運転席の男が向き直った。

「われわれ公こう僕ぼくは平時にあってこそなお、実直に市民に仕え、かつ、そのよき規き範はんとなるべきであると心得ます」

「キミは真面目まじめだなあ、ストーン君」

「はッ、恐おそれ入ります」

「しかし、たまには息も抜ぬかなきゃ。おカタいばっかりじゃ嫌きらわれるよ」

「人気商売ではありませんので」

「いやいや、市民感情ってものも大切でしょ」

　そう言って、ネスは口元でグラスを傾かたむける仕草をした。

「ところでどうだい、帰りに一いつ杯ぱい。たまには地域経済の発展に貢こう献けんしようじゃないの」

「は、いえ……」

　それまで彫ちよう像ぞうのように取り付く島のなかったストーンが、初めて口ごもった。

「その、本官は少々野や暮ぼ用がありまして……」

「またかい？」

　ネスは目ま深ぶかにかぶっていた制せい帽ぼうを持ち上げ、ストーンの表情をうかがった。

「最近多いじゃないの。さては女コレでも出来たかな？　ん？」

　ネスが小指を立てると、ストーンの四角い顔が真っ赤になった。

「いえ、ソソソ、ソレ、いや、コレなどとは」

「冗じよう談だんだよ、冗談」

　実のところ、ネスはすでにストーンの〝野暮用〟の中身を知っていた──というより、毎夜、勤務時間が終わるなり大荷物を抱かかえていそいそと退勤するストーンの姿は署内でも名物となっていた。自分が目立っていることに、本人だけが気づいていないのである。

「……ところでストーン君」

「はッ」

「音楽ってのは、いいよねえ」

『あー、そこの──ぶふッ!?』

　ストーンはマイクに向かって変な息を噴ふき出した。

「よき音楽は心を豊かにしてくれるというか……そう、人生の友と言っていいだろうねえ」

「は、いや、ほ、本官はいたって無ぶ粋すいな人間でして、音楽であるとか芸術であるとか、そういった高こう尚しような趣しゆ味みについてはとんと疎うといのであります」

「……ふーん、そう」

「はッ」

　口元に微び妙みような笑えみを浮うかべてストーンの横顔を眺ながめていたネスが、やがて、ぽつりと言った。

「ストーン君、キミは面白い男だなあ」

「はあ──」

　その時。

　ドドドドドドドド──

　エンジンの爆ばく音おんを轟とどろかせながら、一台の大型バイクがパトロールカーの傍かたわらを通り過ぎた。

　ガラガラガラガラガラ──!!

　そのバイクは大きな荷物を引きずっていた。

　黒い棺かん桶おけを、三つ。

「ひゃは――ッはッはッはッは――――ッ!!　ドォクタァァァ――ッ！　ウェェェェストッッ!!」

　白衣の裾すそをはためかせ、ドップラー効果を起こしながら、彼、ドクター・ウェストの乗るバイク＆数じゆ珠ずつながりになった棺桶は、暴走列車のように通りをカッ飛んでいく。

「なんだ、ありゃ……？」

　ネスが呆あつ気けに取られ、

「な―」

　ストーンは反射的にアクセルを踏ふみ込んだ。

『こらァッ！　そこのバイク、止まりなさい！』

+

「汝なんじの欲するところを行なえ」―それこそが、魔ま術じゆつ結社〝ブラックロッジ〟の根幹をなす教義である。事実、結社に属する魔術師や下部構成員はみな、なによりもまず、それぞれの欲望に奉ほう仕ししている。権力欲、金銭欲、あるいはもっと根源的・本能的な、下げ卑ひともいうべき欲望の数々に……。

　だが、ドクター・ウェストは違ちがう。この世の全てを遊戯ゲームに見立て、手段こそを目的とする彼にとって、動物的本能に支配されることなど野暮の極み。彼の興味は、ただ自らの天才的知性を証明することにしかない。極度に趣味的なその生き様は、ある意味、結社の教義にもっとも近いと言えるかもしれない。

　そんな彼であるから、今日、この時も、なにか明確な指針があって町に出てきたわけではない。ただ新しい玩具の使い勝手を試してみようと思っただけだ。実際に行なうのは、銀行強ごう盗とうでも

破は壊かい活動でも、それこそ幼よう稚ち園えんの送そう迎げいバスのバスジャックでも、面白くて派手で悪げなことならなんでもよいのであった。

　それゆえに──

『止まりなさい！　そこの危険走行中のバイク、止まりなさい!!　そこの君、止まれと言っているッ！　いいから止まれッ！　止まらんか貴様ァ────ッ!!』

「──ぬッ!?」

　背後からサイレンを鳴らして追いすがる治安警察のパトロールカーに気がついた時、ウェストが感じたものは、焦あせりでもなければ恐きよう怖ふでもなかった。

「ぬふふ……面白いのである！」

　アーカム中央駅の駅前広場に差し掛かかったところで、ウェストは急ブレーキを掛け、

　ドガドガドガッ──

「のわが　っ!?」

　自ら曳ひいてきた三つの棺桶に慣かん性せいの法則に従って追つい突とつされ、バイクごとひっくりコケた。

　続いて停車したパトロールカーから、ふたり組の警官──ストーンとネスが飛び出してきた。

「そら、そんなふざけたバイクで走り回るから事故を起こすのだ！　反省せよ、反省ッ！」

「んー、確かに、次からこういうのは葬そう儀ぎ屋やに頼たのんだほうがいいかもねえ。さもなきゃ自分が頼まれる羽は目めになる──

と、キミ、平気かい？」

　すると―

「ふは――――ッはッはッはッはッは！」

　棺桶を撥はね除のけながら、ウェストはがばりと跳はね起おきた。ぷぴーっ、と、頭部から噴ふん水すいのように血を噴き出している。

「『平気か』とは一体誰だれに言っているのであるかね？　ひょっとしてこの我わが輩はい？　オウシット、そして笑しよう止し！　我輩ほどにオーライな者がこの往来に存在するとでも言うのであるかね、アーユーＯＫ？」

「ありゃ……ま、元気そうでなによりり」

　ネスが肩かたをすくめ、ストーンはむっとしながら右手を突つき出した。

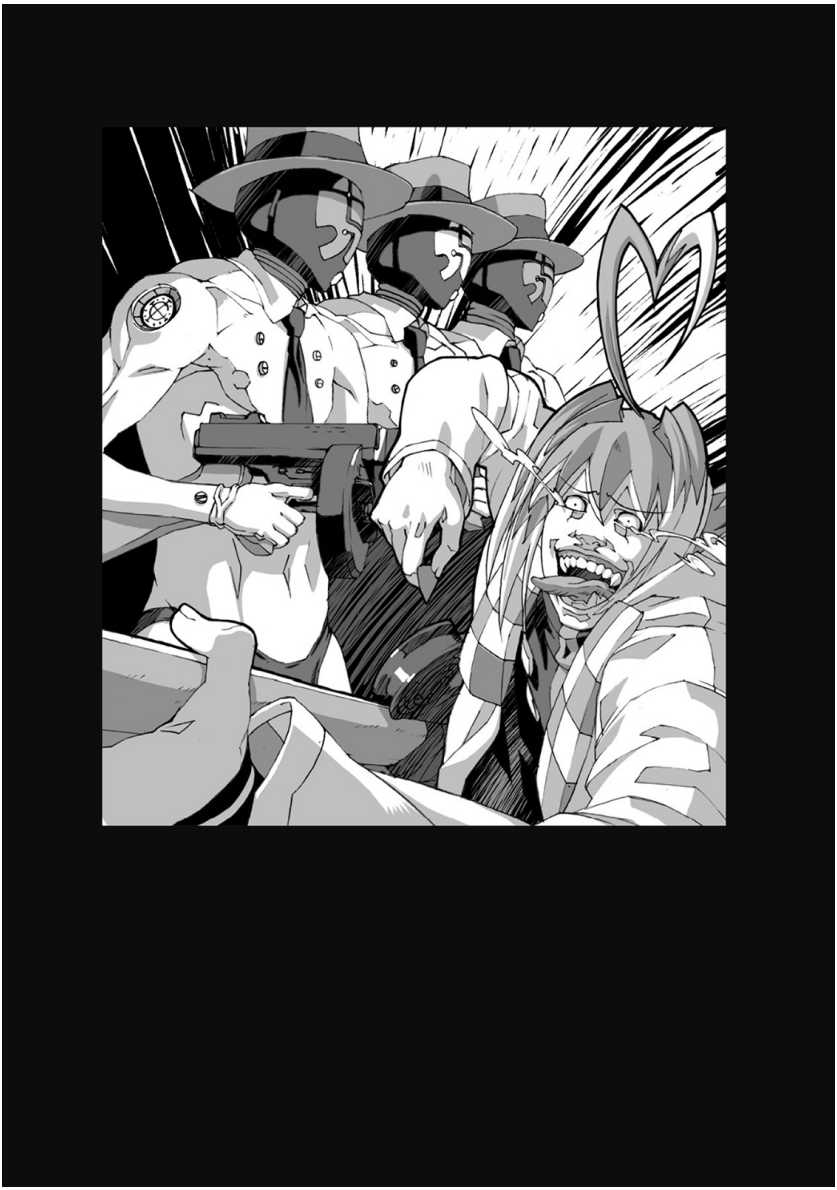
「よし、では免めん許きよ証しようを出せ。手続きが済んだら病院まで連れて行ってやる」

「ぬはははは！（ぷぴーっ）笑止、またしても笑止！　病院及および葬儀屋の心配をしなければならんのは貴様らのほうであーる！」

　突とつ如じよ、ウェストは白衣の懐ふところからギターを取り出し（どうやって収納していたのかは不明）、バイクの荷台に積まれたアンプに結線すると、ギョギョギョギョギョンとかき鳴らし始めた。「―出でよ、我が下僕たち！」

　バババン―！

　その騒そう音おんに叩たたき起こされたように、三つの棺桶の蓋ふたが内側から弾はじけ飛んだ。中から身を起こすのは、三人の黒ずくめの男たちだ。帽ぼう子しにネクタイ、手にはトンプソン機き関かん銃じゆうと、まるでマフィアの構成員のような恰かつ好こうだが、異様なのはその顔面―呪じゆ術じゆつ的な紋もん様ようをプリントした覆ふく面めんをすっぽりと被かぶっている。



「ぬう!?　またしても怪あやしい奴やつばら!!」

「チットモ怪しくなんかアリマセェ～ン！」

と、ウェストはインチキ外人のような口調で言った。

「これこそは―おお、これこそは！　我輩の開発した汎はん用よう人型人じん造ぞう人間なのであ～る!!」

　ギョアーン!!　ピレポレピレポレピョイィ――――ン！

「ぐわッ、しかも先ほどからなんだ、その騒音は!?」

「〝騒そう音おん〟？　今〝騒音〟と抜ぬかしくさったであるか？　ふふん、しょせん旧世代の無理解なオトナには我輩のソウル＆スピリッツは理解できんのであるな！　盗ぬすんだ校舎で走り出す十五の夜――――ッ!!」

　ギャギャギャギャン!!

「ぬおおおお、う、うるさいッ!!」

　ジジジッ―

　棺かん桶おけから立ち上がる人造人間の裾すそや襟えり元もとに、小さな火花が走った。ウェストのギターによって喚かん起きされた生命電気である。

「さあ、燃え上がれ立ち上がれよみがえれ！」

　ギターの音と共に、ぎこちなく立ち上がった三体の人造人間が、ジャキン―と、一いつ斉せいに機関銃を構えた。狙ねらいはストーンとネスに定まっている。

　ウェストは頭上にピックを掲かかげ、

「そして巨きよ大だいな敵を、撃うてよ撃てよ撃てよ――――ッ!!」

　殺さつ戮りくの開始を告げる死の音色を奏でるべく、それを振ふり下ろした。

　その瞬しゆん間かん―

　カーン。

　大きな鐘かねの音にウェストの手元がすっぽ抜け、人造人間はぴたりと動きを止めた。

　カーン、カーン、カーン……。

　ミスカトニック大学の時計塔とうの鐘が、五時を告げていた。

「おっ、定時だ」

　ネスはストーンの肩を叩いた。

「ストーン君、今日はもう上がろうや」

「は？　いやしかし、この超ちよう不ふ審しん人物は……？」

　ストーンはウェストを指差した。周囲にはざわざわと野や次じ馬うまが集まり始めている。

「んー、まあ見たトコ、手品とかパフォーマンスとか、それ系の人なわけでしょ、彼は」

「はあ……それならそれで、路上商しよう行こう為いの営業許可を確認せねばなりませんが」

「まあまあ、勤務中ならいざ知らず、その辺はテキトーでいいじゃないの。彼にも生活があるわけだし」

「はあ、しかし……」

「ま、そうカタいこと言わないで」

　渋しぶるストーンの背を叩いてパトロールカーへと促うながしつつ、ネスは背後を振り返った。

「―じゃ、キミもがんばって」

「あ……？」

　呆あつ気けに取られるウェストをひとり残して、警官コンビはすたすたと去っていく。

「こ……こらァ――――ッ!!　逃にげるか卑ひ怯きよう者！　我わが輩はいの新発明の餌え食じきとなって見事華はなと散らんか――――ッ!!」

　身勝手なことを言いながらウェストがギターを振り回すと、これも芸のうちと思ったか、観衆から拍はく手しゆが起きた。

「ぬぐぐぐぐ、下等動物の分際でこの我輩の存在を無視した罪、万死に値するのである──その罪、ここにいる野次馬どもに償つぐなってもらうのである！」

　どこをどう見ても完全に八つ当たりであるが、ともあれウェストがギターをかき鳴らすと、人造人間は再び動き出し、機き関かん銃じゆうの銃口を三方に向けた。人ひと垣がきに向かって無差別に銃じゆう弾だんを打ち込む構えだ。しかしこれも寸劇の類たぐいと思っている観衆は、それをよけようともせず、むしろ自らのぞき込むようにしている。

「レッツ・ジェノサ──イド!!」

「──おい、貴様！」

　突とつ然ぜんでかい声を掛かけられ、再びウェストの手元がすっぽ抜けた。

　人造人間もまた、ぎしりと動きを止める。

「……ぬ、戻もどって来たか、警官」

「ふん」

　大またで取って返してきたストーンは、なぜか制服の上着を脱ぬいでいた。そして、背中にはパトロールカーから持ち出したのか、なにやら大きな荷物を背負っている。

「本官は──いや、俺は貴様のような反社会的な人間は好かん。ただでかい音を立てることを自己主張と取り違ちがえているような輩やからには、ひとこと言ってやらねば気が済まん」

「にゃにおう!?　官憲の傲慢を地で行く物言いであるな！」

　ウェストばかりでなく、ストーンの居い丈たけ高だかな態度に、観衆から低いブーイングが起こる。

　険悪な空気を気にした様子もなく、ストーンは背負った包みのファスナーを開いた。

「──勘かん違ちがいをするな。本日の勤務は終しゆう了りようした。今の俺は警官ではない」

　包みの中から現れたのは、一本のアコースティック・ギターだった。

「よって――私人として、今から貴様に唄うたの心というものを教えてやる」

「……は？」

　きょとんとした顔で聞き返すウェストに答える代わりに、ストーンは首から下げたブルースハープを、ぷぺ～～……、と吹ふき、

　じょん、じょん、じょん、じょん……。

　と、ギターをかき鳴らし始めた。

　直立不動の姿勢に、正確無む比ひのリズム。愛想のかけらもない四角い顔と相まって、楽器を演奏していると言うよりは、工場の機械が動いているかのようだ。

　ごく短い前奏ののち、ストーンは低い声で歌い始めた。

　　ミスカトニックの　川の流れに

　　落ちた涙なみだの　行く末は

　　貴女あなたの去った　彼方かなたの街に

　　ああ　いつか

　　たどり着くでしょうか――

「こ、これは……!?」

　ウェストがたじろいだ。

　彼のみならず、その場にいる誰だれもが思った。

（……く……暗い！）

女め々めしいというか辛しん気き臭くさいというか貧びん乏ぼう臭いというか、それは聞いているだけで冷たい小雨が降ってきそうな低血圧フォークソングであった……が、歌っているストーンの顔は真しん剣けんそのもの。完全に目が据すわっている。下手へたなことを言うと殴なぐられそうなので、みな黙だまっていた。

神しん妙みように聞き入る観客の中で、ストーンの歌は続く。

肩かたこごめ　ひとり彷徨さまよう

リヴァー・ストリート

夜よ鷹たかの声が　長く尾おを引く

鈍にび色いろの街　冬のアーカム

「貴様──」

ようやく区切りがついたところで、ウェストは口を開いたが、

じょん、じょん、じょん、じょん……。

ストーンの演奏は終わらない。

「……二番ッ!!」

街は栄えて　人は流れて

古い港は　影かげもなく

貴女と行った　思い出の路みちは

ああ　すでに

摩ま天てん楼ろうに埋うもれて

肩よせて　ふたり歩いた

カレッヂ・ストリート

切妻屋根に　陽ひ射ざしの映える

いつか見た街　夏のアーカム

「ぬ……ぬぬぬぬ、負けてなるものか……!!」

　ウェストは殺さつ戮りくの鼓動ビートを刻むべく、ギターを構えなおした。

　ギュアーン!!　ギュギョギョギョギョ──!!

　だが──

　じょん、じょん、じょん、じょん……。

　揺ゆるぎない拍ひよう子しで続くストーンの演奏に引きずられ、いつの間にか、

　ギョン、ギョン、ギョン、ギョン……。

　と、同じ節を弾ひいてしまい、思うように人造人間を操ることが出来ない。

　そして、

「三番ッ!!」

　……ストーンの唄うたは三十五番まで続いた。

　決して上手うまい演奏ではなかったが、唄そのものより歌い手の持つ有無を言わせぬ迫はく力りよくに、最後の方は、なんかみんな正座して聞いていたという。

+

　ドクター・ウェストは、物忘れは激しいが執しゆう念ねん深い男である。

　路上パフォーマンスにおいてストーンに惨ざん敗ぱいを喫きつした彼が（この時点で目的がすり替かわっているが、気にしてはいけない）、新型メカを引っ提さげてリターンマッチに挑いどんだのは、ちょうど一週間後のことであった。

『だ―はははは――――ッ!!　ドォクタァァァ――――ッ！　ウェェェストゥッッ!!』

　轟ごう音おんを立てて通りを駆かけ抜ぬけるのは、大まかに言って、直径五メートルほどの巨きよ大だいな丸テーブルのような物体だ。ただし、四本の脚あしは節せつ足そく動物のような関かん節せつを備え、それぞれの先せん端たんに動力つきの車輪を備えている。

　この柔じゆう軟なんな機構によって、巨大テーブルは既き知ちのいかなる四足動物とも、はたまた自動車のような工業的産物とも違ちがう、新種の生き物の如ごとき動きで走行することができた。いや―ドクター・ウェストの生命電気によって駆く動どうするそれは、実際に一種の半生命体と言うべきものだ。

　これぞ名づけて、「スーパーウェスト自走ステージ『さあさ、みなさんお立ち台』」である。

　脚の関節によって路面の段差や高速走行による振しん動どうは吸収され、常に平へい衡こうが保たれている天板の上では、ドクター・ウェストと三体の人造人間がバンドを組み、大音量でロックを演奏していた。

『こら――――ッ！　そこの怪しいもの、止まれ――――ッ!!』

『やめられない止まらない、完全無欠のロケンローラ――――ッ♪　うふふふふ、つかまえてごらんなさァ～～～い、である♥』

　追いすがる治安警察のパトロールカーを悠ゆう々ゆうと引ひき離はなし、自走ステージはなめらかな動きで通りの角を曲がる。

「きゃっ!?」

　出会い頭に自走ステージの脚にぶつかりそうになったのは、眼鏡めがねをかけた若いシスターだった。シスターは買い物袋ぶくろを取り落としそうになりながら、走り去るステージの上を何事かと見上げた。マイクスタンドを前にノリノリで熱唱するウェストの姿が、急速に遠ざかっていく。

「まあ……！」

　一いつ瞬しゆんの驚おどろきの表情から、シスターの口元に笑えみが浮うかび、眼鏡のフレームがキラリと光った。

『どぅわーっはっはっはっはっは！　勝利！　我わが輩はいの勝利である!!』

　ステージの上で跳はね踊おどりながら、ドクター・ウェストは勝かちどきを上げた。

　勝利の鍵かぎは〝速度〟である。あの忌いまわしい陰いん気きな音色を立てる男が追いつけない速度で走っている限り、ウェストの演奏が邪じゃや魔まされることはない。

　と、そこに──

「ごきげんよう、みなさぁん」

　若い女の声が掛かかった。

「なぬッ!?」

　振ふり返ってみれば、ステージの上に、黒い服の裾すそをはためかせながら、眼鏡をかけたシスターが立っている。

「貴様、何者!?」

　ウェストは身構えた。

　──この女、自動車以上の速度で走行する自走ステージにどうやって乗ってきたのか？　また、その目的は？

「いえ、あなたがあんまり楽しそうに歌ってらっしゃるものですからぁ」

　春の陽射しを思わせるのほほんとした口調で言いながら、シスターはウェストに歩み寄り、マイクスタンドをさっと奪うばい取った。そして、

「私も一曲、よろしいかしらぁ。──はァ～～♪」

　ウェストの返事を待たずに、バンドに向かって指先でキューを出す。

「ン夢見てもォ～～～～ッ、いいィ～～～ですかァ～～～～～～ッ」

　のっけから女の情念系である。しかも、めちゃめちゃコブシが利いていた。

死んだふりでもないけれど

まぶたに浮かぶ面おも影かげに

いつか　いつか

はかり知れない遠い日に　いつか……

瑠る璃りの館に横たわり　わたし

くるる　くるる

くるりくるりと待ってます

ああ　夢見るままに待ってま──

「やめやめやめ、ド演歌やめ――ッ!!」

　ドクター・ウェストがマイクを奪い取った時には、人造人間も自走ステージも、すっかり演歌のテンポに影えい響きようされて浪花なにわ節ぶしになっていた。

　──これはまずい。

「は、早くソウルフルなビートで加速するのである！」

　ウェストはあわててギターを構えたが、時すでに遅おそし。

　じょん、じょん、じょん、じょん……。

　妙みように機械的なアコースティック・ギターの音と共に、ストーンがステージに上がってきた。歩調も表情もまったく崩くずさないその有様は、フォークシンガーというよりターミネーター。

　……一時間後、ウェストはステージの上で正座しながらストーンの唄うたを聞いていた。

　新曲が増えていた。

（ぬぬぬぬぬ、この屈くつ辱じよく、百万倍にして返してやるのである！）

　しびれる膝ひざをぎゅっとつかみながら、ウェストは心に誓ちかった。しかし、殴なぐられそうなので口には出さなかった。

+

　さらに一週間後、昼近く。

『ドォクタァァァ――ッ！　ウェエエエエストッッ!!』

　今週の新発明「スーパーウェスト武装ステージ『難なん攻こう不ふ落らくのロックンローラー』」は直径、高さ、共に約十メートル。ちょっとした建物ほどの大きさがあり、屋上の縁ふちには大口径の機き関かん砲ほうが四基も据すえ付けられていた。つまり、

『邪じや魔まする奴やつは指先ひとつでダウンなのであ――る!!』

　ギョワワワワ――ン！

　ギターの音と共に、

　ドドドドドドッ!!

　と、機関砲が火を噴ふき、最初の一いつ斉せい射しやでパトロールカーが爆ばく発はつ炎えん上じようした。

「「どわあッ!!」」

　ネスとストーンはハモりながら脱だつ出しゆつし、あおりを食らった通行人が悲鳴を上げた。

『だひゃ――ッひゃッひゃッひゃッひゃッ!!　そぉーれ、どいつもこいつもどいつもこいつもッ！　我わが輩はいの音楽性の前に屈くつ服ぷくするがよいのであーる!!』

「いやあ……こういうの、〝音楽性〟って言うかねえ」

　ネスが帽ぼう子しでズボンの火の粉を払はらいながら言い、

「ぬおおおおッ!!」

　ギターをつかんだストーンが武装ステージへ突とつ進しんしていく。

「おー、元気だなあ」

　と、帽子を被かぶり直すネスの背に、声が掛かかった。

「あのー」

　声の主は、東洋人の若者だった。歳はまだ二十歳前だろう。少年の面影を残す細面に、伸のび放題の髪かみ、垢あかじみたシャツ。大きなバッグひとつを背負った姿は、身ひとつで故郷の国を飛び出してきた若き移民者──といったところか。

「えーと、ちょっと道を聞き……たかったんですけど、お取り込み中っスか」

「いやいや、なんでも聞いてよ。こっちはそれも給料のうちさ」

「はあ、どうも……」

　武装ステージの方をちらちらと気にしながら、青年は地図を広げた。

「じゃ、ええと、ミスカトニック大学っていうのは……？」

「ははは」

「え？」

「いや失敬、キミ、この街は初めてだね」

　ネスは懐ふところから煙草たばこを取り出しながら、数ブロック先の高い塔とうを指した。青年はつられてその先に視線を送る。

　塔の頂上近くに、大きな時計の文字盤ばんがはまっていた。

「ミスカトニック大の時計塔と言えば、このアーカムで一番目立つ建物さ。『駅前から大学を探して道に迷う』なんてのは――」

「俺みたいな田舎いなか者くらい、ですかね」

　青年が笑いながら言い、ネスは苦笑しながら肩かたをすくめた。

「それじゃ、荷物と命に気をつけて。この都ま市ちはいいところだけど、ちょっと物ぶつ騒そうなところもあるから」

「どうも……ところで、あの」

　青年は地図をたたみながら、ちらりとステージの方を見た。

「今日はなにかのお祭りっスか？」

「え？　ああ……ぷはは」

　怪け訝げんな顔をする青年に、ネスは軽く手を振ふって詫わびた。

「いや、失しつ敬けい失敬。そうだな、君の言う通り――つまり、ここはいつでもなにかのお祭りなんだ」

「なるほどね」

　青年は肩をすくめると、バッグを背負い直して歩きだした。

　ネスは青年の背を見送りながら煙草に火をつけ、深々と煙けむりを吸い込んだ。

　ステージの方から、ストーンの怒ど鳴なり声が聞こえてくる。

「貴様ァ、降りてこんかァ――――ッ！」

『どぅわーっはっはっはっはっは！　くやしかったら登ってくるがいいのであーる！　うひゃひゃひゃひゃ、ドクタァァァ――――ッ！　ウェェェェストッッ!!』

　ギョ――――ン！　ポロピレポロピレポロピレ――

　そこに、

『ごきげんよう、みなさぁん♥　ンまたまた歌わせていただきますッ！』

『ぎゃ――ッ！　また出た――ッ!?』

　そうした騒そう々ぞうしいやり取りさえも、街の喧けん騒そうの中に呑のまれていく。青年の姿が雑ざつ踏とうに消えていくように。煙草の煙が空気に紛まぎれていくように。

　そうとも、ここはアーカム。全てを呑み込み、あらゆる可能性を孕はらむ街だ。

「今日もお祭り、明日もお祭り。そしてまた、なべて世はこともなし……と」

　ネスがつぶやいた、ちょうどその時。

　カーン、カーン、カーン……。

　時計塔が、正午の鐘かねを撞つき始めた。

+

　ところでその夜。

　手て狭ぜまになった地下実験室から〝ブラックロッジ〟本ほん拠きよの秘密工場に場所を移し、ドクター・ウェストは武装ステージの設計改良を進めていた。

　より巨きよ大だいに、より堅けん牢ろうに、そしてより破は壊かい的に。ミサイル、ガトリング砲ほう、各種光線兵器、その他もろもろ、必要不必要を問わずあらゆる兵器を装備し――

　だが、なにかが足りない。

　――そのように、天才の直感が告げていた。さらに、なにかもう一要素……。

「うーむ……」

　しばし黙もつ考こうののち、閃せん光こうの如ごときひらめきが訪れた。ウェストは手元の設計図に何事か書き込み、そして、会かい心しんの笑えみを浮うかべる。

　それは、一対のアームに取り付けられた、巨大なドリルだった。

「か、完かん璧ぺき！　完璧である！　ふ……ふふふふふ……」

　ドクター・ウェストはやがて、中空を仰あおいで哄こう笑しようした。巨大なドラム缶かん型のスーパーマシーンがふたつのドリルを振りかざす男前な有様が、彼の頭脳にははっきりとイメージされていた。

「ふは――っはっはっはっはっは！」

　ドギョ――――ン！　ピョレピョレピョレピョイィ――――ン!!

　工場の構内に響ひびき渡わたるギターの音に乗って、何十体もの人造人間が動き出す。彼ら、異形の神秘科学の申し子たちの、最新にして最大の眷けん属ぞくを生み出すために―

「ドォクタァァァ――ッ！　ウェェェェストッッ!!」

　……そう、神ならぬ造物主、懲こりない天才・ドクター・ウェストの名を冠かんした、超ちようイカス破壊の化け身しんが、今まさに誕生しようとしているのだった。

# あとがき

『斬魔大聖デモンベイン』との最初のご縁えんが出来てから、およそ三年。当初の予想より長いおつき合いになりました。その間に文庫版の外伝を二冊、雑誌掲けい載さい用の短編を二本書かせていただいたわけですが──外伝二巻の作業も終わりかけた頃ころ、「もう一本短編書いたら、雑誌の短編も本にできますよ」というお話が。

というわけで、外伝三冊目、『斬魔大聖デモンベイン　ド・マリニーの時計』です。

収録した三本の短編は、つい先日に書き上がったものもあれば、二年ほど前のものもあり、なかなか感かん慨がい深いものがあります。

以下、各話の解説など──

「ド・マリニーの時計」

これは一年ほど前、「ザ・スニーカー」誌のデモンベインアニメ化特集に合わせて書いたもので、初見の読者さん向けに原作の基本設定や登場人物をひと通り紹しよう介かいしつつ、原作前半の基本パターンである「ドクター・ウェストと小こ競ぜり合あいをしつつ、アル・アジフのロストページを回収する」という話をやりました。

「デモンベインって興味あるんだけど、どこから手をつけたらいいのやら」という人に、お試ためしで読んでいただけたら、と思います。

「遺ト跡ウー破ムバ壊スタ者ー」

この文庫用の書き下ろし。

原作ゲーム第二弾だん『機神飛翔』の新登場キャラ、ラバン・シュリュズベリイ博士を中心に一本。原作ゲームの一作目より十年ほど前の話になります。

シュリュズベリイ博士というのは、元々はオーガスト・ダーレスの連作短編『永劫の探究』の登場人物で、クトゥルーの勢力に対たい抗こうするために、その拠きよ点てんをガンガン探さぐり出してはバンバン破壊しているという、あんまりといえばあんまりなヒト。デモンベイン世界においては、デモンベイン、アイオーンに次ぐ第三の〝人類側の鬼デウ械ス・神マキナ〟の使い手として、おいしいところを持っていきます。

一方、そんなシュリュズベリイ博士に出会う視点人物として、ドクター・ウェスト（の若い頃）を配置しました。

普ふ段だんは無敵の唯ゆい我が独尊ぶりを誇ほこっているドクター・ウェストですが、たぶんシュリュズベリイ博士みたいなタイプは苦手だろうなあ、しかし、シュリュズベリイ博士のほうはドクター・ウェストみたいなやんちゃな若者は好きそうだなあ、などと思いながら書きました。

「破壊の序曲」

今回収録の三本の中では一番古い作品。作中の時間はゲーム本編の二、三年前。

ドクター・ウェストが書きたくて自主的に書かせてもらったもので、そのうちムックの隅すみっこにでも載のせてもらえるといいな、と思っていたら、「ザ・スニーカー」誌のニトロプラス特集号に巻頭で載ってしまい、恥はずかしいやら申し訳ないやら。浮ういてたかも……。

―ところで、実は私、上手うまく時間が取れなくて、最近まで『機神飛翔』を積みっぱなしにしてまして……。いや、シナリオをひと通りいただいたのでストーリーは分かっていたのですが、『遺ト跡ウー破ムバ壊スタ者ー』の書き下ろし作業の最中に「やっぱりちゃんとプレイして書かなきゃイカンな」と、いただいたソフトを

引っ張り出してクリアしました。

　で、エンディングでは、やっぱりちょっとジーンとしてしまいましたね。

　ゲームの一作目からこっち、作品の内外で続いた盛り上がりの渦うずが、ここでひとつのクライマックスを迎むかえたんだなあ、と。

　私はその渦の隅っこにお邪じゃ魔ましてへらへらしていただけですが、それでもやっぱり「ここにいさせてもらってよかったなあ」と思ったことです。なんというか、いい〝お祭り〟でした。またアニメ化とかしないかなー。

　最後に、例によって関係者のみなさまに感謝いたします。

　今回は（Ｎｉ　　さんのイラスト含ふくめ）原げん稿こうの半分が過去に上がっていたものだったので、お掛かけした迷めい惑わくの度合いも半分くらい……と思いたいところですが、やっぱりまあ、なんというか、それなりに……。

　ともあれ、担当編集さん、Ｎｉ　　さん、鋼屋ジンさん、その他、この本の製作流通に関かかわったみなさん、それにもちろん読者のみなさん、どうもありがとうございました。

　ではまた、いずれどこかで。

古橋　秀之

解説

鋼屋　ジン

やぁ、またお会いしましたね。貴方あなたとこうしてお話しするのもこれで三度目になりましょうか。もしかしたら以前にも、いろんな場所でお会いしているかも知れませんが……マァそこらの思い出話はまた別の機会、別の場所でということにしておきましょう。

何はともあれ、貴方と再びこの場所でお会いできたという事実が、私には嬉うれしいのです。我々はよほど趣しゆ味みが合うらしい。ええ、そうです。「フルハシ」でございますよ。

はてさて古橋秀之氏による『デモンベイン』もこれで三冊目と相成りました。今回は「ザ・スニーカー」に掲けい載さいされた短編二本に新作書下ろしを加えた作品集、しかもそのすべてがあの狂マツド科・サイ学エンテ者イストドクター・ウェストをメインに据すえたお話なのでございます。すなわちこの本一冊まるごとドクター・ウェスト祭！　嗚呼ああ、なんて素す晴ばらしい！

──無茶にも程ほどがあるぞ、この本。

何はともあれトリックスターであるドクター・ウェストのキャラクターは、同じく天性のトリックスターである古橋氏とよく馴な染じむのでしょう。本書は『機神胎動』や『軍神強襲』とまた一味違ちがう「古橋デモベ」の魅み力りよくがふんだんに盛り込まれております。

それではさっそく各作品について触ふれていってみましょうか。

「ド・マリニーの時計」

本書の題名にもなっているこのお話、『斬魔大聖（もしくは機神咆吼）』ゲーム本編に挿そう入にゆうされていてもなんら違い和わ感かんない、極ごく上じようの一品でございます。いわゆる「ペー

ジ探し」の逸エピ話ソードでして「時計＝時間に関かかわる魔アーテ導イフ具アクト」を題材に扱あつかったトリッキーな構成が、氏のオリジナル短編集『ある日、爆弾がおちてきて』を彷ほう彿ふつとさせます。まさに御お家は芸こといったところでしょうか。

　またオチでお気づきかと思いますが、この作品もまた『軍神強襲』と同じく『機神飛翔』の（設定部分の）伏ふく線せんとして機能しております。小さな「時間」の物語が巨大な「時間」の物語を暗あん示じする──その仕組みが美しいではありませんか。

「遺ト跡ウー破ムバ壊スタ者ー」

　書き下ろしの新作でございます。世界を股またにかけて活躍するのは若かりし日のドクター・ウェスト、そして不ふ屈くつの邪神ホラー狩人ハンターラバン・シュリュズベリイ！（悪）夢のタッグマッチ実現でございます。

　あえて断言しましょう。傑けつ作さくです。まさにデモンベイン版『永劫の探究』と呼ぶに相応ふさわしいシュリュズベリイ博士の大活劇。特に邪じゃ神しんの眷けん属ぞくが引き起こす怪かい異いの描びよう写しゃが秀しゆう逸いつで、フルハシ的奇き抜ばつさ、デモンベイン的荒こう唐とう無む稽けいさを備えつつ、同時にきわめて「クトゥルー神話」的なイメージに満ち溢あふれております。

　神話的に正統派ともいえる展開で物語は進行し、そして最後に待ち受ける怪異の舞ぶ台たいが……まぁ、その、なんだ。なんと申しましょうか。あるいは『軍神強襲』の「火星人」を超こえる衝しょう撃げきかも知れません。

　……つか『永劫の探究』を題材にして、どうやったらこんな着想がわいてくるのか。しかも確かにクトゥルーっぽい。凄すごい。凄いけど酷ひどい。恐おそるべしフルハシ。

「破壊の序曲」

　古橋秀之氏の何が凄いと申しますと、つまりはこういうことではないでしょうか。

「講こう釈しやく師し　見てきたような　嘘うそをつき」

　原作の隙すき間まを突ついて、如い何かにもな大おお法ぼ螺らを堂々と吹ふく。その鮮あざやかで大だい胆たん不敵な手練手管こそフルハシなのではないでしょうか。

　というわけでこの作品では『斬魔大聖』本編より少し前の物語。言うなればドクター・ウェストが、アーカムシティのドクター・ウェストになる過程を描えがいたものでございます。そうなのです。ドクター・ウェストの奇き天て烈れつな発明には、ちゃんと背景的な意味があったのでございます。まさしく驚おどろきです。たぶん俺が一番驚いた。

　加えてアーカムシティの混こん沌とんぶりがよく伝わる作品でもあります。なんだかんだ言って、この街に生きる人間は日々を全力で楽しんでいそうです。善悪／正邪／清せい濁だくあわせてまるごと呑のみ込んで、何もかもを祭の活力へと変えてしまう世紀の大妖よう都と櫃夢アーカム。まっこと世は大黄金時代にして大混乱時代にして大暗黒時代でございます。

　さてさて足早に語らせていただきましたが、兎とにも角にも私めが申したいことはこの本が心底楽しい『デモンベイン』であるということです。私と趣味を同じくする貴方なら既すでにおわかりかと思います。読書の喜びは確たしかにここに在るのだと。

　それではそろそろお別れの時間です。またいつか、この本のような喜びの地でお会いできたら素敵ですね？

〈初出〉

ド・マリニーの時計……「ザ・スニーカー」二〇〇六年四月号

遺ト跡ウー破ムバ壊スタ者ー……書き下ろし

破壊の序曲……「ザ・スニーカー」二〇〇五年四月号

カバー・口絵・本文イラスト / Ｎｉ

カバー・本文デザイン / タケウチユタカ + ｆｏｃｏ

(C) Nitroplus 2003, 2006

斬ざん魔ま大たい聖せいデモンベイン

ド・マリニーの時と計けい

原作：鋼はがね屋やジン（Nitroplus）

著：古ふる橋はし秀ひで之ゆき

平成25年12月1日　発行

(C) Nitroplus 2003, 2006, Hideyuki FURUHASHI 2006

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『斬魔大聖デモンベイン　ド・マリニーの時計』

平成18年12月31日初版発行

発行者　山下直久

発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745（営業）

編集　角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19

03-3238-8694（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/

BOOK☆WALKER